

2020年度 活動報告書

法政大学ボランティアセンター

2020年度 法政大学ボランティアセンター 活動報告書 目次

2020年度ボランティアセンター活動報告

巻頭言（伊藤マモル 全学ボランティアセンター長）	1
ボランティアセンターについて	3

市ヶ谷ボランティアセンターについて

2020年度 市ヶ谷ボランティアセンター活動の概要	5
2020年度 市ヶ谷ボランティアセンター運営委員会	7
2020年度 市ヶ谷ボランティアセンター来室者数集計	8
2020年度 市ヶ谷ボランティアセンター学生団体の紹介	9
2020年度 市ヶ谷ボランティアセンターイベントカレンダー	11
2020年度 市ヶ谷ボランティアセンター活動の報告	15

多摩ボランティアセンターについて

2020年度 多摩ボランティアセンターの活動の概要 （大崎 雄二 多摩ボランティアセンター長）	73
2020年度 多摩ボランティアセンター来室者数集計	75
2020年度 多摩ボランティアセンター学生団体の紹介	76
2020年度 多摩ボランティアセンターイベントカレンダー	77
2020年度 多摩ボランティアセンター活動の報告	79

小金井ボランティアセンターについて

2020年度 小金井ボランティアセンター活動の概要、活動総括 （小西 克巳 小金井ボランティアセンター長）	85
2020年度 小金井キャンパス ボランティア活動カレンダー（参考）	86
2020年度 小金井ボランティア活動・研究公開サポート制度採択状況（参考）	87

2020年度採択された助成金一覧・メディア掲載一覧	88
---------------------------	----

「新型コロナ終息後のボランティアセンターへの期待」

全学ボランティアセンター長 伊藤マモル

1. はじめに

法政大学ボランティアセンター（以下、本学ボラセン）の2020年度報告書をお届けします。

2009年4月に3キャンパス（市ヶ谷・多摩・小金井）同時に設立されたボラセンは、各キャンパスの学部特性や地域性に合わせた活動を行う学生たちの支援を継承しています。それらの活動記録は、法政大学ホームページから「学生生活・スポーツ」にアクセスし、「学生生活サポート」、「ボランティア活動支援」をたどり、「ボランティアセンター（<https://www.hosei.ac.jp/volunteer/>）」でご覧いただけます。

しかしながら、2020年度のボラセンの活動は、新型コロナウイルス（以下、Covid-19）による甚大な影響を受けました。具体的には、市ヶ谷ボラセンが掲げていた1) 東京2020に関する講座 2) 近隣施設と連携した新規プログラム 3) 震災復興支援ボランティアの取組みと継続 4) 基幹プロジェクトの継続的实施と見直し 5) 学内イベントの継続的实施と見直し 6) 学生スタッフの育成 7) 3キャンパスボランティアセンターの連携をはじめ、各キャンパスを拠点に活動する学生団体の企画のほとんどすべてが中止または縮小、延期に追い込まれ、多くの学生が涙を飲みました。

ところが、ボランティア精神あふれる学生たちの士気やモチベーションは、世界的規模の歴史的苦難に喘ぐ中で、スローダウンをしたものの、完全にストップすることなく、彼らの熱い志はまったく消えることはありませんでした。これもひとえに、ボランティアセンターの職員の皆様が全力で学生たちを見守り、的確な助言と協力を惜しみなく与えて下さったからに他ならないと思います。職員の皆様ご自身もCovid-19で辛い制約を受ける中、学生への温かいご支援にただただ感謝を申し上げるだけです。

2. Covid-19禍の2020年度を振り返ると…

改めて述べるまでもなく、ボランティア活動の多くは対面で取組むことが基本であるため、Covid-19の感染拡大防止の根っことなる、いわゆる三密（密集・密接・密閉）を避けることは極めて難しく、活動の障壁となりました。そもそも、Covid-19から学生ならびに教職員の安全を守る観点から、本学の授業形態は対面禁止措置が講じられ、課外活動も原則禁止されていました。そのため、2020年度は、新入生を歓迎する多くのプログラムに加え、ボラセン学生団体（以下、サークル）に勧誘するなどの対面活動が不可能になるという前代未聞の異例な状況からスタートし、学生が集い賑わうはずのボラセンでは静かな日々が続きました。

例年であれば、サークルのメンバーとなった新入生たちと一緒に訪問していた子ども食堂や高齢者施設の支援、地域の清掃活動やエコキャップの回収ですら中止となりました。また、令和2年7月豪雨で必要とされたボランティアも県をまたぐ移動の自粛により、県外からのボランティアを受け入れてもらえず、地団太を踏む学生も多くいたようです。しかし、ボラセンでは早い段階からCovid-19禍におけるボランティア活動の再構築の必然性を見通し、新たな活動への転換を具現化するために試行錯誤を重ねていました。その一例として、市ヶ谷ボラセン内に常設したZoomによるオンライン窓口は予想以上の成果をあげ、ボランティアの啓発講座企画や秋学期に向けた円滑な活動準備を進めることに繋がりました。

本学では10月初旬から、Covid-19 感染対策・行動指針がレベル2に引き下げられ、感染対策を徹底することを条件に対面でのボランティア活動が行えるようになりました。そのおかげで、『防災キャンプ』や『東北被災地ボランティアツアー』『岩手・宮城被災地スタディツアー&オンライン中継(参加できなかった人たちとオンラインでリアルタイムにつながる)』『オンラインでの学外近隣地域と連携した活動』などの実現にこぎつきました。また、被災地のがれきやゴミ・泥の除去、支援物資の仕分けなどが主となる災害支援ボランティアに長年取り組んできたチーム・オレンジは、防災カルタ、HUG(避難所運営ゲーム)やなまずのクイズ学校などを駆使した防災啓発ボランティアへの取組みを深める動きが活発化し、2回目の防災キャンプを成功させました。これらの詳細は本誌の中でご確認いただき、教育や研究に通ずる多くのヒントや新たなボランティア活動のアイデアにつなげていただければ幸いです。

3. Covid-19が収束した後のボランティア活動

インドの作家アルンダティ・ロイは「The Pandemic Is a Portal (パンデミックは発端にすぎない)」と題したエッセイの中で、「歴史的に、パンデミックによって人々は過去と決別させられ、自分たちの世界を強制的に想像しなおすことになった。今回のパンデミックも例外ではなく、入口であり、ひとつの世界から次の世界への通り道なのだ」と書いている。これは、『2020年6月ファイナンス & デイベロップメント』に特集された「新型コロナ後、世界はどう変わるか?」

URL:<https://www.imf.org/external/japanese/pubs/ft/fandd/2020/06/pdf/Post-COVID19World.pdf>

(2021年3月28日 08:18UTC 閲覧)において、ユーロダッド(債務と開発に関するヨーロッパ・ネットワーク)のディレクターであるジーン・サルダナが引用した一節です。

言い換えれば、学生ボランティア活動には、今までと同じ方法に頼りきらず、今後も起こり得る予測不可能な大規模自然災害やパンデミックに備えた危機管理体制の再構築を視野に入れた、サステイナブルなボランティア活動の模索が必要だということではないでしょうか。

ボランティア活動と言えば、物質的な支援、時間と体力を提供することだと受け止められがちですが、ボランティアにも多様性が必然となった昨今です。もちろん、ボランティアには多くの目的やジャンルが存在するのですから、対面で身体を動かすボランティアだけでなく、見守るボランティア活動や支えるボランティア活動があっただけでいいということではありません。その場所に行かなくてもできるボランティア活動があるわけで、自分のペースで無理なく、自分で考えたボランティアに取り組めれば、今まで以上に活動の幅が膨らむはずですよ。そうならば、学生たちのボランティア活動が、大学を超えた幅広い地域や世界と繋がることになるでしょう。実際、VSPではCovid-19の影響で来日できなくなったベイラー大学の日本語学習・日本との交流をオンラインで支援しました。

来る2021年度は、本学ボラセンもその枠組みや仕組みを見直すチャンスです。2020年末に開催した3キャンパス・ボラセン運営委員会でもそのことが議論され、3キャンパスの連帯意識を高め、各キャンパスに分かれて活動していた同様な学生企画の連携を後押しすることで、学生たちの社会的貢献度をさらに高めていくことになりました。来年度以降、トライ&エラーを繰り返しながら新しい大学ボランティア活動の姿を模索することで、徐々にその成果が表れてくることを期待するとともに、さらなる皆様のご理解・ご支援をお願い申し上げます。

ボランティアセンターについて

1 活動内容

(1) ボランティアコーディネート（情報収集／情報提供）

大学に数多く寄せられるボランティア情報を審査し、学生が活動するのに適したボランティア情報を厳選して、掲示板／ラック／ファイリング／メーリングリスト等で公開しています。

(2) ボランティア活動促進

ボランティア講座などを実施しています。学生自ら企画、実践するボランティアプログラムやボランティア講座のサポートも行なっています。

(3) ボランティアサークル活動支援

ボランティアサークルの合同新入生説明会を行っています。また、各ボランティアサークルがイベント等を開催する際は、広報等で積極的に協力します。

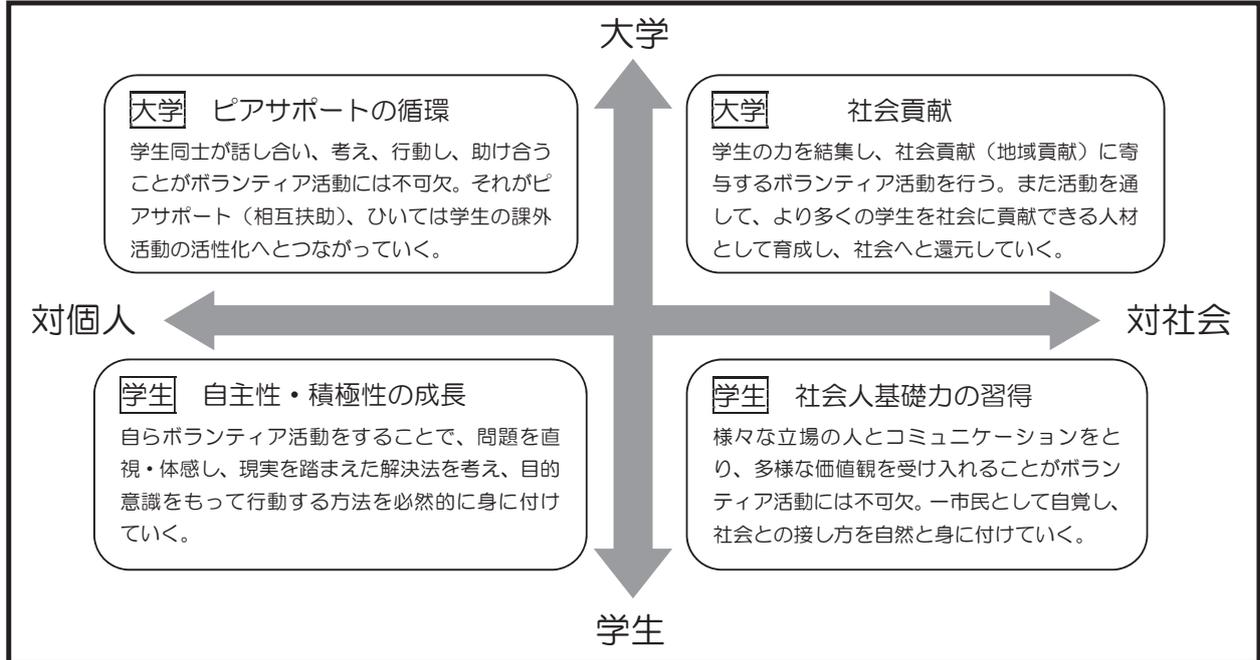
(4) 学内外ネットワークの構築

各キャンパス周辺地域やボランティア活動先の自治体、・教育機関・大学近隣の千代田区などと相互に連携をとり、地域貢献を主とする活動をしています。さらに学生スタッフが中心となり、他大学とも交流をはかっています。

(5) 学生スタッフの募集・育成

ボランティアセンターの運営に積極的に協力していただける学生スタッフを随時募集しています。また学生スタッフ育成のために、職員による入会時の面談や、年2回ピアネット研修を行っています。

2 ボランティアセンターの役割



3 ボランティアセンター全学運営委員会

日程：2021年1月28日

議題：各地区からの活動報告及び今後の活動計画、新型コロナウイルス感染症関連の情報共有等、他

市ヶ谷ボランティアセンターについて

2020年度	市ヶ谷ボランティアセンター活動の概要	5
2020年度	市ヶ谷ボランティアセンター運営委員会	7
2020年度	市ヶ谷ボランティアセンター来室者数集計	8
2020年度	市ヶ谷ボランティアセンター学生団体の紹介	9
2020年度	市ヶ谷ボランティアセンターイベントカレンダー	11
2020年度	市ヶ谷ボランティアセンター活動の報告	15

2020 年度市ヶ谷ボランティアセンター活動の概要

1. 活動目的と活動目標

■活動目的：本学学部生のボランティア活動の促進

■活動目標（2020 年度）

- (1) 東京 2020 応援プログラムの実施
- (2) 近隣の施設と連携した新規プログラムの実施
- (3) 震災復興支援・防災啓発活動への取り組みの継続
- (4) 基幹プロジェクトの継続的实施と見直しの実施
- (5) 学内イベントの継続的实施と見直しの実施
- (6) 学生スタッフの育成
- (7) キャンパスボランティアセンターの連携

2. COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の活動への影響について

2020 年度の活動に関しては新型コロナウイルス感染症の影響を受け、ボランティアセンターの活動が著しく制限されることになった。春学期は新型コロナウイルス感染症の影響で授業形態も変わり、課外活動においても活動禁止となっていたため、学生、ボランティアセンター共にコロナ禍での活動を模索していく時期となった。春学期後半からは緊急事態宣言も解除され、コロナ禍の状況に少しずつ適応することができ、ボランティアセンターに Zoom で窓口を開設したり、Zoom を活用したボランティア活動啓発講座の企画を立てる等、少しずつ秋学期に活動ができるよう準備を進めることができた。

秋学期に関しては 10 月 5 日より本学の新型コロナウイルス感染症に対する行動方針がレベル 2 に引き下げられたことにより、対面でのボランティア活動についても感染対策を徹底することで活動が可能となった。そのため今までできなかったような「東北被災地ボランティアツアー」や「防災キャンプ」等を実施することができた。また、春学期から企画を進めていた Zoom でのボランティア活動啓発講座も多く実現することができ、秋学期はプログラム数で考えると例年並みに活動ができたといえる。学外と連携しながら行っているボランティア活動についてはオンライン上でできるボランティアの依頼が荒川区から 2 件、埼玉県から 1 件あり、活動に参加した。しかしながら、例年行っているような「九段・靖国周辺清掃」「子ども食堂」「お祭りボランティア」「富士山関連ボランティア」「東京メトロ飯田橋駅ボランティア」などについては活動・イベントが軒並み中止となった。特に東京メトロ飯田橋駅ボランティアで活動している学生スタッフはほとんど本来の活動ができない 1 年となった。

3. プログラム数及び学生参加人数

2020 年度は 76 プログラムを実施、学生参加者総数は 819 名となった。なお、学生募集などを行ったうえで中止になったプログラムが 7 個ある。

4. 2020 年度活動の報告

(1) 東京 2020 応援プログラムの実施

東京 2020 組織委員会が東京 2020 大会の延期を受け、本プログラムも期間の延長の措置が取られたため、引き続き「共生社会・生きやすい社会を考える～難病から学んだ私が伝えたいこと～」「コロナ禍の子どもの貧困問題を考えよう～子どもたちの未来に私たちが今できること～」などの東京 2020 応援プログラムは 6 プログラム企画し、学内の東京 2020 大会の機運の醸成に貢献した。

(2) 近隣の大学・施設と連携した新規プログラムの実施

●「千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム」「3 大学連携（明治大学・関西大学）」に働きかけを行い「「誰か」じゃなく「みんな」が生きやすい社会とは」や「学べば、献血は恐くない（献血啓発企画）」などの企画に参加いただいた。また、三輪田学園よりボランティア活動を大学と共同して行いたいとの依頼があり、上記企画などに三輪田学園の生徒の皆様にもご参加いただいた。

●例年行われている「神田すずらん祭り」や「神保町ブックフェスティバル」などは中止となったが高齢者施設に音楽を DVD で届ける活動（千代田区）や、オンライン居場所作りボランティア（荒川区）などできる範囲で近隣施設・団体と協力してボランティア活動を行った。

(3) 震災復興支援・防災啓発活動への取り組みの継続

●被災地ボランティア、被災地スタディツアーの継続実施

ボランティアセンター学生スタッフが主体となり、「福島被災地スタディツアー」「岩手・宮城被災地スタディツアー」を継続的に実施し、一般学生の被災地に対する理解を深め風化防止に貢献す

ることができた。また「東北被災地ボランティアツアー」に関しては新型コロナウイルス感染症の影響で中止となったが11月に代替企画として、チーム・オレンジ5名を現地に派遣、ボランティア活動を実施することができた。

●学外での防災啓発活動

例年行われている「防災ゲームDAY」や「未来の防災リーダー」などの学外のイベントが軒並み中止となったため活動ができなかった。

●学内での被災地支援・防災啓発活動の実施

今年度は新型コロナウイルス感染症の対策をしたうえで、学内宿泊訓練である防災キャンプを実施することができた。

(4) 基幹プロジェクトの継続的实施と見直しの実施

●東京メトロ飯田橋駅ボランティアの実施

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で研修を11月に1回実施することができたが、駅での活動に関しては実施に至っていない。駅での活動の目途が立っていない中で、Zoomを使って鉄道に関する福祉について考える企画や、本活動を紹介するポスターの作成など、コロナ禍でもできる活動を模索しながら行った。

●継続実施活動

キャンパス周辺清掃及びエコキャップ回収ボランティアについては新型コロナウイルス感染症の影響で中止となっていたが10月より再開した(1月は再度緊急事態宣言が発令されたため中止)。九段・靖国清掃については2020年度を通して中止となった。なお例年2回行われている富士山でのボランティア活動についても中止となった。

(5) 学内イベントの継続的实施と見直しの実施

学生の発案で新規企画「「誰か」じゃなく「みんな」が生きやすい社会とは?」「コロナ禍の子どもの貧困問題を考えよう」「ベイラー大学「お茶の時間」バレンタイン企画」「はじめの1歩カフェ」等の新しい視点を取り入れた企画を実施、学内に提供することができた。

(6) 学生スタッフの育成

●学生イベントの企画・運営支援

学生スタッフが開催するミーティング(VSP、チーム・オレンジ)への参加や、各プロジェクトごとの打ち合わせに職員が同席、学生企画の進捗状況を確認し、必要に応じて企画の促進やアドバイス、相談等を行った。

●Zoomで窓口を設置することで学生が学校に来校することなく企画の相談等ができる環境を整えた。

●例年、年2回行われているピアネット研修会は中止となった。

(7) キャンパスボランティアセンターの連携

●六大学連絡協議会を10月に本学主催でZoomを利用して行った。

●ボランティアセンター全学運営委員会を1月にZoomを利用して行った。

5. 2020年度の課題

2021年度についても新型コロナウイルスの影響が残ることが予想される。その中で一番の課題となるのは学生スタッフの確保である。

2020年度入会した学生スタッフはVSPが13名(うち1年生11名)、「チーム・オレンジ」が1年生2名となった。VSPに関しては一定数の確保ができていたため現在の情勢を鑑みれば健闘したといえるが、チーム・オレンジについては入会者が少なく、このままでは例年行っている活動の維持が難しいと考える。今年度の反省を生かし、次年度は多くの新生が獲得できるように学生スタッフ募集の在り方を検討したい。

2020年度 市ヶ谷ボランティアセンター運営委員会

回	日程	参加人数	議 題
第1回	5月8日	9名	・新型コロナ感染症の影響により定例報告なし・2020年4～5月中の企画の中止・延期報告（ボランティア説明会、ボート清掃、ブラインドサッカー、海洋環境保護ボランティア、東京メトロ研修会、避難所運営、富士山トレイル整備、防災キャンプ、その他外部でのボランティア活動）※ 4月8日の緊急事態宣言の発出により、学生はオンラインでの授業、職員もテレワーク体制になった。ボランティアセンターとしての対面の活動は当然見込めない状況。
第2回	6月10日	8名	・新型コロナ感染症の影響により定例報告なし・災害救援ボランティア講座について（8月27～29日に予定、中止の可能性あり）・VSP（オンラインでのミーティング中心、新入生対象の企画がメイン、自ら興す例年通りの企画ができない状況）・チーム・オレンジ（オンラインによる新歓、現地NPO法人との意見交換会など）・メトロ（活動停止中）
第3回	7月7日	8名	・ボランティア情報審査、センター運営報告、進捗状況・結果報告：VSP（明治・関西大学とのオンライン研修会、インクルーシブデザインオンライン企画、ダウン症、海洋ゴミ企画、献血企画、子どもの貧困、SDGs関連、富士山トレイルなども動き出す予定）・チーム・オレンジ（オンラインによる現地NPO法人との意見交換会、HUグッズづくり、防災キャンプ、福島スタディツアーなど、東北被災地ボランティアツアーは中止）・メトロ（飯田橋駅サービスマネージャーさんとの質疑応答、飯田橋駅構内用ポスターの作成）※ 依然として対面活動は出来ず、オンラインでできる活動に目を向け出している。
第4回	9月17日	10名	ボランティア情報審査、センター運営報告、進捗状況・結果報告：VSP（エコキャップDEキャンパスツアー、はじいちカフェ、3大学オンライン研修会、インクルーシブデザインオンライン企画など）・チーム・オレンジ（オンラインチーオレカフェ、東北被災地ボランティアツアー振替について、防災キャンプ、福島スタディツアー、学園祭など）・メトロ（研修会の予定、メトロカフェなど）※ 感染状態が一旦落ち着きだした為、対面での活動（東北被災地ツアーの振替、防災キャンプ、学園祭）とオフラインでの活動（手話講座、その他企画）とのハイブリッドな活動となる。
第5回	10月21日	8名	ボランティア情報審査、センター運営報告、進捗状況・結果報告：・VSP（インクルーシブデザインオンライン企画、はじいちクエスト、高齢者施設での音楽ボランティア、バイラー大学との合同企画、その他）・チーム・オレンジ（オンラインチーオレカフェ、東北被災地ボランティアツアー振替について、防災キャンプ、福島スタディツアー）・メトロ（研修会日程、メトロカフェ）※ 対面での活動を実施するにあたり、感染症対策（健康チェックシートの記入、外部団体との交渉など）を徹底し、状況を見ながらの実施となる。
第6回	12月1日	8名	ボランティア情報審査、センター運営報告、進捗状況・結果報告：・VSP（バイラー大学ハロウィン企画、高齢者音楽ボランティア、移民企画、難病を考える企画、子どもの貧困企画、ダウン症企画、献血企画など）・チーム・オレンジ（防災キャンプ、東北被災地ボランティアツアーの振替について、福島スタディツアー、東北被災地スタディツアーなど）・メトロ（研修会11/14について、駅での活動再開について）※ 外部団体とも少しずつ活動を再開する。宿泊を伴う企画は細心の注意を払って行ったが、感染状況を窺いながらの進捗となる。
第7回	1月26日	10名	ボランティア情報審査、センター運営報告、進捗状況・結果報告：・VSP（子どもの貧困企画、ダウン症企画、献血企画、実践知大賞表彰、足立区イベント（ポッチャ）、コミュニティひろば「にこまる」HP作成について）・チーム・オレンジ（福島スタディツアー、東北被災地スタディツアーについて）・メトロ（読売新聞社からの取材について）※ 2度目の緊急事態宣言発出に伴い、再度大学の方針を踏まえた上での活動について確認。次年度の新入生獲得について各団体が動き出す。

【付記】

- 4月の運営委員会は新型コロナウイルス感染症の影響のため中止。
- 運営委員会は新型コロナウイルス感染症の影響の為、Zoomにて開催。
- ボランティア依頼審査は、審査基準（2011年4月作成・一部2019年改定）に照らし合わせて判断。

2020年度 市ヶ谷ボランティアセンター来室者数集計

	来室者総数(人)	学生(人)	その他(人)	相談数(件)※	開室日数(日)
4月	0	0	0	0	5
5月	0	0	0	0	0
6月	14	9	5	1	22
7月	34	31	3	1	21
8月	60	60	0	2	15
9月	64	61	3	3	20
10月	123	122	1	15	22
11月	111	110	1	6	19
12月	89	88	1	4	19
1月	58	58	0	0	16
2月	104	103	1	0	18
3月	179	175	4	22	23
合計	836	817	19	54	200

※相談数は来室し教職員に何らかの助言を受けた人をカウント

※来室者数に、Zoom 窓口への訪問を含む

市ヶ谷ボランティアセンター 学生団体の紹介 ～学生スタッフのことは～

学生スタッフの視点で行うボランティアの企画・実施

VSP（ボランティア支援プロジェクト）

学生スタッフが興味のある分野のボランティアプログラムの企画を、交渉から携わり進めていきます。環境・福祉・地域貢献など様々なジャンルのボランティア活動を行っています。

2020年はとにかく変化を大きく感じる年でした。対面でのボランティア活動が難しい状態が続いても、その状況をポジティブに捉えることで、オンラインツールとボランティアを融合させる様々な方法を勉強することが出来ました。例えば、社会問題に関心を持った人がオンライン上で集まり、一緒に行動を起こす「はじいちカフェ」。NPOの方と共に子どもの居場所をつくる「オンライン居場所支援」。海外の学生とZoomでつながる「ペイラー大学お茶の時間」。何事もまずは始めてみることで、新たに課題やそれに対する解決策を見出すことが出来ると学びました。今自分達に出来ることは何かを考え、オンラインの可能性を模索し続けたこの1年間は、ジャンルを問わない様々な活動を行っているVSPだからこそ出来た経験だと思います。

しかしながら、新しいものを追求する一方で、直接人と触れることの大切さも強く感じています。来年度以降、対面での活動が再開されていく中でも、オンライン・オフライン双方の強みを組み合わせたVSPならではのボランティア活動を提案していきたいです。

2021年度VSP代表 鴨 潤矢

被災地支援・防災に取り組む

チーム・オレンジ

チーム・オレンジは、東日本大震災の被災地・被災者のために「何かしたい」という学生が集まってできた組織です。被災地支援及び防災全般について、学部生に活動の輪を広げるために教職員と協働し、活動しています。

大学1年生の春から、東日本大震災の復興支援と防災啓発活動を行うチーム・オレンジに所属し、実に多く学びを得た。

災害には発災、応急期、復旧期、復興期、準備期という災害サイクルがある。3.11の津波被害、ハード面に焦点を当てると、防波堤の再建やかさ上げ工事など、多くの地域がこの10年という年月で復興期、準備期に入っていると現地に訪れ感じる。しかしソフト面は未だにコミュニティ支援など多くの課題が残っている。

これまでの活動で、震災を経験された方々のお話を伺うと、時間が経ったからこそ当時のことを話せるという人が多く、どの人も「自分事としてこの災害を捉えて」と口を揃えて言うことが印象的だ。

3.11では東北の各地で震災によるコミュニティの破壊が起きたが、私たちも2020年度はコロナ禍の影響を非常に大きく受け、これまで先輩方から受け継いできた防災啓発活動がほとんどできず、活動が断たれてしまった。発災から10年経ち、ハード面の復興が進んだことで、支援の在り方も変化の時を迎えている。今後は風化防止や被災地の方々の話を聞いて得られた教訓、後悔を誰もが「自分事」にできるよう、災害に備え、防災啓発活動にもさらに重点を置きたい。

2021年度チーム・オレンジ代表 横山 萌

市ヶ谷ボランティアセンター 学生団体の紹介 ～学生スタッフのことば～

大学から一番近い地域貢献

東京メトロ飯田橋駅ボランティア

サービス介助基礎研修の受講を通して高齢者や身体の不自由なお客様の介助方法を学び、飯田橋駅にて見守りや道案内などのボランティア活動を行っています。

2020年度は新型コロナウイルスの影響を受け、普段通りの活動が出来ない年になりました。私たちは、東京メトロ飯田橋駅を利用している方々がさらに安心して駅を利用していただけるようにホームでの見守り活動や、改札口付近での出口案内などを活動の軸としてやってきました。しかし、2020年度は先述の通り新型コロナウイルスの影響で駅での活動が出来なくなり、どのような活動をしたらよいのかと迷う日々が続きました。

その中で、少しでも多くの人に活動が伝わるように法政大学各キャンパスにポスターの掲示を行う活動や、Zoomを用いたオンライン交流会を行いました。交流会の内容は、鉄道に触れる団体であるため、鉄道の内容がメインとなっていました。ただ、コロナ禍で人と話す機会があまりなかった今年度にちょうど良く、来年度も続けていきたいと思えるような企画になりました。

また、今年度はメインの活動が出来なかったものの、多くの方々の支えがあって4期生を迎える研修会を行うことが出来ました。来年度は4期生、さらには5期生も巻き込んで、飯田橋駅をより快適にご利用いただけるような環境づくりに貢献していきたいです。

東京メトロ飯田橋駅ボランティア学生スタッフ（多摩キャンパス代表） 田中 海翔



VSP（ボランティア支援プロジェクト）



チーム・オレンジ



東京メトロ飯田橋駅ボランティア

2020年度 市ヶ谷ボランティアセンター イベントカレンダー

実施日	イベント・講座・訪問先	団体名、講師、協力先
4月16日(木)	「チーム・オレンジ」が手作りマスクの作り方教えます!	チーム・オレンジ
5月16日、23日、30日、6月6日(土)	バイタル・プロジェクト×VSP オンライン居場所支援	NPO 法人バイタルプロジェクト、VSP
6月19日(金)	NPO法人遠野山・里暮らしネットワーク田村氏によるオンライン意見交換会	遠野・山・里暮らしネットワーク、チーム・オレンジ
7月1日(水)	大学限定「防災・災害ボランティアオンラインミーティング(セミナー)」	防災教育・災害支援コーディネーター宮崎賢哉氏
7月8日(水)	キャンパス周辺清掃ボランティア	VSP
7月8日(水)	エコキャップ回収ボランティア	VSP
7月8日(水)	はじめての1歩カフェ(第1回)	VSP
7月16日(木)	九段靖国神社周辺清掃ボランティア	千代田区環境安全部、九段環境整備協会、九段小学校PTA、麹町警察署、九段商店街振興組合
8月3日(月)	エコキャップDEキャンパスツアー	VSP
8月4日(火)	はじめての1歩カフェ(第2回)	VSP
8月26日(水)	関西・明治・法政3大学オンライン交流会 大学生が考える環境ボランティアの未来 第1回	関西・明治・法政各大学学生(学生スタッフ、一般学生)、教職員
8月27日(木)	災害救援ボランティア講座 第1回	災害救援ボランティア推進委員会
8月28日(金)	災害救援ボランティア講座 第2回	災害救援ボランティア推進委員会
8月29日(土)	災害救援ボランティア講座 第3回	災害救援ボランティア推進委員会
9月2日(水)	関西・明治・法政3大学オンライン交流会 大学生が考える環境ボランティアの未来 第2回	関西・明治・法政各大学学生(学生スタッフ、一般学生)、教職員
9月5日(土)	はじめての1歩カフェ(第3回)	VSP
9月9日(水)	関西・明治・法政3大学オンライン交流会 大学生が考える環境ボランティアの未来 第3回	関西・明治・法政各大学学生(学生スタッフ、一般学生)、教職員
9月12日(土)	[東京2020応援]インクルーシブデザイン講座 ONLINE～「誰かの使える」が「みんなの使いやすい」へ～ 事前勉強会編	VSP、インクルーシブデザイン・ソリューションズ 高山希氏
9月16日(水)	オンライン DE キャンパスツアー	VSP
9月20日(日)	メトロオンラインカフェ「鉄道会社が取り組んでいる福祉」	東京メトロ飯田橋駅ボランティアスタッフ
9月23日(水)	[東京2020応援] インクルーシブデザイン講座 ONLINE～「誰かの使える」が「みんなの使いやすい」へ～ 講義編	VSP、インクルーシブデザイン・ソリューションズ 高山希氏
9月25日(金)	チーム・オレンジ防災啓発企画「災害が起きたときあなたは…」	チーム・オレンジ
9月30日(水)	[東京2020応援]ユニバーサルシアターで学ぶバリアフリー映画	シティ・ライツ、シネマチュプキタバタ、VSP
10月～11月	特別養護老人ホームに音楽を届けよう!	特別養護老人ホーム かんだ連雀、VSP
10月1日、8日、15日、29日 11月19日、26日 12月3日、10日(木)	手話講座(入門編)	NHK 手話キャスター中野佐世子氏
10月2日(金)	バイラー大学「お茶の時間」	VSP、バイラー大学
10月5日(月)	はじめての1歩カフェ(第4回・はじいちクエスト)	VSP
10月9日(金)	バイラー大学「お茶の時間」	VSP、バイラー大学
10月11日(日)	富士山トレイル整備ボランティア	富士山クラブ、VSP
10月15日(木)	バイラー大学「お茶の時間」	VSP、バイラー大学
10月21日(水)	キャンパス周辺清掃ボランティア	VSP
10月23日(金)	バイラー大学「お茶の時間」	VSP、バイラー大学
10月24日(土)～25日(日)	防災キャンプ	防災教育コーディネーター 宮崎賢哉氏、チーム・オレンジ
10月26日(月)	エコキャップ回収ボランティア	VSP
10月30日(金)	バイラー大学「お茶の時間」(ハロウィン企画)	VSP、バイラー大学
11月～3月	コミュニティ広場にこまる web サイト作成企画	コミュニティ広場にこまる、VSP
11月5日(木)～8日(日)	フードドライブ(大学祭)	VSP
11月5日(木)	VSP 活動紹介、意見交換会(大学祭)	VSP
11月6日(金)	バイラー大学「お茶の時間」	VSP、バイラー大学
11月14日(土)	[東京2020応援] 東京メトロ飯田橋駅ボランティア研修会	東京メトロ、ケアフィット共育機構、東京メトロ飯田橋駅ボランティアスタッフ
11月16日(月)	キャンパス周辺清掃ボランティア	VSP
11月16日(月)	[東京2020応援](三輪学園協力)コロナ禍を生きる移民について考える～日本に暮らし外国人についての理解を深めよう～	VSP、早稲田大学アジア国際移動研究所 研究助手 加藤丈太郎氏
11月20日(金)	バイラー大学「お茶の時間」	VSP、バイラー大学

概要	場所	学生参加者数	(内)留学生数
新型コロナウイルス感染症の対策として「手作りマスク」の動画を作成	本学 HP	2	0
子ども居場所ステーションに参加しているご家庭を対象にしたオンライン居場所支援	Zoom	5	0
遠野山・里・暮らしネットワークの後方支援と今後のボランティアの必要性を知る	Zoom	18	0
防災・災害ボランティアってなんだろう？ 平時の防災の大切さについて知る	Zoom	2	0
VSPの定例活動の1つ、一般学生、ボランティアセンターの職員と行う外濠周辺の清掃活動	外濠周辺	covid-19の影響で中止	
外濠校舎、富士見坂校舎でのエコキャップ回収ボランティア	外濠校舎、富士見坂校舎	covid-19の影響で中止	
学生同士で社会問題について考えるオンライン企画「環境問題・ゴミ問題」	Zoom	10	0
地域（千代田区）の方と共に地域パトロールを兼ねた清掃活動	靖国通り周辺、九段商店街	covid-19の影響で中止	
動画を使用したオンラインエコキャップ DE キャンパスツアー	Zoom	14	1
学生同士で社会問題について考えるオンライン企画「フードロス・食品ロス」	Zoom	14	0
関西大学主催の琵琶湖でのボランティア活動の代替企画「大学生が考える環境ボランティアの未来」	Zoom	6	0
災害救援ボランティアの基本、出火防止と初期消火、災害ボランティア活動ケースワーク、災害と防災対策の基本	大内山校舎4階Y402教室	covid-19の影響で延期	
災害模擬体験と実技、被災地での安全衛生、災害ボランティア活動図上演習(グループワーク)	本所防災館、大内山校舎4階 Y402 教室	covid-19の影響で延期	
応急手当活動（上級救命技能講習）、認定証授与	市ヶ谷総合体育館3階 柔道場	covid-19の影響で延期	
関西大学主催の琵琶湖でのボランティア活動の代替企画「大学生が考える環境ボランティアの未来」	Zoom	5	0
学生同士で社会問題について考えるオンライン企画「動物愛護・福祉」	Zoom	22	0
関西大学主催の琵琶湖でのボランティア活動の代替企画「大学生が考える環境ボランティアの未来」	Zoom	3	0
プロセスの上流から巻き込むデザイン手法（インクルーシブデザイン）について学ぶ	Zoom	16	1
動画を使用したオンラインエコキャップ DE キャンパスツアー	Zoom	9	1
参加者と双方向で知識や意見を共有する催し「鉄道会社が行っている福祉」	Zoom	11	0
プロセスの上流から巻き込むデザイン手法（インクルーシブデザイン）について学ぶ	Zoom	16	0
避難所運営ゲームを使用し、自分が避難所を運営する立場になって起こりうる問題についてどのような解決策をとるか話し合う	Zoom	8	1
視覚障がい者、聴覚障がい者、車いすの方も映画を楽しめるユニバーサルシアターについて学ぶ	北区田端 シネマチュブ キタバタ	covid-19の影響で中止	
学生がそれぞれ演奏したものを録音・撮影、それらを編集し音楽 DVD を作成		16	0
手話講座入門(手話ゲームブック)歌やゲームを交えて手話の基礎、聴覚障がいについて学ぶ	Zoom	59	2
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	5	0
学生同士で社会問題について考えるオンライン企画「廃プラスチック」	Zoom	16	0
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	2	0
富士山トレイル整備と清掃	富士山麓周辺	covid-19の影響で中止	
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	2	0
VSPの定例活動の1つ、一般学生、ボランティアセンターの職員と行う外濠周辺の清掃活動	外濠周辺	7	1
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	2	0
大学構内にて首都直下地震を想定したキャンプ	外濠校舎メディアラウンジ、5階短期会議室	11	0
外濠校舎、富士見坂校舎でのエコキャップ回収ボランティア	外濠校舎、富士見坂校舎	6	0
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	4	0
コミュニティ広場にこまる HP 作成		4	0
正門前広場にフードドライブ回収 BOX を設置	正門前広場	2	0
三輪田学園の生徒に大学のボランティア活動紹介、意見交換会	富士見坂校舎 F309 教室	10	0
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	3	0
東京メトロ飯田橋駅でのボランティア活動の事前研修	学生ホール、東京メトロ飯田橋駅	18	0
VSPの定例活動の1つ、一般学生、ボランティアセンターの職員と行う外濠周辺の清掃活動	外濠周辺	10	0
コロナ禍の中日本で暮らす外国人について考える講義とワークショップ	Zoom	18	0
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	4	0

実施日	イベント・講座・訪問先	団体名、講師、協力先
11月21日(土)～23日(月)	<大和証券福祉財団助成事業>東北被災地ボランティアツアー(42次隊)	遠野・山・里暮らしネットワーク、チーム・オレンジ
11月26日(木)	エコキャップ回収ボランティア	VSP
11月27日(金)	[東京2020応援](千代田区コンソーシアム・三輪田学園協力)(三大学連携協定)共生社会・生きやすい社会を考える～難病から学んだ私が伝えたいこと～	特定非営利活動法人 希少難病ネットつながる 理事長 香取久之氏
12月3日(木)	[東京2020応援] コロナ禍の子どもの貧困問題を考えよう～子どもたちの未来に私たちが今できること～	VSP、特定非営利活動法人 Learning for All 吉山泰子氏
12月6日(日)	福島被災地スタディツアー	チーム・オレンジ
12月12日(土)	おしゃっちパネル展示企画	チーム・オレンジ
12月15日(火)	[東京2020応援](千代田区コンソーシアム・三輪田学園協力)「誰か」じゃなく「みんな」が生きやすい社会とは?～ダウン症のある人との関わりから共生社会を考えよう～	VSP、アクセプションズ(代表 古市理代氏、高橋真氏、他)
12月17日(木)	キャンパス周辺清掃ボランティア	VSP
12月19日(土)	「自由を生き抜く実践知大賞」表彰式	VSP
12月19日(土)	(千代田区コンソーシアム・三輪田学園協力) 学べば、献血は怖くない。あなたを一押し10時間配信	VSP、日本赤十字社 東京都赤十字血液センター
12月21日(月)	エコキャップ回収ボランティア	VSP
1月5日(火)	足立区イベント「&spoon x シアター1010 なぞときひろば」ポッチャ参戦企画	VSP、NPO 法人アンドスプーン、シアター 1010
1月9日(土)	OluOlu 障がい児サッカー教室	OluOlu、VSP
1月22日(金)	キャンパス周辺清掃ボランティア	VSP
1月26日(火)	エコキャップ回収ボランティア	VSP
1月29日(金)	バイラー大学「お茶の時間」	VSP、バイラー大学
2月3日(水)	はじめの1歩カフェ(第5回)	VSP
2月4日(木)	バイラー大学「お茶の時間」	VSP、バイラー大学
2月12日(金)	バイラー大学「お茶の時間」	VSP、バイラー大学
2月19日(金)	バイラー大学「お茶の時間(バレンタイン企画)」	VSP、バイラー大学
2月19日(金)	岩手・宮城被災地スタディツアー事前説明会	チーム・オレンジ
2月24日(水)～26日(金)	岩手・宮城被災地スタディツアー	チーム・オレンジ
2月25日(木)	東京メトロ飯田橋駅ボランティア オンライン定例会	東京メトロ飯田橋駅ボランティアスタッフ
2月26日(金)	バイラー大学「お茶の時間」	VSP、バイラー大学
3月1日(月)	岩手・宮城被災地スタディツアー事前説明会	チーム・オレンジ
3月3日(水)	関西・明治・法政3大学オンライン活動報告会～コロナ禍で駆け抜けた2020～	関西・明治・法政各大学学生(学生スタッフ)、教職員
3月4日(木)	バイラー大学「お茶の時間」	VSP、バイラー大学
3月5日(金)、26日(金)、30日(火)、31日(水)	ボランティアセンターリニューアル企画	VSP、チーム・オレンジ、東京メトロ飯田橋駅ボランティアスタッフ
3月7日(日)	オンライン居場所ボランティア	VSP
3月11日(木)	エコキャップ回収ボランティア	VSP
3月12日(金)	バイラー大学「お茶の時間」	VSP、バイラー大学
3月12日(金)～13日(土)	岩手・宮城被災地スタディツアー	チーム・オレンジ
3月12日(金)	オンラインで行く岩手宮城被災地スタディツアー	チーム・オレンジ
3月13日(土)	荒川区社会福祉協議会若者プロジェクト	荒川区社会福祉協議会、VSP
3月17日(水)	災害救援ボランティア講座 第1回(千代田区助成事業)	災害救援ボランティア推進委員会
3月17日(水)～19日(金)	新2年生サポートDays(課外活動相談コーナー)	VSP
3月18日(木)	災害救援ボランティア講座 第2回(千代田区助成事業)	災害救援ボランティア推進委員会
3月18日(木)	エコキャップ分別ボランティア	VSP
3月18日(木)	バイラー大学「お茶の時間」	VSP、バイラー大学
3月19日(金)	災害救援ボランティア講座 第3回(千代田区助成事業)	災害救援ボランティア推進委員会
3月20日(土)	コミュニティ広場にこまる web サイト作成企画	VSP
3月21日(日)	オンライン居場所	VSP
3月23日(火)	キャンパス周辺清掃ボランティア	VSP
3月25日(木)	東京メトロ飯田橋駅ボランティア オンライン定例会	東京メトロ飯田橋駅ボランティアスタッフ
3月26日(金)	バイラー大学「お茶の時間」	VSP、バイラー大学

※灰色箇所は中止または延期

76プログラムに819名参加(学生のみカウント)

概要	場所	学生参加者数	(内)留学生数
岩手県遠野市をベースにした被災地ボランティア	岩手県遠野市、大槌町	5	0
外濠校舎、富士見坂校舎でのエコキャップ回収ボランティア	外濠校舎、富士見坂校舎	4	0
難病のある人、マイノリティの方との共生についての講義とワークショップ	Zoom	9	0
コロナ禍における子どもの貧困について考える講義とワークショップ	Zoom	24	0
福島の被災地めぐり学ぶツアー	福島県いわき市、双葉町	37	0
岩手県大槌町の地域交流センターでの「チーオレ新聞」等の展示	岩手県大槌町地域交流センターおしゃっち内	4	0
ダウン症への理解を通して共生社会について考える講義とワークショップ	Zoom	12	0
VSPの定例活動の1つ、一般学生、ボランティアセンターの職員と行う外濠周辺の清掃活動	外濠周辺	8	0
オンライン居場所の活動に対し表彰式出席	外濠校舎さったホール	5	0
献血について現状を知り献血ルームに足を運んでもらえることを目的とした献血啓発の講座	Zoom	11	0
外濠校舎、富士見坂校舎でのエコキャップ回収ボランティア	外濠校舎、富士見坂校舎	4	0
イベント会場にてポッチャ体験ブースの出演	シアター1010(北千住マルチ11階)	9	0
障がい児サッカー教室でのスポーツボランティア	Zoom	2	0
VSPの定例活動の1つ、一般学生、ボランティアセンターの職員と行う外濠周辺の清掃活動	外濠周辺	covid-19の影響で中止	
外濠校舎、富士見坂校舎でのエコキャップ回収ボランティア	外濠校舎、富士見坂校舎	covid-19の影響で中止	
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	6	0
学生同士で社会問題について考えるオンライン企画「食とプラスチック」	Zoom	16	0
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	5	0
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	6	0
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	15	0
岩手・宮城スタディツアーの事前説明会	Zoom	covid-19の影響で延期	
岩手県・宮城県でのスタディツアー	岩手県、宮城県内	covid-19の影響で延期	
東京メトロ飯田橋駅ボランティアスタッフの定例会	Zoom	11	0
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	5	0
岩手・宮城スタディツアーの事前説明会	Zoom	24	0
3大学の活動報告会	Zoom	6	0
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	5	0
新年度に向けてボランティアセンターのリニューアル	市ヶ谷ボランティアセンター	12	0
バイタルプロジェクトでの居場所支援（オンライン）	Zoom	6	0
外濠校舎、富士見ゲートでのエコキャップ回収ボランティア	外濠校舎、富士見ゲート	14	0
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	2	0
岩手県・宮城県でのスタディツアー	岩手県大船渡市、山田町、田老町	24	0
岩手県・宮城県でのスタディツアーの一部をオンライン配信	岩手県大船渡市、大槌町	17	0
コロナ禍で孤独や将来への不安を抱く学生が悩みを打ち明けたり人との繋がりをを感じることを目的としたオンラインイベント	Zoom	4	0
災害救援ボランティアの基本、出火防止と初期消火、災害ボランティア活動ケースワーク、被災地での安全衛生	大内山校舎4階Y403教室	12	3
2020年度大学に登校することができなかった1年生を対象としたオンライン相談会	Zoom	54	0
災害想像力を養う3・3WS、災害と防災対策の基本、災害ボランティア活動図上演習	大内山校舎4階Y403教室	12	3
回収したエコキャップの分別作業	外濠校舎	15	0
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	3	0
応急手当活動（上級救命技能講習）、認定証授与	市ヶ谷総合体育館3階 柔道場	12	3
コミュニティ広場にこまる（子ども食堂）のホームページ作成支援	オンライン	4	0
バイタルプロジェクトでの居場所支援（オンライン）	Zoom	4	0
VSPの定例活動の1つ、一般学生、ボランティアセンターの職員と行う大学周辺の清掃活動	大学周辺（神楽坂・靖国神社周辺）	18	0
東京メトロ飯田橋駅ボランティアスタッフの定例会	外濠校舎529・530会議室、Zoom	9	0
バイラー大学の学生と日本語・英語を交えたオンライン交流会	Zoom	4	0

1. キャンパス周辺清掃ボランティア

1. 日程 2020年4月～2021年3月（基本は毎月1回 昼休み、今年度はコロナ禍の為随時）

2. 場所 市ヶ谷キャンパス周辺（外濠周辺）

3. 概要

市ヶ谷ボランティアセンター・学生スタッフ（VSP）主催。基本的に月1回、毎回30分間ほど、大学周辺の清掃ボランティアを行っています。今年度は、参加人数が多い回には、少し足を延ばして神楽坂や靖国神社の周辺の清掃も行い、あまり大学に来られなかった新生同士交流の場にもなりました。

学生スタッフ（VSP）の活動の柱の一つであり、参加する一般学生と一緒に活動しながら、ボランティア活動の促進につなげていきます。

※尚、九段・靖国通り地区清掃ボランティアは新型コロナウイルス感染症の為、年度を通じて中止となりました。

4. 学生参加者数 のべ43名

日程	参加者数（申込者数）
10月21日（水）	7名（10名）
11月16日（月）	10名（12名）
12月17日（木）	8名（8名）
3月23日（火）	18名（20名）

※上記以外の月は新型コロナウイルス感染症の影響で中止となりました。



道路脇を清掃する様子



清掃終了後、全員で集合写真

2. エコキャップ回収ボランティア(活動リニューアル)

1. 日 程 2020年4月～2021年3月(毎月1回・新型コロナウイルスの為今年度は随時)

2. 場 所 市ヶ谷キャンパス各校舎、ペットボトル回収場所

3. 概 要

VSPでは定例活動として、キャンパス周辺清掃・エコキャップ回収活動を毎月1回ずつ行っている。エコキャップ回収活動に関して参加者が少ない状況が続いていたため、VSPのメンバー富岡凜、遠山開を中心とし、活動をリニューアルすることとしました。

<エコキャップ回収活動の課題>

- 1 社会貢献をしている実感があまりない。
- 2 作業が簡単すぎて、達成感を感じづらい。
- 3 キャップを分別する基準が曖昧である。

<リニューアル内容>

前項で挙げた課題を踏まえ、エコキャップ回収活動をリニューアルし、3月に実施した。

1の課題解決の手法として、参加者に対して、活動を行う前にエコキャップ回収活動が社会に対してどのように貢献しているのかについての資料を配ることとした。次に楽しくて参加したいと思える活動にすることを目指した。活動を行いながら何か別の発見ができる内容を考え、「記録を残す回収作業」と「キャップについて調べる分別作業」を行うこととなった。

「記録を残す回収作業」は、キャンパス内にある回収ボックスの前に手書きの折れ線グラフを設置し、回収作業のたびにグラフに新たな記録を書き足していくというものである。この目的の1つは課題2の解決である。折れ線グラフを書くためには重さを測り、計算し、それをグラフにプロットし、さらにプロットした点と前の記録を結ばなければならない。作業を複雑化させることで達成感のある活動を目指した。次に、2つ目の目的は傾向の発見である。この手法を継続することで集まる量の変化が見えるようになり、キャンパス内の人の動きや時期による違いなど様々な傾向を発見することができる。最後の目的は活動に参加していない人に対する意識づけである。あえて、手書きのグラフにすることで、キャンパス内で目立つ存在となる。活動の時だけでなく、普段の日常の中でも環境について考えるきっかけを与えるのではないかと期待する。

「キャップについて調べる分別作業」は、楽しみながら課題3を解決する手法である。我々が普段何気なく利用し、捨てているキャップは形や色、素材の違いなど実に多くの種類があることに気づいた。この発見は参加者にとって楽しいものとなり、キャップの分別基準を明確にすることができる。

<実際に実施して>

まず初めに、用意した資料は大きな役割を果たしたと言える。エコキャップ回収活動が持つ4つの目的を知らない人が多かった。また、回収活動がどのような経緯を経てワクワクになるのか知ってもらえたのはとても大きな成果だったと思える。次に、リニューアルした活動に対して楽しいという感想を得ることができたことは大きな成果の1つだった。達成できたことで、リニューアルの手法が今のままでいいことが確認できた。そして、分別作業ではリニューアルの新たな手法の可能性を見つかることができた。それは集まった参加者同士の交流の場となる可能性である。調べるといふ作業を通さなくても今まで関わることがなかった人同士をつなぐ場として楽しく活動を行えると考えた。

最後に、現在設置している手作りのグラフでは、壊れてしまうことが分かった。あえて手作りにすることで参加者の色を出してもらうことが目的の一つであったのだが、設置方法の雑さに目がいくように感じ、マイナスな印象を与えてしまうことが分かった。

<今後に向けて>

リニューアルすることで楽しいエコキャップ回収活動に近づけることができたように思う。しかしながら、今回のリニューアル案は継続によってはじめて本当の楽しさを感じられるような内容になっている。目標を立てる、グラフの書き換え方を変えるなど楽しく継続できるような工夫が求められる。今後、試行錯誤しながら新たな方法を模索していく必要がある。



4. 学生参加者数 43名

日程	参加者数(申込者数)
10月26日(月)	6名(12名)
11月26日(木)	4名(4名)
12月21日(月)	4名(4名)
3月11日(木)	14名(15名)
3月18日(木)	15名(15名)

※その他の月については、新型コロナウイルス感染症の影響で中止となりました。



グラフで回収量を見える化した



キャップ回収の様子



活動についての説明



分別の様子

3. 「チーム・オレンジ」が手作りマスクの作り方教えます！

1. 日 程 2020年4月16日（木）

2. 場 所 オンライン

3. 概 要

新型コロナウイルス感染症による自粛から始まった2020年度。例年のような新入生歓迎イベントも中止となり、異例の新年度を迎えることになりました。

新入生を迎えるにあたり「何かできないか？」と考えた学生団体チーム・オレンジのメンバー2名（桐尾奈菜、横山萌）が手作りマスクの作り方の動画を作成し、ホームページに掲載しました。国民全員が困難な状況に陥っている中ではあったが、家族や友人など周囲の大切な人の命を守るマスク作りの動画は、ある意味「防災」の役割を果たしたと言えるでしょう。

4. 学生参加者数 2名



動画の構成も自ら考えて作成した



動画内のチーム・オレンジの紹介



材料も表示し初心者も分かりやすい内容



コロナ感染症の収束を願う

4. バイタル・プロジェクト×VSP オンライン居場所支援

1. 日程 2020年5月16日、23日、30日、6月6日（いずれも土曜日）

2. 場所 Zoom

3. 概要

NPO 法人バイタルプロジェクトの協力のもと、子ども居場所ステーションに参加しているご家庭を対象にオンライン居場所を開催しました。コロナ禍で開催が難しいという子ども食堂の実態を知り、オンラインでも子どもたちに居場所を提供すること、楽しみながらインターネットに触れてもらうこと、学校に行けていない分何か学びとなるような機会を提供することを目的としました。各回で内容は違ったが、最初に立てた目標に向けて頑張り、最後に成果発表をしようという長期的な取り組みも行いました。

4月中旬から準備を始め、居場所ステーションに参加しているご家庭を対象にアンケートを取り、バイタルプロジェクトのスタッフと話し合いを重ねました。実際は、毎回「絵しりとり」「色鬼」「即興昔話」などのゲームも取り入れ、楽しみながら居場所づくりを進めることができました。

今回はオンラインでどのようにすれば参加者に楽しんでもらえるかという面が強い活動となりました。オンライン居場所への参加は親御さんの負担になってしまう可能性もあると感じましたが、共同通信社からの取材を受けたことから、社会的にも注目度があり、需要があると感じました。今後も対面とオンラインの両方で、「他者とコミュニケーションを取ることができる」形で子どもたちにとっての「居場所」を作りたいと思います。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 文学部哲学科3年 佐久間 喜望

4. 学生参加者数 5名

5. 参加学生の感想

今回、2つの“つながり”を得ることができた。まずはネットが“繋がる”ことだ。ポタン1つで離れた人と時間を共有できる手軽さは、オンラインの強みである。そしてもう1つは、人との“繋がり”である。同時に課題も多く残った。家庭によってデバイスの充実性に差が出ること、オンラインで実施する安全性を示せなかったことによる参加世帯数の限界などが挙げられる。

最終日にバイタルプロジェクトの檜澤さんが「オフラインでは会えない引きこもりの子などへのアプローチもできる面でオンラインの可能性は大きい」と仰っていたことが印象的であった。オンラインというツールを用いて本企画を発展させ、新しい企画にも挑戦したい。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 文学部心理学科2年 青木 怜奈

オンライン上での支援で何ができるか、どのような課題があるのかを模索する中、活動の度に反省点と次回に繋がるアイデアを話し合いながら進めることで、より実りある企画にすることができた。新しい状況で出来ることを見つけて活動をカタチにしていくという経験からは学ぶことが多く、今後の活動の糧にしていけたらと思う。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP デザイン工学部都市環境デザイン工学科2年 鴨 潤矢



オンライン居場所当日の様子



毎回の振り返りの作業シート

5. NPO法人遠野山・里・暮らしネットワーク田村氏による オンライン意見交換会

1. 日 程 2020年6月19日（金）

2. 場 所 Zoom

3. 概 要

チーム・オレンジの被災地支援活動にご協力いただいているNPO法人遠野山・里・暮らしネットワークの田村氏、菊池氏、松永氏と、オンライン（Zoom）での意見交換会を行いました。新型コロナウイルス感染症防止の為、今年は初のオンラインでの実施となりました。

「東日本大震災当時の遠野の様子と、遠野山・里・暮らしネットワークの後方支援を知る」「今後のボランティアの必要性」「学生からの質疑応答で理解を深める」ことを目的とし、動画などの資料を共有しながら進めました。

参加者の大半はチーム・オレンジのメンバーでしたが、被災地に行ったことのない学生や、VSP、多摩ボランティアセンター学生スタッフも参加し、多くの学生による活発な意見交換が行われました。現地の方々の率直なお話を伺えたことは、震災から9年を経て、被災地支援の岐路に立っている学生たちにとって、今後の活動を進める上で、貴重な経験となりました。

4. 学生参加者数 18名

5. 企画学生の感想

田村さんのお話の中で相手が何を欲しているかを考えることが大切だと強調されていました。一番大切なことなのに、私はそこまで深く考えておらず自分がやりたいことを、自己中心的であると気づかされました。昨今の新型コロナの影響で人と気軽に会えない状況が続きますが、遠く離れていてもコミュニティづくりを実現できる方法、今被災地の方々が何を欲しているかを考えてみたいと思います。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 法学部法律学科2年 池田 俊介

遠野市は東日本大震災の前から昔の教訓を生かし、災害対策拠点としての訓練をしていたからこそ迅速な対応ができたことを知りました。日ごろの訓練のおかげで緊急事態の際に適切に行動ができることを改めて実感しました。訓練の大切さは知っていたつもりでしたが実際に訓練が役に立ったことを学ぶと身が引き締まる思いでした。昔の人たちが教訓を伝承し、私たちを守ってくれたように私たちも東日本大震災の教訓を後世に伝え、自分たちの子孫を守りたいと思いました。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 法学部法律学科2年 福田 桃子

6. 参加学生の感想

コロナ禍の中でどのような活動を行うか、手探り状態が続いておりましたが、チーム・オレンジの皆様と、遠野山・里・暮らしネットワークの方との会議を通じて、現地の方とのコミュニケーションを続けていくことの大切さ、これからどのようなお付き合いをしていくかを考えることの重要性などを知り、これからの活動のビジョンが見えた気がします。特に、チーム気仙沼が主体となって行う活動やその理念に関して、NPO法人の皆様のお話は大変勉強になりました。学生団体として可能なこと、難しいことを見直したうえで、どのような事を行うべきか、様々な可能性を模索しながら、これからも活動を続けていきたいと思っています。

多摩ボランティアセンター学生スタッフ 社会学部社会学科2年 山中 智也



18人の参加者がZoom意見交換会に参加



講師の田村さん、菊池さん（遠野山・里・暮らしネットワーク）

6. 大学限定「防災・災害ボランティア オンラインミーティング（セミナー）」

1. 日程 2020年7月1日（水）

2. 場所 Zoom

3. 概要

チーム・オレンジの防災啓発活動でお世話になっている、防災教育・災害支援コーディネーター宮崎賢哉氏による、オンラインミーティング（セミナー）「防災・災害ボランティアってなんだろう？」が行われました。6つの大学の学生と教職員、オブザーバーの社協職員、高校生を含む43名が参加し、平時の防災の大切さについて学びました。

まず宮崎氏の資料やこれまでの経験から、大学・学生の防災への関わり方、COVID-19のボランティアへの影響や課題など、タイムリーな内容の講義が行われました。その後、3～4名のブレイクアウトルーム（グループ）に分かれて3つのテーマ（熱があるときにボランティアへ行くか、不適切な態度のボランティア学生に注意をするか、仕切り役がない場合に名乗り出るか）について15分ほど話し合いました。全員が初対面でしたが、「Yes、No を選択しコメントする」という指示があったため、活発な意見交換ができました。「正解が分からない問い」に取り組み、他者の考えを知る一助となったと思います。

最後に、事前に参加者がWebサービス「slido」に寄せた質問に回答していただき、ミーティングは終了しました。コロナ禍で自粛しがちですが、「自分に何ができるかを考え、行動し続ける」「自分自身が何を大切にしたいかを考える」ことがこれからの防災に必要であると実感し、各大学でのボランティア活動を再考する機会となりました。

4. 学生参加者数 法政2名、他38名

5. 参加学生の感想

災害は平等だが被害は不平等という言葉がとても印象的だった。コロナ禍で、どう災害に備えるべきかに関心があったが、日ごろから意識して備えていれば必要以上に不安がることはないと分かった。プロアクティブの3原則の中で2番目の「最悪事態を想定して行動せよ」は割と意識できていたが、その他についても今後は行動していきたい。

今回初めて防災ゲームのクロスロードを体験したが、他の人の意見もすごく参考になり、自分の意見もその時々で変化するかもしれないので、またやりたい。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 人間環境学部人間環境学科2年 横山 萌

コロナの影響で、チーム・オレンジの本来の活動が出来ないのは仕方ないと思っていたのですが、今回の講義を聞いて、こんな状況でも自分にできることはあるのではないかと考えさせられました。また、去年の防災キャンプが本当に貴重な経験だったことを改めて感じました。今回も泊まりは無理でも、災害時に役立つ知識や経験が出来る防災キャンプを作りたいと思いました。

余談ですが、てっきり防災ボランティアに携わる学生の集まりだと思っていたので、ディスカッションをした際に被災地に行ってボランティアをしたことがある学生さんがいらっしやなかったことが驚きでした。とても意識の高い方々ばかりで刺激を受けました。本当に貴重な時間をありがとうございました。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 法学部政治学科2年 桐尾 奈菜



事前に用意された防災関連の資料



動画やグループワークも通じ防災への理解を深めた

7. はじめの1歩カフェ（第1回）

1. 日程 2020年7月8日（水）

2. 場所 Zoom

3. 概要

硬い・真面目なイメージがある「社会問題」や「ボランティア」について気軽に話し、かつ行動するきっかけとなる場を提供するために本企画を実施しました。新型コロナウイルス感染症の影響を受け急遽延期となってしまった定例活動の代替企画として行ったため、定例活動参加希望であった学部生にのみ募集をかけ、テーマは「環境問題・ゴミ問題」としました。

<スケジュール>

12:25-12:30 流れの簡単な説明

12:30-12:45 少人数でお話タイム

「レジ袋有料化しましたが、普段マイバッグは使っていますか？」のような導入から、意見交換（家でのレジ袋・廃プラ

有効活用（リユース）例、レジ袋有料化で困ることはある？どんなときに困る？どうしたら困らなくなる？ など）

12:45-12:50 みんなの“はじめの1歩”をシェア（廃プラ問題に対し、自分ができることを紙に書いて、画面に映す）

12:50-12:55 ボランティアやVSPの企画、VSPの簡単な紹介

ボランティアセンター学生スタッフVSP 文学部心理学科2年 青木 怜奈

4. 学生参加者数 10名

5. 企画学生の感想

30分という短い時間だからこそ中だるみなく充実した企画内容になった。話題をタイムリーかつ身近なものに設定したこと、加えて3人1グループでトークセッションを設けたことで参加者も話しやすそうであった。構成については、まず予め数人のVSPメンバーに話題をいくつか提示し、ブレイクアウトルームを回してもらうよう頼んだことが、話を盛り上げるための工夫として機能していたと思う。

ボランティアセンター学生スタッフVSP 文学部心理学科2年 青木 怜奈

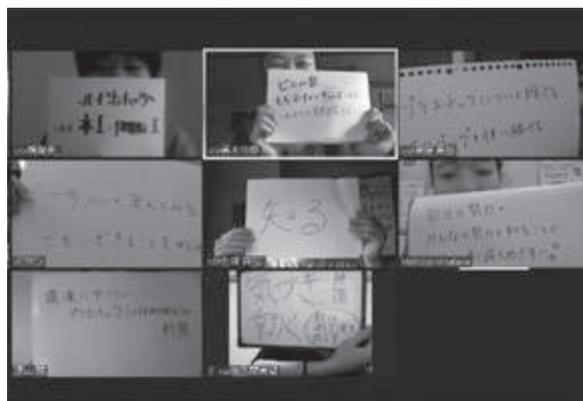
6. 参加学生の感想

今回はじいちカフェに参加してみて、プラスチックやレジ袋問題について知らないことがたくさんあると再認識させられました。海など、ゴミ箱ではないところに捨てる人が多いため、海が汚れてしまうと思っていたが、自然に海に飛んでいってしまう確率の方が高いと教えていただきました。問題の改善に取り組むには、まずは現状をしっかりと調べるべきだと思いました。

法学部政治学科1年 田中 みのり



テーマに沿ってグループごとで話し合う



自分が見つけた「はじめの1歩」をシェア

8. エコキャップDEキャンパスツアー

1. 日程 2020年8月3日(月)

2. 場所 Zoom

3. 概要

市ヶ谷ボランティアセンター学生スタッフ(VSP)が、8月3日(月)にZoomでエコキャップDEキャンパスツアーを実施し、大学生・大学院生14名(企画スタッフ5名含む)が参加しました。

当企画では、始めにブレイクアウトルームを作り、参加者を2つのグループに分けました。そして、それぞれのグループで、動画(市ヶ谷ボランティアセンターの職員に実際にキャンパス内を回って撮影して頂いたもの)を観ながらVSPメンバーが各施設の説明をしました。キャンパスツアーは、参加者の現在の話を聞いたり、VSPメンバーがその施設を使用した時の体験談などを織り交ぜながら実施しました。また、ツアーを開始する前メインルームにて「動画内にいくつエコキャップの回収ボックスが映ったか」に注目して頂けるよう促し、ツアー後メインルームで回収Boxの数の答え合わせをしたり、いつもだいたいどれくらいのキャップが集まるかなどの説明をしました。

疑似的にキャップ回収とキャンパスツアーを体験して頂くことによって、法政大学のキャンパスやエコキャップ回収について知っていただくことができました。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP デザイン工学部都市環境デザイン学科
2年 川上 健太

4. 学生参加者数 14名

5. 企画学生の感想

自分がデザイン工学部ということもあり、市ヶ谷キャンパスの施設についてあまり知らなかったため、この企画のおかげで知らなかったことも多く知ることができたのでよかったです。また、Zoomなどのリモートであってももっと色々なことができるのではないかという気持ちにもなりました。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP デザイン工学部都市環境デザイン学科 2年 川上 健太

一方的にならないように、チャットを利用するなどして参加者を交えながら案内をできた点は非常に良かった。参加者の声からも、オンラインでのキャンパスツアーの需要を感じ、今回紹介できなかった部分を加えて、さらに充実した内容で再度実施したい。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP デザイン工学部都市環境デザイン学科 2年 鴨 潤矢

6. 参加学生の感想

私は、法政大学に入学してから一度もキャンパスに行ったことがなかったので、キャンパス内部を知ることができる良い機会になりました。また、大内山校舎にある証明機のパスワードなど、実際に大学へ通わなくては分からないことを知ることができ、キャンパスのフロアマップを見るだけではわからないことを学ぶこともできました。

法学部国際政治学科 1年 藤井 航一

今回はこのような企画を開いてくださりありがとうございました。まだ一回も大学で授業を受けたことがないので、キャンパスがどのようになっているのか知ることができ、とても良かったです。こんなにも複雑なつくりになっているとは知らなかったので驚きました。早くキャンパスに通えるようになってほしいと願っています。

文学部心理学科 1年 緒方 晴香



キャップ回収の様子



全体で質問やクイズなどを楽しむ

9. はじめの1歩カフェ（第2回）

1. 日程 2020年8月4日（火）

2. 場所 Zoom

3. 概要

硬い・真面目なイメージがある「社会問題」や「ボランティア」について気軽に話し、かつ行動するきっかけとなる場を提供するために本企画を実施しました。第1回実施時に身近なテーマを“環境問題・ゴミ問題”にしたところ参加者から「話しやすかった」との声を頂いたため、今回は“フードロス・食品ロス”をテーマに設定しました。

また、前回の反省を踏まえ、今回は以下の2点を試してみました。

まず「参加者の知識の有無によって、会話量に差が出る」ことを防ぐために、参加者にはフードロスや食品ロスに対する知識・経験を問う事前アンケートに回答してもらい、企画者はそれを元にグループ分けを行いました。また、次回以降の企画に役立てるためにアンケートでは「本企画に参加しようと思った理由」等についても尋ねました。加えて、「他団体のオンライン企画との差別化・オンライン企画の安全性の証明」のために、企画1週間前からSNSを用いてフードロスについての情報・寄せられた質問に回答する等積極的に広報活動を行いました。

4. 学生参加者数 14名

5. 参加学生の感想

フードロス、食品ロスについての問題点や解決策をグループワークを通して話し合う中、現状を改善するために今日からでも実行できることが意外にも多くあり、自分の行動を見直す良い機会にもなりました。（国際文化学部3年）

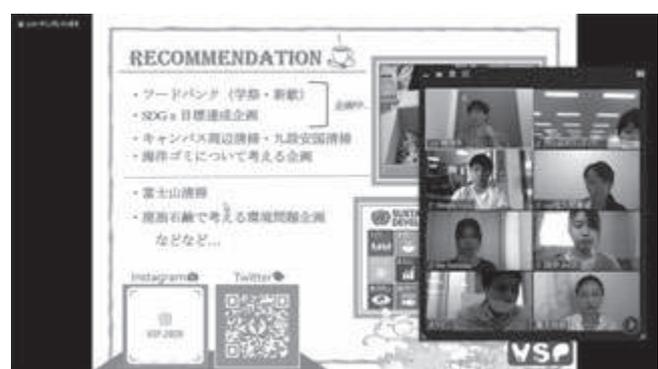
フードロスと聞くとすぐに「もったいない」という言葉に繋がるけど、具体的な被害などがよく分かっていなかった。しかし、他の参加者から、環境が悪かったり、本来なら貧困状態の人々に回せるはずの食料が捨てられ無駄になっていることを教えてもらった。やはりフードロスに良いことはないことがわかった。他の問題より、罪悪感が感じづらいこそ、より気をつけなければならないと思った。（法学部1年）

一般学生を交えての開催は初めてであったが、前回と同じく参加者が楽しく話せていたように見えた。プログラムの最後には食品廃棄に関するボランティアの情報を直接共有することができ、ボランティア活動の促進につながったと感じた。毎回様々なテーマを扱う本企画ではその分テーマに関心を持つ学生が集うので、ニーズに合った情報の提供ができ、かつ多くの学生にボラセンやVSPを認知してもらえる点でも大きな効果を期待できる。これからも、まず参加者・協カメンバーに楽しんでもらうことを第一により素敵な交流の場となる“はじいち”をつくっていきたい。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 文芸学部心理学科2年 青木 怜奈



「廃プラ問題に対して自分ができること」を画面に映す



VSP がとりあげているテーマを紹介

10. 関西・明治・法政3大学オンライン交流会 大学生が考える環境ボランティアの未来

1. 日程 第1回 2020年8月26日(水)
第2回 2020年9月2日(水)
第3回 2020年9月9日(水)

2. 場所 Zoom

3. 概要

- 第1回「環境問題から考える大学生ができること
～ボランティアの道をリーダーが切り拓く～」
第2回「日本一の山“富士山”と日本最大の湖“琵琶湖”の環境問題について」
第3回「大学生が考える環境ボランティアの未来～きっと答えは1つじゃない～」

連携協力協定を結んでいる3大学(関西・明治・法政)で関西大学主催の琵琶湖でのボランティア活動を実施する予定でしたが、COVID-19の影響で中止となり、代わりに3大学合同で環境問題について考える全3回の交流会をオンラインで実施しました。

第1回はNPO法人ユースビジョン代表赤澤清孝氏による講義「環境問題に取り組む学生リーダーのためのグループ運営術」およびグループディスカッションを行い、ボランティアリーダーとしてまた組織を運営する中でどのようなことが重要かなど考え話し合いました。学生自身が現に大学でのボランティア活動を通じて感じている課題と重なることもあり、共感する話題も多かったです。

第2回は関西大学による琵琶湖ツーリズムボランティアの活動発表および本学の富士山ボランティアの活動発表を行いました。今回の発表で初めて知ることも多く、他大学の活動を通じて視野が広がりました。

第3回は各大学のエコへの取り組みについて発表を行いました。その後、各自興味のあるテーマでグループに分かれディスカッションを行いました。テーマは外来種・3R・森林伐採・海水汚染・プラスチックごみなど様々な分野に渡り、問題を解決するためにどのようなアプローチが考えられるか意見を交わしました。

コロナ禍の中で、オンラインという形により関西と関東の大学が交流する機会をもつことができ、ともにボランティア活動に関わる学生たちにとって意義のある時間となりました。

4. 学生参加者数 第1回 関西大学13名、明治大学6名、法政大学6名
第2回 関西大学14名、明治大学4名、法政大学5名
第3回 関西大学11名、明治大学4名、法政大学3名

5. 参加学生の感想

ひとつの団体やグループをまとめることは、すごく難しいことだと思いました。考え方ややりたいことが、それぞれ違う人をまとめるためには、工夫が必要だと学びました。
(関西大学・2年)

今まで活動をする中で進めながら気付いてきた、事前に決めておくべきことや、リーダーが気を配ることなどを改めて整理することができいい機会となりました。
(法政大学・2年)



琵琶湖は旅行でも何回か行ったことがあるのですごく馴染みがあります。将来のためにも琵琶湖の環境問題に取り組むべきだと改めて感じました。また、日本のシンボルである富士山がゴミ問題や外来種問題を抱えているとは知りませんでした。法政大学の学生の説明を聞いてきちんと知れてよかったです。グループワークではいろいろな人の意見が知れてよかったです。とても濃い時間を過ごすことができました。

(関西大学・1年)

同じ法政大学でもまだまだ知らないボランティア活動があったので違うキャンパス同士でも連携していきたいと思いました。富士山の問題は耳にする機会がありますが、琵琶湖の問題は知らなかったのでまだ勉強が足りないと感じました。もっと皆さんの普段のボランティア活動についても聞きたかったです。

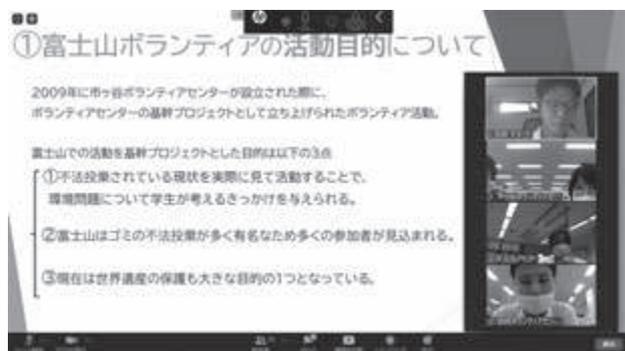
(法政大学・2年)

全3回を通して、顔見知りになったメンバーもいて話がしやすかったです。ボランティアと言っても環境や被災地、学習支援など様々だということが他大学との交流でわかりました。自分自身の考えの幅が広がりました。素敵な出会いをありがとうございました。

(法政大学・2年)

自分が全然知らなかったことを知ることができ、知識が増えました。また他大学の人と交流することによって、知らなかった話を聞くことができたりと本当に楽しかったです。

(明治大学・3年)



本学の富士山ボランティアについて活動発表



関西大学のエコバッグを持って記念写真



明治大学のエコへの取り組みについて



関西大学の活動紹介

11. はじめの1歩カフェ（第3回）

1. 日程 2020年9月5日（土）

2. 場所 Zoom

3. 概要

硬い・真面目なイメージがある「社会問題」や「ボランティア」について気軽に話し、かつ行動するきっかけとなる場を提供するために本企画を実施しました。第3回目のテーマは「動物愛護・福祉」としました。

<スケジュール>

12:25~12:30 挨拶、アイスブレイク

12:35~12:55 7~8人でのグループセッション（ペットショップがあることについてどう考えるか、数値規制の現状はどうなっているか、何ができるか など）

12:55~13:00 みんなの“はじめの1歩”「動物愛護・福祉のために、自分ができること」を共有

13:00 ボランティアやVSPの企画、VSPの簡単な団体紹介



4. 学生参加者数 22名

5. 企画学生の感想

申込用紙の参加動機をひまえ、実際に活動をしている方が数人いることがわかり、彼らの話を聞きたいということから、最初に7~8人のトークセッションを設けて情報共有の時間とすることにした。この時間に参加者がチャットに参加理由を書き込み共有することで、互いの参加理由、普段行っている活動や、それに対する持っている疑問を把握でき、スムーズに会話が広げられ効率的であったと感じた。時間後さらに話したいという方が4人残り、自身のグループではなかった方たちの話を聞くことができ非常に充実した時間を過ごすことができた。彼らも互いに意見を交換し合い、企画内で話しきれなかったことも話せてより満足度を高めることができたのではないかと感じる。

今回よかったと感じる点は、事前に当日参加するメンバーへレクチャーを行い、時間配分をはじめ企画の流れを詳細に理解してもらう時間があったことだ。このレクチャーでメンバー全員が状況を詳細に把握し、当日の臨機応変な対応にもつながったと感じるので、今後も続行してほしい。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 経営学部市場経営学科2年 富岡 凜

6. 参加学生の感想

動物愛護に興味があるけど自分に何ができるかわからないという人はたくさんいると思うので、そのような人達に情報をたくさん発信していくことで、色々なボランティア活動に繋がっていくのではないかと思います。実際に、動物愛護に関して何をすればいいのかわからなかった私は今日のはじめの1歩カフェに参加することで、今自分ができることを知ることができたのでとても良かったです。

人間環境学部人間環境学科1年 麻生 夢香

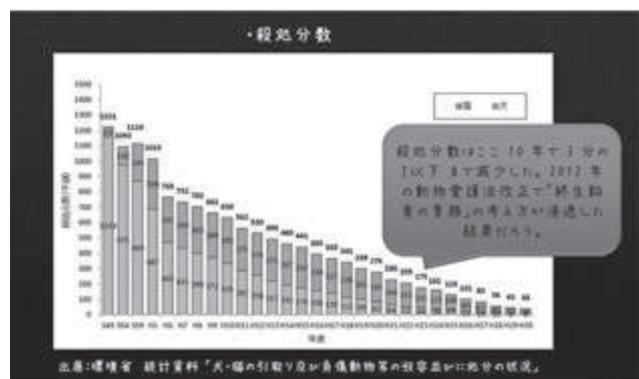
今日話し合っているだけで現実が変わるわけではないので、ここから自分がどう行動するのが大切だと思った。自分の考えをもっと、身近な人とも交換して、見て見ぬふりをしないようにしたい。動物愛護の問題が地球温暖化と同じくらい当たり前の問題になったら日本も変わるのではないかと思う。

1年の私でも参加できて嬉しかったです。まずは自分の意見を持って伝えることが大切だと学びました。ありがとうございました！

経営学部市場経営学科1年 合田 結菜



はじめの「1」でポーズ



数値規制についての説明資料

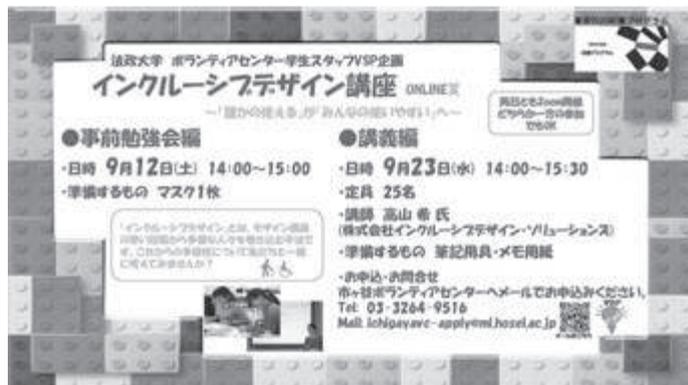
12. インクルーシブデザイン講座（ONLINE） ～「誰かの使える」が「みんなの使いやすい」へ～

1. 日程 2020年9月12日（土）事前勉強会編、23日（水）講義編

2. 場所 Zoom

3. 概要

今回は、計画から実施までをすべてオンラインで行い、従来の講師による講義だけではなく、事前勉強会を取り入れた新たな形の企画となりました。コロナ禍において従来の対面で実施してきた内容をオンラインへ移行していくのは大変であり、メンバーとの打ち合わせが今まで以上に必要でした。講師の方とも企画の計画段階から本番までをオンライン上で進める為、双方確認の重要性を改めて実感しました。他にも学生スタッフ（VSP）が2月までに計画してきた企画のほとんどが中止、延期となり、新たな企画が必要とされる中での実施は大きな挑戦であり、前例がない環境下で進行しました。



まず今まで講義中心だった企画に、理解や意識の向上、コロナ禍での学生交流の促進を目的とした事前勉強会を加え、学生スタッフVSPが進行するワークショップの時間を拡大しました。

事前勉強会では「片腕が使用できない」を条件下にマスクを着ける動作をオンライン上で互いに行い、今までにないアイデアの創出、意見の共有を行いました。

本講義には、これまでもお世話になった㈱インクルーシブデザイン・ソリューションズの高山氏をお招きし、インクルーシブデザインとユニバーサルデザインの関係説明や、動画を活用した「身近にある不便の発見」のワークショップを行いました。事前勉強会を実施した為に参加学生の理解、ワークショップでの意見共有も会話が弾み、学びの多い講義となりました。

今後オンラインの企画が増えていくかどうかは未知ですが、新しい企画の形として今後も継続、拡大できる可能性を秘めています。今後も新しい企画へ挑戦し、学びを増やしていきます。

ボランティアセンター学生スタッフVSP 法学部政治学科4年 藤山 雄多

4. 学生参加者数 (事前勉強会編16名、講義編16名)

5. 企画学生の感想

この企画では「新たな挑戦することの不安と喜び」の両方を味わいました。オンライン講義企画はVSPとして初めての試みで、企画を進めること自体に勇気が必要でした。しかしメンバーが、事前勉強会や企画中のチャット活用等、企画を成功させるための工夫を考えてくれたおかげで、参加者にも楽しんで頂けたことが嬉しかったです。「やってみないと分からない」という言葉を実感する貴重な体験でした。

ボランティアセンター学生スタッフVSP 文学部日本文学科3年 齋藤 真悠

事前勉強会等を通して、「ユーザーにとって使いやすいデザインとは」というテーマについて身近な例を挙げて考えることで、デザインに込められた意図や背景を感じることができた。また、参加者同士で意見交換をすることで、複数の視点から考えることができ、自分では気付かなかったことを知れたり、新たな発見が出来たりしたので、より充実感を持って取り組むことができた。

ボランティアセンター学生スタッフVSP デザイン工学部都市環境デザイン工学科2年 鴨 潤矢

6. 参加学生の感想

事前勉強会があったため、事前にユニバーサルデザインとインクルーシブデザインの違いについて理解した上で、講座を受講することができました。また講座では、実際に動画を見ながら問題を発見していくことによって、参加者の方とのディスカッションが捗りました。自分1人では普段気付くことができなかった、身近で様々な問題をマルチシナリオで考える習慣をこれから付けていきたいです。

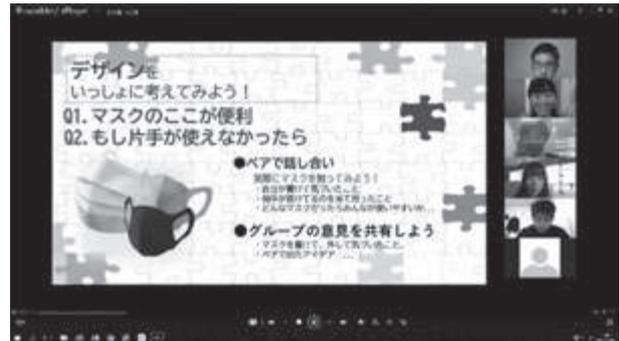
グローバル教養学部グローバル教養学科4年 庭瀬 喜帆

オンラインで話し合いを伴う講義への参加が初めてだったので心配でしたが、ブレイクアウトルームへの移動もスムーズで取り組みやすかったです。上級生の方が司会役をしてくれたので短い時間の中でも話し合いができたと感じています。今回の講義の動画をアーカイブにして参加者がいつでも見返せるようになっていたらいいなと思いました。車いすを使った生活に対する発見があったので、参加してよかったです。

社会学部メディア社会学科1年 白井 杏佳



インクルーシブデザインとは？導入資料



自宅にある「マスク」のデザインを考える



「マスクをする」を「デザイン」した講義編



Zoomでの講義の様子

13. オンラインDEキャンパスツアー

1. 日程 2020年9月16日(水)

2. 場所 Zoom

3. 概要

好評だった8月に続き、第2回目の「オンラインDEキャンパスツアー」を開催しました。学内の動線の変化に伴い、新たな動画を加えたり、企画スタッフが順番にナビゲーターを務め、説明にも個性が見られました。チャット機能を使用してクイズも織り込んだことで、参加者が画面を見ているだけでなく、盛んに意見を交わすことができました。

例年とは違う形のツアーとなりましたが、オンラインならではの内容や工夫もできたことは、大きな収穫だったと思います。

4. 学生参加者数 9名

5. 企画学生の感想

今回、初めて企画を回す側の役割をし、オンラインでの企画の魅力に気づきました。自分の説明したい時にタイミングよく動画を止めたり、チャットを使って質問を聞いたりできたことはとても良かったと思います。オンラインだからこそスムーズでより内容の濃い企画の運営ができたと思います。一方でコミュニケーションをとる難しさも感じました。チャットを用いることでコミュニケーションを積極的に取るうとはしましたが、やはり顔が見えないと反応がわからず、難しいなと思いました。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP デザイン工学部建築学科2年 遠山 開

メンバーが交代で説明することで、自分も知らなかったことを知ることができ、貴重な体験になりました。健康診断でしか学校に行っていない1年生にとって、少しでも役に立っていたらいいと感じます。次はオンラインではなく実際に学校で行えるくらい、コロナが収束することを願っています。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 経営学部市場経営学科2年 富岡 凜

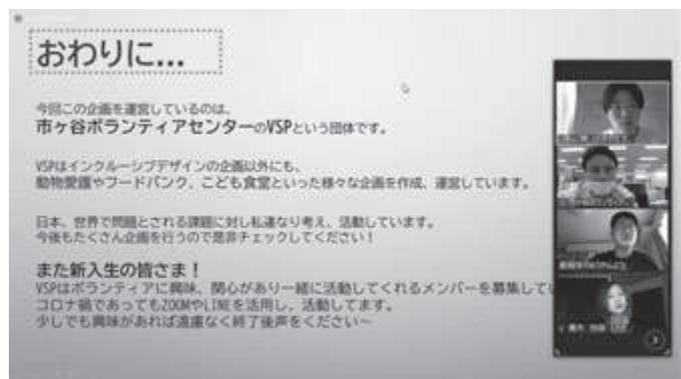
6. 参加学生の感想

キャンパスツアー参加させていただいて、ありがとうございました。あまりキャンパスに行ったことがないので、キャンパスに詳しくなかったです。今回の活動を参加した後、キャンパスのことをいろいろ知りました。とても助かりました。はやく学校でリアルの授業や活動に参加できることを期待しています。ありがとうございました。

政策創造研究科政策創造専攻1年 彭 競秋



2回目を迎えたオンラインDEキャンパスツアー



ツアー後、VSPの活動についても説明

14. メトロオンラインカフェ 「鉄道会社が行っている福祉」

1.日 時 2020年9月20日(日)

2.場 所 Zoom

3.概 要

東京メトロ飯田橋駅ボランティア学生スタッフの蒲生、田中、茂木が鉄道におけるバリアフリーについて発表し、参加者と双方向で知識や意見を共有する催し「鉄道会社が行っている福祉」をZoomにて行いました。駅や鉄道と福祉を結びつけるきっかけを提供すること、および東京メトロ飯田橋駅ボランティアに興味をもってもらうことを目標として設定しました。東京メトロ飯田橋駅ボランティアの3人が、それぞれ「鉄道と福祉」をテーマにスライドを用いて発表した後に、参加者からのコメントを募り対話を行いました。また、東京メトロ飯田橋駅ボランティアの活動も紹介しました。

発表後には質問や意見だけでなく、参加者同士での懇談もあり、主催者・参加者の枠にとらわれずに意見交換が行われました。日常で気付いた参加者の鉄道に関する知識を共有してもらうなど、お互いに理解を深め交流する場となったと思います。休止になっている駅でのボランティア活動が再開する日の為に、このような場を継続していきたいと考えています。

東京メトロ飯田橋駅ボランティア学生スタッフ 文学部哲学科2年 蒲生 幸穂

4.学生参加者数 11名

5.企画学生の感想

3人でそれぞれテーマを決め、それについての資料を用いて発表を行うことで、様々な視点から鉄道とバリアフリーの関係性について伝え、自分達自身学ぶことができた。また意見交換の時間では参加者のバリアフリーに対する考えを知ることができた。Zoomを使ったことでお互いの顔が見え、学びだけでなく交流も深められたと思う。今回の企画でメトロボランティアに興味を持ってもらい、11月の研修会への参加に繋がればなお良いと思う。

東京メトロ飯田橋駅ボランティア学生スタッフ 理工学部機械工学科2年 茂木 巧麻

6.参加学生の感想

鉄道が好きで、鉄道に関する知識を蓄えてきたが、これまで特にその知識を活かすということはなかった。今回、この企画に参加して、私の知識を人の役に立つということを実感することができた。私にとってそれはとても嬉しいことであり、またこのような経験ができれば良いと感じた。

法学部国際政治学科1年 安藤 慶祐

福祉という観点から鉄道について考えるというプログラムは鉄道ファンの私からしても新鮮な体験でした。先輩方の発表ではそれぞれ新たな知識、アイデアを得ることができてよかったです。福祉から鉄道を考えるのは楽しいし社会全体の福祉を捉えるきっかけにもなりうると思いました。また、ボランティア活動に興味があったのでメトロボランティアには是非参加してみたいと思いました。オリンピックがあることも考えると有意義な活動ができそうで楽しみです。最後に、鉄道トークで盛り上がられて本当にうれしかったです。

人間環境学部人間環境学科1年 齊藤 総一郎



バリアフリーの資料を説明する学生スタッフ



鉄道と福祉についての意見交換

15. チーム・オレンジ防災啓発企画 「災害が起きたときあなたは・・・」

- 1. 日程 2020年9月25日（金）
- 2. 場所 Zoom

3. 概要
 チーム・オレンジの普段の活動で使用している避難所運営ゲームを利用し、「災害が起きたときあなたは・・・」を実施しました。自分が避難所を運営する立場になって、起こりうる問題についてどのような解決策をとるかを話し合いました。今回は、自宅避難の人たちに避難所の食料を提供するかと、実際の災害時にも問題になった避難してきたホームレスを受け入れるかについて15分程度話し合いました。まず始めに参加者の意見を聞いた後に、チーム・オレンジのメンバーが意見のまとめを行いました。さらに深い議論をするために避難所がわからないホームレスへの対応方法など追加で起こりうる問題についても考えました。

災害が多く発生する日本で被災者の立場で災害を考えることはあっても普段の生活で災害について、避難所を運営する立場で考えることは少ないと思います。普段とは違う立場で災害を考えることによって新しい気づきを得る機会になったのではないかと思います。
 ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 法学部法律学科2年 福田 桃子

4. 学生参加者数 8名

5. 企画学生の感想
 はじめてのZoom企画でうまくいか不安でした。しかし、参加者の皆さんが意見をしっかり持っていて、予想以上の議論を交わすことが出来たので良かったです。私が思いつかなかった意見もたくさん聞くことができ、勉強になりました。また企画したいと思います。
 ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 法学部政治学科2年 桐尾 奈菜

多くの1年生が参加してくれてうれしかった。今回は本来の避難所運営ゲームとは異なり、イベントカードを深掘りする企画であったが、参加者が積極的に話してくれたので良かった。時間配分や議論のポイントや解説など、反省点を上げるときりがないが、初企画としてはまずまずの出来だったように思う。避難所運営ゲームを実際に取り組んでもらった後に、このようなディスカッションを繰り返しても面白そうだと思った。今後のイベントにも興味を持っていただいた参加者が多くいたことが、今回の企画で一番の成果であったように感じる。
 ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 人間環境学部人間環境学科2年 横山 萌

6. 参加学生の感想
 企画内容の食料提供については、自分の考えと国の方針が違うことを知ったほか、他の方々の意見もあり、より広い視野を持つことにつながったと感じています。短い時間を利用しての企画でしたが、有意義だったと感じています。避難所関連の議題だったので、議論が終わった後の時間などで避難所の防災設備や備品用意についても聞くことができたらより良くなると思います。
 法学部政治学科1年 河井 悠希

私はボランティアサークルに興味があり、チーム・オレンジの企画と聞いて参加を決めました。企画の内容は初心者の私でもわかりやすく、それでいて実際に避難所運営をしないと浮かび上がってこないような問題について討論することができたので面白かったです。他の法大生と話せる機会が少ない中、企画後の雑談で先輩方と話せたのもよかったです。また他の企画にも参加したいと思います。ありがとうございました。
 法学部法律学科1年 青山 智紀



企画学生の資料に沿って議論が交わされた



被災地スタディツアーについての紹介の様子

16. 特別養護老人ホームに音楽を届けよう！

1. 日程 2020年10月～11月

2. 場所 オンライン

3. 概要

本企画は、市ヶ谷ボランティアセンター学生スタッフ（VSP）が10月から11月にかけて千代田区にある特別養護老人ホーム かんだ連雀（以下かんだ連雀）に向けて行ったものです。例年の音楽ボランティア企画では、施設へ出向いて地域の子もたちや高齢者の方々と音楽を通じてふれあってきましたが、今回は新型コロナウイルスの流行のため現地へ行き直接お会いすることが出来なくなりました。

そこで、参加者がそれぞれ演奏したものを録音・撮影し、それらを集約して編集することで一つのDVDを作成してお送りするという形にしました。

かんだ連雀の職員の方にお伺いしたところ、85歳前後の女性の方が多いとのことでしたので、その年代の方が若い頃に流行った曲を中心にその都度問い合わせながらスタッフ間で曲目や曲順を決め、合唱と器楽演奏を織り交ぜたプログラムとなりました。各曲の演奏前には演奏者からの一言メッセージを添え、コロナ禍で直接お会い出来ない状況でも、音楽を通じて想いが伝わるように工夫をしました。

動画や音源の編集はほぼ未経験のことでしたので、どの編集ソフトを使用するかを考えることから始まり、エラーが発生することもありましたが、インターネットで調べながらどうにか解決しました。全部で100を超えるデータを編集するのは根気のいる作業でしたが、個々の演奏が画面上とはいえ次第にひとつに纏まっていくのを眺めていると、まるで共に演奏しているように思えてきました。試行錯誤をする中で生じた様々な変更にも快く応じてくださった参加学生の皆さんや、適切なアドバイス等沢山のサポートをして下さったボランティアセンターの職員の方々のお陰で、無事完成に至りました。

最初はきちんとした形になるかどうか不安でしたが、初めて作成した割には見応え・聴き応えのある動画になったのではないかと思います。かんだ連雀の皆様へ、音楽を通して私たちの想いが届くことを願っております。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 経営学部経営学科4年 菅 結菜

4. 学生参加者数 16名

5. 参加学生の感想

自分が音楽をやっていたこともあり、音楽で参加することのできるボランティア活動があることを知ったとき迷わず応募しました。初めて参加するボランティアに不安を感じることはありましたが、何よりオンラインで行うことが一番の心配事でした。具体的にどのようにすればいいのか全く分からない状況でしたが、SNSを通じて指示を受けたり、Zoomで説明を受けたことで活動をこなすことができました。同じボランティアに参加した人たちや現地の方と交流できなかったのは非常に残念でしたがまた機会があったら積極的にボランティアに参加したいと思います。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

デザイン工学部建築学科1年 裏山 咲希

私は今回軽音メンバーとして参加させていただきました。打ち合わせからリモートだったため、一緒に演奏するみんなと直接顔を合わせることができず残念でしたが、少しでも楽しんで聴いてほしいという気持ちで演奏しました。自分のパートだけだと曲が本当に完成するのが不安でしたが、完成した動画を見たときはとても嬉しくなりました。もしまた機会があれば今度は一緒に演奏したいです。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

キャリアデザイン学部キャリアデザイン学科2年 大庭 舞子



想いをこめた音楽DVD



離れていても気持ちを1つに完成させた曲

17. 手話講座（入門編）

1. 日 程 2020年10月1日、8日、15日、29日、
11月19日、26日、12月3日、10日（全木曜日）

2. 場 所 Zoom

3. 概 要

手話講座入門編では、毎年NHK手話ニュースキャスターの中野佐世子先生を講師に招いておこなってきましたが、今年は全回オンラインでの開催となりました。基本的なあいさつをはじめ、聴覚・視覚障がい者に関する理解を深めたり、事前に郵送したテキスト「みんなで遊べる手話ゲームブック」を基本に、手作りの教材も使用し、歌を交えて多くの手話表現を覚えました。

例年のような、ペアやグループを組んで対面での練習ができなかったことを危惧しましたが、Zoomでは他の参加者の手話表現を見ながら練習することができたので、安心感があり覚えるのにも役立ったとの声も聞かれ、オンラインでも十分に手話が学べることを実感しました。

毎回講義後に質問をする時間を設け、Googleフォームでのアンケートで感想や次回以降のリクエストなどを講師に届けることができ、昨年度までと変わらぬコミュニケーションを取ることができたのも新たな発見でした。

講義を通じ、障がいのある方だけでなく、困っている方を見つけたら、何ができるか考えて、まず声をかけようという気持ちを持つことの重要性を知ることができました。

参加学生からも「ここで覚えた手話を、普段の生活や就職した後にも生かしていきたい」という声が多く聞かれました。次年度も引き続き開催していくつもりです。

4. 学生参加者数 59名

5. 参加学生の感想

手話の成り立ちや色々なお話を伺うことで、なるほどと思うようなことが多くありました。

先生の解説はわかりやすく、かつ毎回復習もやってくださり、学んだことは身につけている感じがしています。困るほどではありませんでしたが、もし次回はどこをやるかなど前もって教えていただけたら予習もできたかなと思います。

先日見ていたニュースでたまたま手話がついており見ていたら、たった8回しか学んでいないのにある程度の単語や流れがわかり、とても嬉しかったです。私は来年から社会人なのでどれだけ時間が取れるかわからないけれど、このように少しでも手話を見たり勉強して、可能なら手話サークルにも行ってみたいです。全8回本当に楽しく学ぶことができました。これからもいつか誰かと手話でお話できるよう頑張ります。ありがとうございました。

法学部国際政治学科4年 新用 遥

約2か月間、お世話になりました。手話だけでなく、貴重なお話もたくさん伺うことができました。私は日本文学科に所属しており、元々言葉の由来に興味があったのですが、手話の由来や表現の仕方も面白いと感じました。また、耳の聞こえない人・目の見えない人の生活や生き方にも興味を持ったので、積極的に調べたり関わったりしたいです。これからも手話や先生のお話を忘れず、さまざまな立場の人の視点から社会を見つめるように意識していきます。短い間でしたが、ご指導いただきありがとうございました。

文学部日本文学科1年 遠藤 寛奈



初めて手話を習いましたが、手の動きはもちろん口の動きや表情がとても大事なのだと先生の手話を見て知ることができました。また、なぜこの言葉はこの動きなのかということ知りながら学べて面白かったです。お気に入りの手話は、「家族」です！

現在、コロナウイルスの影響でみんながマスクをしている状況がいかに耳の聞こえない方にとって影響を及ぼしているのかをこの講座を受けるまで気づいていませんでした。今回学んだことを生かす機会を見逃さないように、日常生活の中で困っている人がいないか気にかけるようにしたいです。

貴重な機会をありがとうございました。

キャリアデザイン学部キャリアデザイン学科2年 大庭 舞子



NHK 手話ニュースキャスター中野佐世子先生



歌に合わせて手話を覚える様子



干支の名前も手話で表現



授業最後の参加者からの質問タイム

18. ベイラー大学「お茶の時間」

1. 日程 2020年10月2日～2021年3月26日（2021年度は～4月23日まで）（全20回）

2. 場所 Zoom

3. 概要

市ヶ谷ボランティアセンター学生スタッフVSPは、2020年10月2日～2021年4月23日に亘り、アメリカのベイラー大学にて週1回Zoom上で行われている日本語交流会「お茶の時間」に継続して参加しました。ベイラー大学からの参加者は、日本語を学習している学生となります。

本企画の主な目的として、次の2つが挙げられます。

1. 日本語を母国語としている者が参加することによる刺激
 2. 異文化のよりリアルな体験・交流
- 上記の2つを目的として、週1回1時間ほどベイラー大学の学生と、日本語と英語両方を使用しながら交流を行いました。各回によって内容は異なることが多く、ブレイクアウトルームを利用して少人数で自由な会話を楽しむこともあれば、メインルームにてVSPが節分などの季節行事の紹介をしたり、ベイラー大学の学生がSt. Patrick's Dayの紹介発表をしたりすることもありました。

継続的な本企画の実施は、ベイラー大学の先生方やボランティアセンターの職員の方々をはじめとして多くの方の協力があってこそ実現できました。参加にあたっては、より意味のあるものとするためにメンバー同士でミーティングを重ねたことも多く、コミュニケーションとは何なのか改めて考える貴重な体験となりました。今年度の参加を通して、お互い学ぶことの多い交流会であったために、来年度も継続して参加できるようにしたいです。また、この経験を活かして国際交流に関係する企画を実施していきたいです。

ボランティアセンター学生スタッフVSP 経営学部市場経営学科2年 富岡 凜

4. 学生参加者数 延べ62名

5. 参加学生の感想

今年は、コロナ禍ということもあり、例年に比べて圧倒的に海外留学や海外旅行が出来なかった年でした。そんな年にこのような企画を通して海外交流をすることができたことは自分にとって良い経験になりました。また英語が得意ではないため敷居が高く感じていた海外交流でしたが、何回も回数を重ねることによって、より楽しくベイラー大学生とコミュニケーションを取れるようになりました。またそれぞれの文化の違いについて話すことができ、よりリアルなアメリカの文化について知ることができました。

ボランティアセンター学生スタッフVSP デザイン工学部都市環境デザイン工学科2年 川上 健太

私自身、外国語が苦手という理由で国際交流というものに距離を置いてきたけれども、今回ベイラー大学との何回かに渡る交流、いわゆるお茶の時間を通して彼らの温かい表情やフレンドシップを垣間見ることができました。日本語を教えるというテーマに基づきつつも英語が苦手な私は、表情豊かな彼らにむしろ助けられながら、和気あいあいとつながれたことに大いなる喜びを感じています。このようなご時世だからこそその交流を満喫できたと実感しています。

ボランティアセンター学生スタッフVSP 法学部政治学科1年 杉山 裕都

Join us for OCHA No JIKAN Make Japanese friends! ZOOM: 90 3413 7424 "OCHA"	1.28 THU 6:30pm	2.3 WED 6:30pm
	2.11 THU 6:30pm	2.17 WED 6:30pm
	2.25 THU 6:30pm	3.3 WED 6:30pm
	3.11 THU 6:30pm	



アメリカの行事について説明するベイラー学生



さまざまなテーマで毎回行われたお茶の時間

19. はじめの1歩カフェ（第4回）

1. 日程 2020年10月5日（月）

2. 場所 Zoom

3. 概要

「社会問題」や「ボランティア」について気軽に話さきっかけの場を提供する『はじめの1歩カフェ』。今回は『はじめの1歩クエスト』と銘打って開催しました。Zoom上のブレイクアウトルームでの話し合いという形ではなく、企画側からメールで送られるいくつかの“ミッション”をクリアし、最後に今回のテーマ「廃プラ」に対してどんな“はじめの1歩”を踏み出すかをオンライン上で共有するという、新しい形をとりました。送られてくるデータ画面もRPG風にし、短い時間で次々に“ミッション”をクリアするというテンポの良い企画となりました。

クエストに答えるたびに、企画側の学生スタッフから参加者全員の答えがまとめてデータで送り返され、それを読んで次のクエストに答えるという手順を繰り返すことで、他の参加者の意見を共有しながら考えを深めることができます。最後に「廃プラスチック問題に対し私たちができることは何か？」の答えを『はじめの1歩カード』として提出し、企画は終了となりました。

企画側の学生は素早く参加者の意見をデータにまとめ、ボランティアセンターの職員と連携しながらメール送受信する必要がありましたが、進行は順調だったと思います。今年はZoom上での企画が当たり前となってきていますが、今回のすべてメールのやりとりで行う企画には、新しい可能性を見出すことができたと感じています。

4. 学生参加者数 16名

5. 企画学生の感想

今年度様々なオンライン企画を実施していますが、新しい形態の面白さを実感する一方で、「進め方の普遍化」を危惧していました。例えば「Zoomを使用する」「ビデオ通話機能の活用」「チャット機能の併用」等は新しい形ではあるものの、全てのイベントがこうではオンラインの可能性は広まりません。今回は「顔出ししない」「参加者は直接交流できない」状態で、チャットのみを使った企画にすることで学生の新たなニーズに応えることができ、オンラインだからその強みが存分に発揮されていたと思います。この方法のメリットは「制限時間の設定により、スピーディーに課題に取り組むことができた。他の人の意見をみることで理解の深まりや新たな発見があった」「顔出しなどもなく、率直な意見を書き込むことができた」「ゲーム感覚で手軽にできて楽しかった」という参加者の感想から分かります。

今後も0から企画を作る私たちだからこそ生まれるアイデアで様々な学部生と社会問題・ボランティアで繋がれるような企画を作りたいと改めて感じました。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 文学部心理学科2年 青木 怜奈

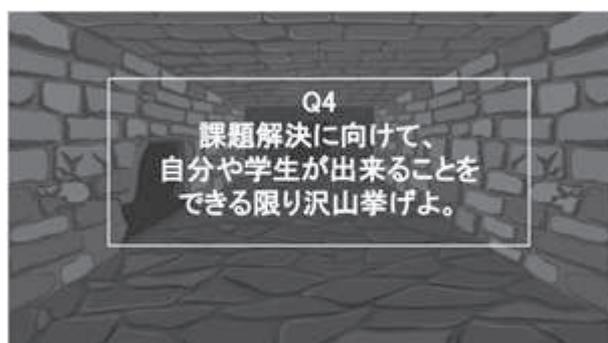
6. 参加学生の感想

コロナの自粛期間で自分の時間が増え、何か新たな挑戦をしてみたいと感じていた中で、今回の企画を見つけました。実際に参加したことで、廃プラ問題についてより深く考えるきっかけとなりました。顔出しなどもなく、率直な意見を書き込むことができて良かったです。ありがとうございました。

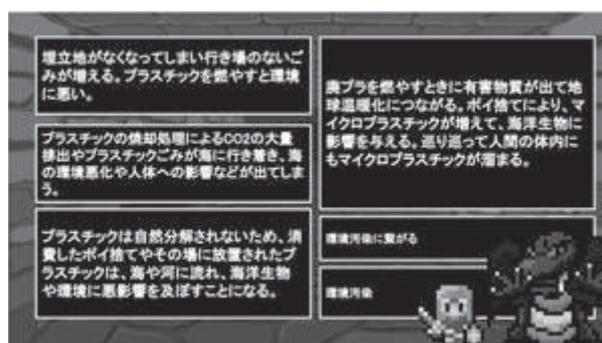
経営学部経営学科3年 吉田 千鶴

廃プラ問題は興味、関心がある人とならない人、そして実際に少しでも行動している人としていない人の差が激しく、今回は廃プラ問題に興味がある人と意見交換ができてよかったが、問題を解決するには興味がある人だけではなくそうでない人も行動しなければならぬ規模の問題なので、そういう人たちに関心を持ってもらう機会を作らなければならないと思った。

生命科学部環境応用化学科1年 小口 優菜



企画学生から送られるクエストを解く



参加者の回答がすぐに共有される

20. 防災キャンプ（チーム・オレンジ企画）

1. 日程 2020年10月24日（土）・25日（日）
2. 場所 外濠校舎（メディアラウンジ・5階526会議室）
3. 概要

- 講師：宮崎賢哉氏（災害支援・防災教育コーディネーター）
- 参加者設定：参加者は当日「被災者」となる。マグニチュード7.3の首都直下型地震により市ヶ谷キャンパスは震度6強の被害を受け、ライフラインは使えない状況の中大学構内に滞留することとなった。
- 宿泊型の企画であるが、実際は被災を想定することは不可能であるため持ち物は「普段の持ち歩いているもの」のみで行う。
- LINE を活用し、連絡や記録を行った。参加者には2種類のグループに登録してもらった。1つは運営側から一方的に情報を配信する「公式アカウント」、もう一方は参加者がリアルタイムで感想を送ることが出来る「グループLINE」である。

—1日目—

- 起震車（30分）
震度7までの揺れを体験し、地震の恐ろしさを実感した。
- オリエンテーション（1時間）
講師宮崎氏より避難所について、首都直下型地震が起きたときの想定についてのお話をいただいた。
- 防災備蓄倉庫見学、並行して AED 講習（1時間）
- 寝床づくり、非常食による夕食（2時間）
4班に分かれて自らが寝るベッドを段ボール・パイプ椅子を用いて作成。また、コロナウイルス対策として、椅子や、机を使って仕切りを作成。その後、非常食の夕食を試食した。
- 災害時に役立つグッズづくり（30分）
新聞紙で作るスリッパ、キッチンペーパーで作るマスク、ペットボトルランタンを作成。
- 災害対応カードゲームクロスロード（45分）
クロスロードというカードゲーム形式の防災教材を用い、災害時に想定される事態に対し、自分ならどうするかを考え、意見を共有した。
- 就寝
避難所を想定し、実際に大学構内にパイプ椅子ベッド・段ボールベッド・毛布のみで就寝。

—2日目—

- 朝食
夕食と同様に非常食を試食。
- 簡易トイレづくり
簡易トイレのキットを使用。実際に水やえいようかんを入れ、凝固剤で固める体験をした。また、宮崎さんが持ってきてくださった感染症対策のガウンの着用体験も行った。
- SNS 講習（1時間）
災害時における SNS の使用方法を学んだ。併せて、実際に大学の安否確認サイトへ自らの情報を送る体験も行った。

企画
法政大学 市ヶ谷ボランティアセンター
チーム・オレンジ

大学で被災したら？
**防災
キャンプ**

日時
10月24-25日 1泊2日
集合 24日 ⑤15:45
解散 25日 ⑤12:00

講師
災害支援・防災教育コーディネーター/社会福祉士
■宮崎 賢哉氏

集合場所
市ヶ谷キャンパス
外濠校舎1階メディアラウンジ

参加費
無料

持ち物
普段大学に行くときの所持品
(詳細はしおりをご確認ください)

会場
市ヶ谷キャンパス
外濠校舎

内容
防災倉庫の見学/非常食体験
起震車体験/防災グッズづくり
大学構内宿泊/ワークショップ

申し込み/お問い合わせ
市ヶ谷ボランティアセンター
☎ 03-3264-9516
✉ ichigayvcv-apply@mt.hseai.ac.jp

定員
8名

・なますのクイズ学校（50分）

なますのクイズ学校とは、紙芝居形式の防災カードゲームで、災害時に起こるトラブルを、自らが持つカードのアイテムで解決方法を考えるものである。班ごとに最善の方法を考え、全体で共有した。

・振りかえり（30分）

印象に残ったプログラムや防災キャンプに参加して自分の中でどういった変化があったのかなどを共有するなど、今後のことも見据えた振り返りをした。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 法学部政治学科2年 桐尾 奈菜

4. 学生参加者数 11名

5. 参加学生の感想

防災キャンプに参加し、実際の災害を想定して大学で2日間を過ごしたことで、知識だけではなく実体験として「災害時に何をすべきか」という一例を学べたとともに、まだまだ災害に対する備えが足りていないと自省する機会を得ることができた。いつ起きるか分からない災害に対する心構えを忘れないようにしようと、参加を機に強く思い直せて有意義だった。

ボランティアセンター学生スタッフVSP 経営学部経営学科2年 五味 祥紀

今回の経験で防災意識がより高まりました。食料の少なさや寝床作成など、避難した場合の実情を実践で知ることができたのがとてもありがたかったです。また、SNS講習では、考えていたより多くの手段で安否確認、救助要請、情報収集ができることを知りました。宮崎さんの講義では、実際の災害の話や心構えを学びました。また、避難所や災害時のその場の判断力をゲームで養うことができ、とても充実した2日間でした。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 法学部政治学科1年 河井 悠希



ダンボールベッドを組み立てる様子



ソーシャルディスタンスをとった起震車体験



AED講習の様子



感染症対策用のガウン着用体験

21. ベイラー大学「お茶の時間」(ハロウィン企画)

1. 日程 2020年10月30日(金)

2. 場所 Zoom

3. 概要

2018年から始まった提携校のベイラー大学とボランティアセンター学生スタッフVSPとの交流プログラム。今年度はコロナ禍ということもあり、オンライン(Zoom)を利用した交流を行ってきました。ベイラー大学が日本語を学ぶ学生の為に設けている場「お茶の時間」に毎回参加しながら、同時に数回にわたって打合せを重ねてきました。

10月末のハロウィンに合わせ、日本の季節ごとの行事や文化についての紹介を、VSPメンバーが作成したクイズなどを通して行いました。英語で日本の文化を説明することは簡単ではありませんでしたが、事前に用意したスライドなどを使用したため、ベイラー大生にも理解してもらえたと思います。

日本語と英語の両方を駆使しながらの会となりましたが、終了間際には笑顔が溢れ、リラックスした時間となりました。

4. 学生参加者数 (VSP 4名、ベイラー学生8名、東北大生4名)

5. 企画学生の感想

オンライン会話サービスがこれほどまで普及したこと。3月に企画が実施できなかったこと。双方が今後の関わりについて前向きに考えていたこと。これら含め様々なきっかけがなかったら成り立っていない、発想もしない企画だったと思います。毎週の交流の時間に参加しながら、お互いにとって楽しくかつプラスになるように、都度話し合いながらアイスブレイクやイベントを実施したり、日本語と英語を同程度使ったりと試行錯誤したことで、たくさんのことを学びつつ楽しい時間が過ごせたと思います。私もまた先方の学生さん数人と個人的に連絡をとる仲にならせていただいて、ますます今後の企画に繋がられるのではないかと期待が膨らんでいます。

今回の体験をもとに、他国の文化を知る、または知るためのはじめの1歩として何か企画に繋がれたらと私自身が考えるきっかけにもなりました。

ボランティアセンター学生スタッフVSP 経営学部市場経営学科2年 富岡 凜

初めての企画参加のため戸惑うことも多かったです。当初は外国人の方はみんな積極的で物怖じしないイメージがあったのですが、実際にベイラー大学の生徒さんとお話してみると、馴れない言語を使うことに緊張している人のほうが多く、親近感を持って接することが出来ました。日本語をあまり話せない学生さんも多いため、英語日本語のバランスを考えながら企画するのは新鮮であり、企画していく中で不安な学生さんたちを引っ張り、盛り上げる能力が必要だとも思いました。初対面の人とでも和気あいあいと話せる人柄はどの国でも共通で武器になると思います。今回の企画では自分の得意・不得意も知れた学びの場としていい経験となりました。

ボランティアセンター学生スタッフVSP 人間環境学部人間環境学科2年 百瀬 沙彩



ベイラー大学、東北大学の学生との交流の様子



VSPの企画学生が日本文化を交えたクイズを作成

22. 東京メトロ飯田橋駅ボランティア研修会

1. 日程 2020年11月14日(土)

2. 場所 富士見ゲート(学生ホール)、
東京メトロ飯田橋駅構内

3. 概要

市ヶ谷ボランティアセンターと東京メトロは、飯田橋駅構内の「見守る目」として、2017年6月から学生によるボランティア活動を継続して今年で4年目となります。まず公益財団法人日本ケアフィット共育機構より講師を招き、座学と実技を交え、活動にあたっての基礎知識や注意点、心構えを学びました。

座学では、障がい者差別解消法の説明からはじまり、障がいには個人差があること、サポートを不要としている人もいるので、必ず声がけをして確認して欲しいとお話がありました。また簡単な手話や英会話などを、ボランティアに活かせる技術として教えていただきました。

実技では、車椅子利用や視覚障がいの方との接し方についてや、車椅子の折り畳み方などの基本的な取り扱い方法、また、二人一組になり、視覚障がいの方のご案内方法などを体験しました。

最後にペーパーテストを実施し、全員にサービス介助基礎研修の修了証が手渡されました。



その後、市ヶ谷キャンパスから飯田橋駅に移動し、実際の活動についての研修を受

けました。メトロ社員、飯田橋駅職員の方々からの説明を受け、活動の様子を身をもって感じる事ができたと思います。特に、「実際の活動の場で、学生の皆さんの力を発揮していただきたい」との駅社員の方からの言葉に、参加者は目を輝かせていました。

今年は新型コロナウイルス感染症の影響で駅でのボランティア活動もできない中、ようやく実現した研修会でした。通常の2倍以上の広さを確保した会場、感染予防を織り込んだ研修内容、小グループに分かれての活動など、工夫がなされており、参加学生にとってもいい経験になりました。

「大学から一番近い地域貢献ボランティア」である東京メトロ飯田橋駅ボランティアを今後ともしっかり進めていきたいと思っています。

4. 学生参加者数 18名

5. 企画学生の感想

コロナ禍ではあったが、本年度も無事研修会を行うことが出来、9名の新規メンバーが集まった。特に、まだキャンパスでの講義もままならない中で1年生のメンバーが4人も入ってくれたことがとても嬉しかった。例年通りの活動を行うことはまだ難しいかもしれないが、人の役に立ちたいと思って入ってくれた4期生の皆さんと一緒に見守り活動や道案内といった、安心して利用できる駅づくりを続けていきたい。

東京メトロ飯田橋駅ボランティア学生スタッフ 経済学部経済学科2年 田中 海翔

研修会全体を通して新規で参加した4期生との交流を深めることができ良かったと思う。授業においては対面を控えるというのがコロナ禍での大学の判断ではあるが、実際に顔を合わせることができ、メトロボランティアの活動が一步リードしたと言えるのではないかと。感染者数は増加の一途を辿っており、まだ本格的な駅での活動はできないが、活動再開がしたら4期生をリードするような形で動ければと思う。

東京メトロ飯田橋駅ボランティア学生スタッフ 理工学部機械学科2年 茂木 巧庵

新規、既存のメンバーとも顔を合わせることで、改めて連帯感を高めることができた。研修会を通してメンバー同士で交流を深めており、駅での和気藹々とした雰囲気が印象的だった。昨年学んだご案内の仕方とは異なる、感染症対策を踏まえたやり方が参考になった。メトロさんへの情報共有が徹底しておらず、混乱がおきてしまったので、次回以降改善していきたいと思う。

東京メトロ飯田橋駅ボランティア学生スタッフ 文学部哲学科2年 蒲生 幸穂

6. 参加学生の感想

緑内障の症状を理解するために、ゴーグルをかけて歩き回った体験が1番印象に残りました。

ゴーグルをかけると、視界はぼんやりと緑色に濁ってしまい、前方30センチくらいまで近づかないとその物体が何か確認することができなかつたです。これほど視界が悪い中だと、外出するのも怖いと感じました。この経験から緑内障の方は満足に目の前の光景が見えていないことを理解できたので、今後のボランティア活動で活かせると思いました。

社会学部メディア社会学科4年 高塚 幸将

「障がいとは社会が作り出すものである」という言葉が印象的だった。今までは車椅子に乗っている方や目の見えない方に声をかけるのをためらっていた。しかし、研修受講後は積極的に対話していく重要性を感じた。また、自分が実際に車椅子乗車を体験することでは、介助者が進む方向や段差を口に出してくれることはとても安心感につながることを知った。ボランティアでもお客様と対話を大切にすることを念頭に置きながら活動していきたい。

法学部国際政治学科3年 金沢 ひなた



段差での車いすの使用法の実技



緑内障の方の見え方を体験する様子



駅職員の方から施設や活動の説明を聞く



全員がボランティア認定証をいただく

23. コロナ禍を生きる移民について考える ～日本に暮らす外国人についての理解を深めよう～

1. 日程 2020年11月16日(月)

2. 場所 Zoom

3. 概要

移民をとりまく環境は依然厳しく、さらに新型コロナウイルス感染症の影響によりさまざまな苦勞や困難に直面しています。今回は本学兼任講師の加藤丈太郎氏を講師に迎え、日本で暮らす在留外国人の状況や彼らが抱えている問題に関して、特に新型コロナウイルス感染症の影響で顕在化した問題について講義いただきました。

講義の後に行ったケーススタディ「ベトナム人のシェルターと近隣住民」では、実際に起きた事例を通して自身が当事者となって考えることにより、新しい視点や意見が生まれました。また、今回三輪田学園の生徒も参加し、高校生と大学生が意見を交わすことにより互いに刺激を受ける機会にもなりました。

講座後、加藤氏が自ら携わっている日本語教室のボランティア等に参加を希望する受講者もあり、活動につながる企画を今後も実施していきたいと考えています。

4. 学生参加者数 18名(他、三輪田学園9名)

5. 企画学生の感想

今回も他の講義企画同様、計画から実施までをすべてオンラインで行った。当日は司会進行を中心に行わせていただいた。講義ではZoomの投票機能を何度か使用することで、Zoomによって生じる弊害でもある一方的な講義ではなく、生徒参加型の講義にしてくださった。この方法は他の企画でも活用していきたい。後半のワークショップでは講義で視聴したビデオを基に、グループに分かれて自分ならどのように解決するか、と実際にあった事件に関して考察した。

今回は三輪田学園の高校生も参加し、大学生顔負けの活躍をしてくださっていた。三輪田学園だけでなく中高生も参加可能なボランティアが増えるとより活気づくだろう。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 人間環境学部人間環境学科2年 百瀬 沙彩

6. 参加学生の感想

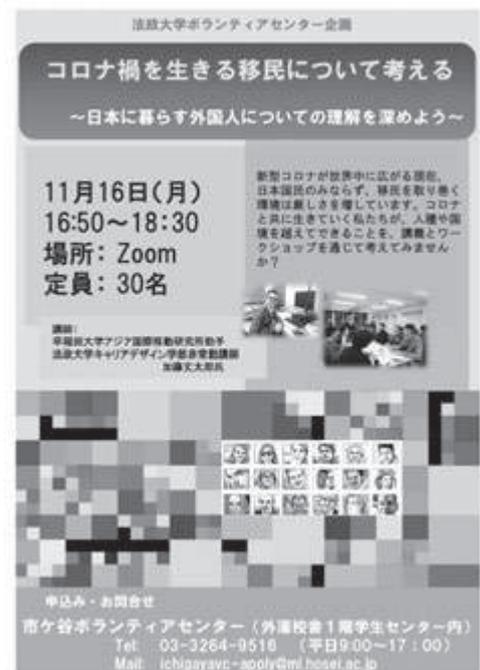
コロナ禍での移民の方々が抱えている問題は、想像以上に大きいものがあるということがわかりました。先生のお話をお聞きして、日本に來ている技能実習生がどのような問題を抱えているのかということをもっと多くの人に知ってもらわなければならないと感じました。また、映像資料視聴や、ワークショップを通して、技能実習生と私たちの間で起きる問題は、行政や国に対して解決案を頼むのではなく、私たちが積極的に解決しなければならないと感じました。お互いの文化を互いに知ることが大切であると感じさせられました。

文学部史学科3年 市瀬 恵

講義を聞くまで日本がもっと発展していくためにも移民をたくさん受け入れるべきだと考えていました。しかし、技能実習生の本来の目的である「日本で学んだ技術や経験を母国に帰って活かす」ということが達成できないような状況があるなど、日本が移民を受け入れる体制が整っていないことを知り、まずはそういった体制を整えることが必要で、それが出来ないうちはあまり移民を受け入れるべきではないのかもしれない考えるようになりました。

自分の考えを広げることができたという点で大きな学びがありました。

国際文化学部国際文化学科3年 藤谷 美希歩

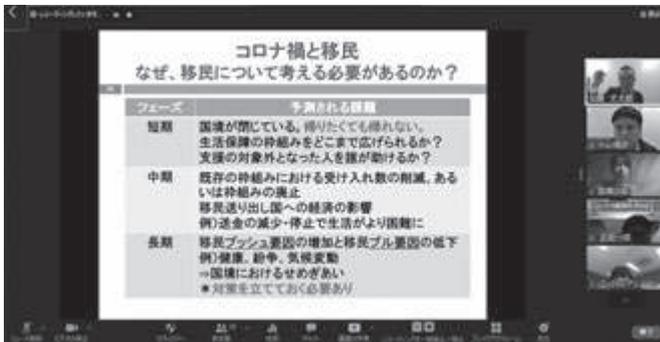


技能実習生について「妊娠」も問題になっていることはあまり知られていない事実であり、深刻だと感じました。また、このコロナ禍で、ソーシャルディスタンスを保つための異文化交流、異文化理解の施策を考える難しさを感じました。特に日本人の橋渡しについては、「選挙権がない人を手助けしてもメリットがない」という考え方にまさに多民族国家アメリカの考え方が、今、日本にも広がっており、国際化されているのだと感じて新鮮でした。多文化社会コーディネーターというポジションがあることにも興味を持ちました。

キャリアデザイン学部キャリアデザイン学科 1年 下津佐 加代

今回が私にとって初めて「移民」というものについて考えるきっかけとなりました。コロナ禍で世界が混乱している中、自国を離れるだけでも不安を感じる移民の心境は以前にも増して深刻であることがわかりました。コロナ禍で医療をはじめ、経済が逼迫している中、「移民」という観点を見つめることは実際に少ないと思います。マイノリティなことではあるとは思いますが、自国に帰れない、働けない、食べられない、罪を犯してしまう、最悪は命を絶つという決断をしている人々がいるということは決して見逃すことができない問題であると思いました。ニュースで話題になっていた家畜の窃盗や違法売買などで、偏見というものも出てきてしまいますが、その背景には「移民」の人だからこそ抱えている悩みがあるのだと思います。そこに、私たちホスト国がどのように寄り添い、支え、両者の架け橋となり社会をより良くしていくのが求められていると感じました。私もホスト国の一員として、人の根底として、少しでも支えることができたらなと思います。

経営学部経営戦略学科 1年 高山 野々香



講義を通してテーマを自分事として捉える



大学生と高校生が真剣に意見を交わした



VSP 学生スタッフが司会進行を務めた



講師の加藤丈太郎氏

24. <大和証券福祉財団助成事業> 東北被災地ボランティアツアー

1. 日程 2020年11月21日(土)～23日(月)(42次隊)

2. 場所 岩手県遠野市・大槌町

3. 概要

市ヶ谷ボランティアセンター学生スタッフ「チーム・オレンジ」のメンバー5名が東日本大震災の被災地でボランティア活動を実施しました。現地での活動内容は①語り部の方の講和(震災学習)②大槌町文化交流センターでのプランター作り、草取り、館内装飾活動③震災学習とツーリズムを組み合わせた研修の検証(研修疑似体験、ポスター作製、意見交換)の3部構成で行われました。

今年度は例年8月に行われている被災地への学生ボランティアツアーがCOVID-19の影響で中止となりましたが、今回、小規模ながら現地に学生を派遣することができました。東日本大震災から間もなく10年が経ちますが、学生ボランティアのニーズは多くあります。ボランティアセンターではこれからも多くの学生を被災地ボランティアとして派遣していきます。

4. 学生参加者数 5名

5. 参加学生の感想

大槌に初めて訪れたため、復興の歩みを体験と照合することはできなかったが、おしゃっち内の模型や資料から、震災前の人と人、人と土地との結びつきを強く感じる事ができた。同館裏手の小高い山に実際に登ったが、その階段は急で、今も整備がなされてなく、非常時にこの階段を上ることに疑問を覚えた。神谷さんの「震災というきっかけはマイナスだったけど、外から人が来ることはポジティブにとらえたい」という言葉が印象的だった。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 人間環境学部人間環境学科2年 横山 萌

コロナの影響により例年とは違う活動になりましたが、民泊などとても良い経験になりました。特に終日を通して大槌町で活動することで、地域の方のコミュニティやスタッフの方との関わりなどをより身近に感じる事ができました。民泊もそうですが、例年よりも現地の方々の生活に根付いた活動ができたのではないかなと思っています。

このような状況下で何ができるのか、チーム・オレンジとして考える事ができたので非常に充実した2日間でした。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 文学部英文学科3年 中辻 佳菜

まず、コロナ禍の中遠野に行けるよう調整をしてくださった関係者の皆様には感謝してもしきれません。4年間毎年遠野に行けた事は私にとってかけがえのない経験であり、色褪せることのない大切な思い出です。今回遠野について私が良かったと思えた事は2つです。1つは、大槌にて住民の方に声をかけて貰えた事です。私の経験上声をかけられたというのは初めてです。もう1つは、コロナ禍の中でも出来ることを見つけていけいとお感できたことです。必死に考え行動する後輩たちを見て、私も短い大学生生活の中で精進していかなければならないと思われました。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 法学部政治学科4年 白川 直樹

コロナ禍ということもあったが今年は去年とは違う体験や経験をすることができた。

大槌町に行った際、現地の語り部さんのお話を聞いて知らなかったことを学べ、震災の規模を自分の目で見る事ができてとても勉強になった。今回の活動で初めて民泊を体験することができた。最初はみんな遠慮していたが、オーナーの方の優しさと温かさを感じるうちにすぐに楽しく過ごせるようになった。朝には飼っている犬と一緒に見晴らしのいい丘に行ったり、マウンテンバイクも体験することができてとても楽しかった。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ デザイン工学部都市環境デザイン工学科2年 島田 知樹



ガイドの方からお話を聞く（震災学習）



軽作業（プランターカバーづくり）のお手伝い



マウンテンバイクでツーリズム研修体験



復興の進む街並みを臨む

25. 共生社会・生きやすい社会を考える ～難病から学んだ私が伝えたいこと～

1. 日程 2020年11月27日(金)

2. 場所 Zoom

3. 概要

原因不明かつ経過が慢性で負担の大きい疾患である希少難病患者は全国に5万人未満いると言われてます。自らも希少難病を抱える香取久之氏(特定非営利活動法人・希少難病ネットつながる・理事長)により、目に見えない難病の症状を持ちながら生きることの難しさについて講義をしていただきました。事前に参加者へワークシートを送り、「自分自身が生きにくい時、どのように解決したか」などを考えた上で参加したため、ワークショップで本講義のテーマである「共生社会・みんなが生きやすい社会をつくるには」について深い議論を交わすことができました。

また、今回は三輪田学園の中・高校生も参加し、ブレイクアウトルームでは大学生との話し合いに対等に参加してくれました。年齢差はありましたが、お互いの考えやボランティアに対する姿勢を垣間見る事ができ、いい刺激になったと思います。「相手のことを良く知ること」「本音で話せる関係性をもつこと」といった意見が出た一方、見えない症状を周りに伝える重要性も改めて共有しました。本講座から学んだことを今後に活かし、みんなが生きやすい社会をつくるために自分ができることを考えていきたいと思えます。

4. 学生参加者数 9名(他 三輪田学園9名、関西大学職員1名)

5. 企画学生の感想

講師の方との連絡などは計画から実施までをすべてオンラインで行い、当日は司会進行を中心に行った。ワークショップも自身で進めたが、時間配分の共有が足りず時間配分が悪かったことが反省点として挙げられる。学生もほとんどビデオをオープンにし、真剣に事前配布したメモに書き込みながら聞いていたようでよかった。事前にメールで講義を聞きながらメモを取るためのシートを配布していたのは成功だったと思うので活用していきたい。三輪田学園の中高校生も参加してくれていたため、これからも様々な企画に参加していただきたい。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 人間環境学部人間環境学科2年 百瀬 沙彩

6. 参加学生の感想

「自立は、依存先を増やすこと」これは以前から知ってはいましたが、改めて考えさせられました。「死んで楽になる保証はない」この言葉には大変納得致しました。

香取さんから、病と共生することを学びました。自然と共生・人と共生する以上に、今後人生100年時代に向かい、病と共生することも重要であると感じました。参加して良かったです。ありがとうございました。

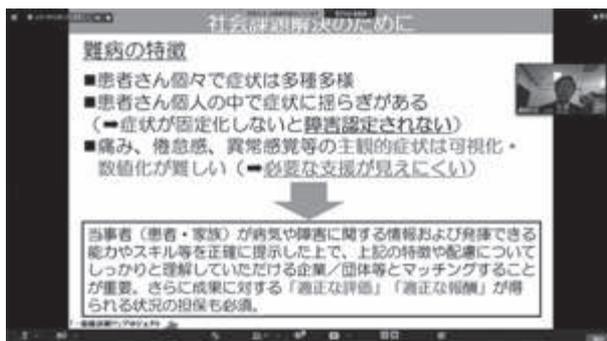
人間環境学部人間環境学科3年 佐藤 知代子

私は「共感者が少ない病を持っている方に寄り添える人になりたい」、さらに、病を抱えていらっしゃる方から直接お話を伺いたいと考えておりました。そんな時この講義の中で「自分が持っている病気は、医師や親を含めた周りの人になかなか理解してもらえなかった。」と聞いた時、私は参加してよかったと心から思いました。

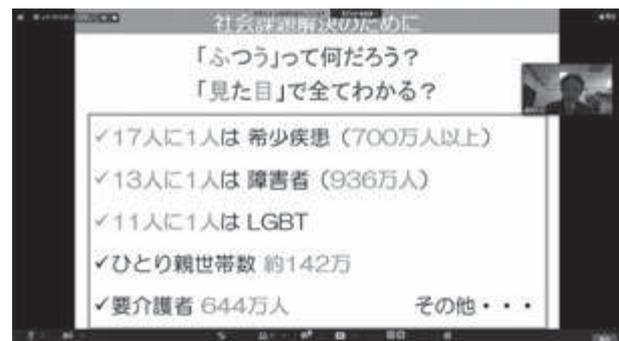
“どんな病気を持っていてもその人の生きる価値、その人が周りに与える希望は必ずある。1人ひとりに寄り添いその人の立場に立てて考えることが大事だ。”と学びました。

私は将来、病を抱えている方や自分自身のことで悩んでいる方の相談相手となり、1人の共感者になりたいと思っています。そのためには、いろいろな立場の方の意見を聞くことが大事だと思います。将来の前進となった今回の講座に参加させていただき、良かったと思います。ありがとうございました！

三輪田学園中学校3年生



自身も難病を抱える講師(香取氏)の講義



「ふつうって何だろう?」をデータで確認

26. コロナ禍の「子どもの貧困」を考えよう ～子どもたちの未来に私たちが今できること～

1. 日程 2020年12月3日(木)

2. 場所 Zoom

3. 概要

特定非営利活動法人 Learning for All の吉山泰子氏の協力のもと、講義とワークショップを実施しました。Learning for All は「子どもの貧困」問題を本質的に解決するために、学習支援事業や居場所支援事業等を継続して行っております。

本企画はまず、吉山氏から「子どもの貧困」の概要をご説明いただいた後に、参加者が「子どもの貧困」を身近なものとして考えることができるワークショップを行いました。参加者は「音楽会で演奏する楽器を決めよう」というテーマでグループに分かれ、決められた設定に基づき話し合いました。ですが楽器が簡単に決まることはありません。実は各グループの中に貧困家庭で育つ子どもの役をした方(以下Aさん)がいて、Aさんは自身の事情を知られないように楽器を決めなければならないのです。その後全体で話し合いの結果や感想を共有しました。そこではじめてAさんが置かれる状況が分かり、「子どもの貧困」問題を「自分事」として捉えるきっかけになったのではないかと思います。

話し合いや質疑応答の時間に多くの参加学生が積極的に発言する姿がとても印象的でした。今回学んだことを自分の中で留めておくのではなく、身近な人に話していただくと嬉しいです。そのちょっとした行動が、社会問題を解決することに繋がるともかもしれません。

「子どもの貧困」を自分にも関係がある問題として捉え、実際の行動に移すきっかけとなるような企画を今後も実施していきます。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 文学部日本文学科3年 齋藤 真悠

4. 学生参加者数 21名

5. 企画学生の感想

この企画も、講師の方との打ち合わせから本番までオンラインで実施しました。実際に子どもの貧困問題について活動している講師の方の勉強になるお話や、子どもの貧困について、参加者たちが子どもになってみて考えることになったワーク、チャットや口頭での質問など、充実した100分を過ごしました。また、多くの参加者の方々が、積極的に発言、質問してくれました。どの質問も今までの自分の考えをハッとさせるようなものだったり、目の付け所が凄く、勉強になるものばかりでした。

しかし、オンラインならではの反省点などもあったので、これは次の企画に活かしていきたいです。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 法学部政治学科1年 田中 みのり

6. 参加学生の感想

貧困の子どもの多さに気付くことが出来ました。ワークを通して自分の周囲に貧困の子どもがいる状況は身近であることを感じ、常に相手の背景を考慮して接することが大切なのだなと思いました。これからは、自分を大切に思ってくれる人がいることが当たり前ではないことを頭に入れておきたいと思います。

キャリアデザイン学部キャリアデザイン学科1年 木島 有彩

ロールプレイングワークでAさんの役をやり、とても複雑な心情になりました。貧困に悩む子どもたちは、学習面で課題を抱えるだけでなく、音楽会などの行事も十分に参加し、楽しむことができないと思うと心が痛みました。子どもの貧困という問題は単に学歴格差や経済格差を生むだけでなく、個人の感性や人間性の成長にも影響を及ぼすのだと改めて感じました。今回学んだことは家族、友人に共有し、まずは自身の周囲から意識を変えていきたいと思っています。本日は貴重なお話、ありがとうございました。

グローバル教育学部グローバル教育学科3年 村田 莉彩



子どもの貧困について意見を交わす様子



次々とチャットにコメントが書き込まれた

27. チーム・オレンジ主催 「福島被災地スタディツアー」

1. 日程 2020年12月6日(日)

2. 場所 福島県いわき市、双葉町

3. 概要

本企画は市ヶ谷ボランティアセンター学生スタッフ「チーム・オレンジ」が企画し、チーム・オレンジだけではなく被災地に初めて訪れる学内の一般学生をターゲットとし、福島県の被災状況や復興に向けた取り組みを学び、風評被害について考えることをスローガンとしました。

午前中に訪れたファーム白石では、農家の白石さんに震災直後の風評被害の状況や、風評被害をなくすための取り組みについてお話していただきました。また震災から10年が経とうとしているが、野菜が豊作の年は今でも福島県産の野菜が最後まで売れ残る現状を知り、まだ風評被害は終わっていないことを実感しました。農業においては、お金と物のやりとりだけではなく、想いを消費者に伝えることや人とのつながりが大切だと学びました。またブロックリーの収穫体験も行い、関東ではなかなかできない貴重な経験をしました。

その後訪れた2020年9月に開館したばかりの東日本大震災・原子力災害伝承館では、原発事故により学校に放置されていた児童の私物などが展示され、当時の状況を生々しく伝えていました。当時の東京電力の会議の映像なども上映されており、混乱していた状況を詳細に学ぶことができました。また語り部の方に講話していた

だき、未来の明るいエネルギーとされていた原子力発電は果たして本当に明るい未来をもたらしたのか考えさせられました。原発事故によって失われたもののうち一番大切な物は家や財産ではなく、人との繋がりであることを痛感しました。

今回のツアーで現地での視察、講話を通して震災の記憶を共有し、風化防止、防災意識の向上に結びつけることができました。さらにスローガンである「風評被害について考えよう」を達成し、福島県産の農作物に対する学生の意識を変えることができたと思われま。またこのプロジェクトを通じて「チーム・オレンジ」の学生スタッフは、企画書作成、準備、当日の運営など企画を実行する一連の流れを学びました。今後も震災の風化防止・防災啓発に繋がるプログラムを実施していきます。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 法学部法律学科2年 福田 桃子

4. 学生参加者数 37名

5. 参加学生の感想

生産者さんの実際の声を聞くことができ、消費者である私の理解が深まり大変有意義な時間でした。収穫体験はとても楽しかったです。今回訪れなかったら一生知らずにいたかもしれないことをたくさん見て感じて考えることができました。「人」「町」「コミュニティ」など、普段当たり前のように私の周りがあるものがある日突然無くなったら、と今までしっかりと考えてこなかったことを見つめる機会になりました。

目で見ていない物を憶測で語ることの恐ろしさ、またその被害は自分が考えているより大きいのだなと思いました。まず「本当にそうなのか？」という目線を持ち、信頼できるデータを自ら収集し、冷静に判断する。今回得た教訓として、これから忘れずにたいです。

国際文化学部国際文化学科1年

農業についての情報が伝わっていないという言葉が印象的だった。たしかに、自分は首都圏で生まれ育ち、産地や農家に対するイメージはあまりなかった。伝えていく方向として、実際の種植えなどを見せるというのは農業を身近なものに感じさせるいいアイデアだと感じた。ニュースを見た時に大事なことは想像力である。放射線被害の可能性があるため避難指示を出された時の車の渋滞の写真から読み取れること。すぐに帰れると思った人達の列だという視点は自分にはなかったものでした。もし自分だったら、そう考える想像力は社会学部の理念



である「社会課題を解決する」という意味でも必要だと思いました。

百聞は一見にしかず、と言うようにどんなに大学などで福島や原発のことを勉強しても実際に見てから分かることの方が多いと感じました。コロナ禍で失われてしまっている場としてフィールドワークの価値はとても高い。実際に現場を訪れる機会を与えてくれたスタディツアーはとても貴重な経験でした。次回以降も参加したいです。ありがとうございました。

社会学部社会政策学科3年



いわきの農業が受けた風評被害について伺う



講師の方からお話を聞く



はじめてのブロッコリー収穫体験



収穫後、全員で集合写真

28. おしゃっちパネル展示企画（チーム・オレンジ企画）

1. 日 程 2020年12月12日（土）
2. 場 所 岩手県大槌町 地域交流施設「おしゃっち」
3. 概 要

2011年の東日本大震災発生から、被災地支援を継続してきたボランティアセンター学生団体チーム・オレンジ。お世話になっている現地NPO法人からご提案いただき、岩手県大槌町の地域交流施設「おしゃっち」にて、その活動を紹介する掲示物の作成を行うことになりました。

10年に渡る活動経緯を、チーム・オレンジのメンバー（内田彩音、中辻佳奈）がパネル作成し、また年に2回発行している「チーオレ新聞」6号分と共に展示し、壁一面での活動紹介となりました。

「おしゃっち」は地域の住民の方々が日々集う場所で、展示が始まってから「当時の様子を思い出した」「ボランティアの学生さん達の活動を知る事ができた」などの感想が寄せられています。

学生団体チーム・オレンジのメンバーは、当然のことながら毎年代わっていきますが、今回の掲示物の作成を行ったことで、震災時からの活動の経緯や地域の方々の想いを改めて知る機会となりました。

これからも大槌町を訪れる度に「チーオレ新聞」の掲示は更新する予定です。「おしゃっち」の展示を更新すると共に、被災地復興や防災啓発活動への想いも新たにしていきたいです。

4. 学生参加者数 2名



展示された活動紹介のパネルと新聞



地域交流施設「おしゃっち」の様子

29. 「誰か」じゃなく「みんな」が生きやすい社会とは？ ～ダウン症のある人との関わりから共生社会を考えよう～

- 1. 日程 2020年12月15日(火)
- 2. 場所 Zoom

3. 概要

ダウン症を持つ当事者の方々や、その保護者に対する理解を通して、共生社会について考えることを目的とし本企画を実行しました。偏見の目を持たずに接することができるためには、彼らのことを理解し、私たち自身が知識をつける必要があるという点に問題意識を持ち取り組みました。同時に本企画はダウン症という枠にとらわれ過ぎず、社会モデルを起用し、マイノリティについての考えを学生自ら変化させていくことも目的としました。

本企画は二部構成となっており、講義と各班ごとのワークショップ、そして共有といった流れで実施しました。企画の調整段階から実施までは全てオンラインで行い、講師の方々とは一度も対面でお会いせず企画が終了しました。講師をしていただいたのはNPO法人アクセプションズさんであり、講義とワークショップ、班討議におけるファシリテートまでご協力いただきました。本企画では出し切れなかった様々な知識とアイデアのある団体さんの為、今後も継続して関係を続けていきたいと考えています。また企画の前後にはアンケートを作成し、参加者の気持ちの変化や今後さらに企画を実施するニーズがあるのかを調査しました。調査の結果は6. 参加学生の感想の欄に記載します。

- 4. 学生参加者数 法政大学12名、共立女子大学3名、三輪田学園7名

5. 企画学生の感想

本企画を通し、多くのことを学ぶことができた。初めはダウン症について興味があったため立案をしたものの、自己満足に終わってしまうのではないかと、他の学生がこのテーマに興味を持ってくれるのか、と不安を抱いていた。しかし発想を転換し、「もっと多くの学生に興味を持ち、知ってほしい」という想いから、本企画をより魅力的なものにするため、講師の方々とは協力し作り上げてきた。今回協力して下さった講師の方々から教わることも多く、企画の進行面においても、ダウン症や共生社会に関する面でも熱心に学生に教えて下さった。一企画参加者としても、今回学んだ内容は、これからの自分の考え方に大きく影響するものだったと思う。共生社会について理解が深まったこと、ダウン症に対するポジティブなイメージが強くなったことなど、新たな発見や気づきは大きかった。他の参加者から寄せられた感想は、企画の目的と合致するものが多く、本当に実施して良かったと心から思うことができた。今後も講師の方々との関係を継続し、自分たちなりに学んだことをどう体現していくかを模索していきたい。

ボランティアセンター学生スタッフVSP キャリアデザイン学部キャリアデザイン学科2年 宇野 瑠奈

この企画で初めて、企画の立案から運営、当日の進行などの中心となった。企画者として、事前の打ち合わせから企画当日まで沢山の刺激を受けた。アクセプションズさんはとても熱心に私達のやりたいことを実現できるように相談に乗ってくれた。幼い頃にダウン症を持つ人と関わったとき、交流する機会がなかったので、これをきっかけにこれから関わりたい。今回に留まらず企画がなされるのであれば、積極的に参加できたらと思う。

ボランティアセンター学生スタッフVSP キャリアデザイン学部キャリアデザイン学科2年 高師 桜子



6. 参加学生の感想（事後アンケートより集計）

まず本企画全体の満足度としては、61.1%が「大変良い」、38.9%が「良い」と回答している。ダウン症についての理解に関しては、「一人の人間として平等に接していいということを学んだ」「ダウン症を抱える人が社会的に活躍できる環境を設ける取組を知った」などとポジティブな感想がある一方で、「あまり自分事のように感じるができなかった」といようなネガティブな意見も寄せられていた。共生社会の理解については、「まだ日本には共生社会の実現は難しく、いろんな人が共生社会について考えなければいけないと思った」「今回の講義内容を活かしてマイノリティに対する偏見を減らし、少しでもマイノリティが生きやすい社会を構築したいと考えた」など、本企画を通して感じて欲しいことを参加者に感じて頂けたフィードバックであった。企画全体の感想としては、「共生社会について考えるいい機会だった」「講義を通してダウン症の方々のことを沢山の人の知ってほしいと思った」などが寄せられた。これらの感想を拝見し、今後の企画にかかしたいと思うと同時に、本企画の目的がある程度達成されたことを、大変うれしく感じている。



NPO 法人と参加者で意見交換を行った



ダウン症に関する写真を Web から引用するワークショップ



講師の方のレクチャー



リモートで参加する企画学生

30. 学べば、献血は怖くない。あなたを一押し10時間配信

1. 日程 2020年12月19日(土)

2. 場所 Zoom

3. 概要

ボランティアセンター学生スタッフVSPは、12月19日(土)に日本赤十字社協力のもと、献血企画を行いました。3時間の内容のコンテンツを3回行う、Zoomを用いての企画で、目的は次の2点でした。(1)献血に興味がある人、少し気になっている人に、献血に対する理解を深めてもらうこと。(2)献血に全く興味の無い人に、献血に興味を持ってもらうこと。

また、企画者である私たち自身がこの企画で長時間献血と向き合うことで、献血を継続し、堂々と他者に広めていけるようになることも目指していました。当日行ったプログラムは以下の通りです。

- ①献血って?学生スタッフによる講義(60分)
- ②休憩 血をつくる!おすすめ献立紹介(10分)
- ③献血ルーム案内(30分)...実際の献血の流れを学生スタッフがレポートします。
- ④日本赤十字社過去の特典紹介(10分)
- ⑤休憩(10分)
- ⑥はじめの1歩カフェ(60分)...献血についてカフェ感覚でみんなとおしゃべりしよう!最後には自分なりのはじめの1歩が見つかるはず!



企画実施までには、スタッフ間や日本赤十字社との打合せや、献血ルーム動画の作成や資料作りに多くの時間を費やし、その分献血についての理解が深まりました。一方で当日は想定していたよりも参加者が少なかったことから、広報で献血に興味を持ってもらう工夫がもっと必要であったと感じます。しかし、今回の企画をきっかけに私自身、献血ルームに行くことができたし、献血について深く知ることができました。昨今の状況も踏まえて、まずは自分が献血に行くようにしたいです。また、今後も献血企画を何かしらの形で実施していきたいです。

ボランティアセンター学生スタッフVSP 文学部哲学科3年 佐久間 希望

4. 学生参加者数 22名(共立女子大学3名、三輪田学園9名、法政大学10名)

5. 企画学生の感想

今回の企画を通して、献血に対するイメージが大きく変わりました。献血は病院のイメージが強く、なんとなく敷居の高い場所でしたが実際にはもっと気軽に行けるようなところなのだと知ることができました。献血に行かなきゃいけないという気持ちは前々からあったのですが、その敷居の高さや時間から今まで行ったことがありませんでした。献血の必要性、大切さを具体的なデータからはっきりと知ることができ、献血の敷居の高さが払拭された今、献血に行きたいと思います!

ボランティアセンター学生スタッフVSP デザイン工学部建築学科2年 遠山 開

個人的に企画に携わろうと思ったのが、自分の好きな乃木坂46と日赤のコラボでした。このように最初の動機は何でもよいということ伝えていきたいと改めて感じた企画でした。また、形式として10時間ということもあり、期待と不安をいつも以上に感じた企画でした。そのため、できたことやできなかったことの双方がありましたが、この先に繋げやすいのがこの企画の良いところだと思ったので次に繋がりたいと感じました。

ボランティアセンター学生スタッフVSP デザイン工学部都市環境デザイン学科2年 川上 健太

2人に1人ががんになるといわれている今、血液が必要な人が沢山いるのだと改めて感じました。困っている人を助けなければいけないと思うと、やはり献血ルームに行くべきだなと思いました。小さい時(小学校)から、献血の大事さを知れば献血ルームに行く人は増えるのではないかと思います。親が献血ルームに行っていれば自分も行こうかなと思うけれど、親も行ったことがないという人が多いよう

な気がしました。自分たちが大人になった時に、献血するのが当たり前になっていればいいなと思いました。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 法学部法律学科1年 飯村 美南

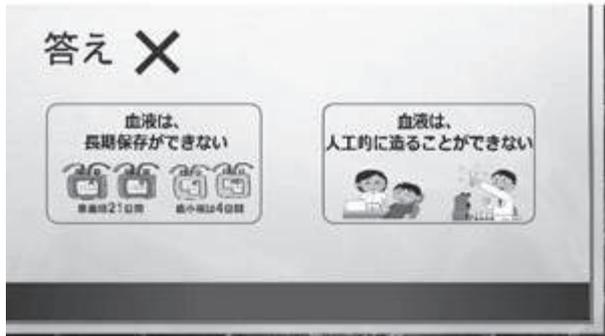
6. 参加学生の感想

高校生の頃、学校の自由課題で若者の献血率が上がらないことに関してレポートを作成しました。その際いくつか関東圏・関西圏の献血ルームを尋ねたのですが、地域によって若者への呼びかけ方や記念品など、本当に様々だということがわかりました。今回の講義でもルームによって雰囲気はかなり異なるということを仰っていましたが、やはりいかに呼びかけや広告で多くの人に献血について知ってもらえるかが大事なのではないかと思いました。将来もしご縁があれば、日本赤十字社で献血を広げるために何か出来たらなと思っています。とてもわかりやすく、勉強になる企画でした。参加させていただけてよかったです。ありがとうございました！

共立女子大学文芸学部1年 新家 菜々

(三輪田学園の生徒の感想)

- 献血に対して怖いイメージがありましたが今回の講演で変わりました。様々な人が気軽に献血に行ける世の中になって欲しいです。
- 自分はこの機会を通して献血を身近に感じられたが、他の人は知らないのでも自分も献血について他の人に話すことから始めようと思った。
- 重い印象ではなく人のために受けることができるものとして、自分は身近な人に献血の現状や特典の豪華さなどを伝えていく。



献血に関するクイズも交え学生が講師を務めた



日本赤十字社の方へインタビューを行った様子



VSP スタッフの献血体験を紹介



様々な視点から献血について話合った

31. 足立区イベント「&spoon×シアター1010なぞときひろば」 ポッチャ参戦企画

1. 日程 2021年1月4日（月）準備日、1月5日（火）実施日

2. 場所 シアター1010（北千住マルイ11階）

3. 概要

一昨年VSPで実施した廃油石鹸企画の際にお世話になった秋田博氏より、「他の形でもVSPと一緒に取り組んでいきたい」とのお声掛けを頂き、今回の足立区のイベントに参加することになりました。NPO法人アンドスプーンさんとシアター1010の共同イベントで、「なぞとき」をテーマに親子向けのブースを出展するもので、VSPはポッチャ体験ブースにてパラスポーツの魅力を伝えることを目的としました。

12月頭から5回の打合せをし、ブース設置の確認やコロナ対策、他出展者の方達との情報共有も行いました。前日の準備日にはポッチャのコート2面の設営と展示パネルなどの設置をし、当日は大勢の親子がブースを訪れ、VSPメンバーと一緒にポッチャを楽しみました。ポッチャ未経験者は丁寧に説明を受けた後「はじめてコース」を体験し、希望者は障がいのある方の立場で体験できる「挑戦コース」でポッチャをプレイしました。

ゲーム毎のボールの消毒、学生メンバーはマスクとフェイスシールドを着用するなどの新型コロナウイルス感染症対策の実施に加え、外部のイベント運営者の方々とのやりとりや当日のメンバーのスケジュール管理など、学んだ点と共に次回への課題も確認することができました。今回は参加がコロナ禍で予約制であったため来場数は多くありませんでしたが、オンラインの企画が中心である中、オフラインのボランティアで子どもたちの笑顔を見られたことは、VSPメンバーにとっても大きな励みとなりました。

※NPO法人アンドスプーン：足立区の主婦や親子を対象に、イベントなどの場づくりを行う。女性を取り巻く環境や未来を担う子どもたちを支える運営団体。将来、足立区内にて親子カフェのオープンを目指し、ママと地域が繋がる活動をしている。

4. 学生参加者数 9名

5. 企画学生の感想

一つの企画を実行させるには時間がかかり、全て自分達で考えなければいけなかったことが大変でした。VSPに入って初めての企画だったということもあり、当日の内容についてメンバーで打ち合わせをしている際も、イメージが湧かず不安ばかりでした。しかし、当日は不安など感じないくらい子どもたちの楽しんでいる姿を見ることができました。私自身、子どもたちと関わる機会が減ってしまったため、どのように接したらいいのかわからず、近くで子どもたちがポッチャをやっている姿を見ているだけで、上手く触れ合うことができませんでした。深く考えず、たわいもない話をするだけでも良かったなと思いました。今後ポッチャをやる機会があれば、今回できなかったことを活かして子どもたちを楽しませることができればいいなと思います。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 法学部法律学科1年 飯村 美南

6. 参加学生の感想

2020年はコロナの影響で大きい企画、多くの人に関わった企画ができていなかった中で、足立区のイベントに参加し、VSP内外の多くの人と実際に会って企画をすることが出来たことは良い経験になりました。また、当日参加してみて、丸一日の企画かつ色々な役割があったおかげか、メンバーそれぞれの長所を改めて発見することができて面白かったです。そういった発見を活かしつつ新しい企画などに繋がっていきたくて考えました。改めてポッチャは良い競技です。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP デザイン工学部都市環境デザイン工学科2年 川上 健太

コロナで開催が危ぶまれる中、なんとか開催できることになったので、来てくださった人たちを全力で楽しませたい！と思ってこの企画に臨みました。ポッチャをやっている子どもたちの楽しそうな姿や笑顔を見たり、「もう一回ポッチャやる！」という言葉が聞いていたら、とても元気を貰えて、参加して良かったなあと心から思いました。また、私は初めてポッチャをやったのですが、簡単に覚えられるルールなのに絶妙な難しさなどが面白くてハマりました。またやりたいです！

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 法学部政治学科1年 田中 みのり

緊急事態宣言が再び発令され、なかなかオフラインのイベントを開催することができない状況ではありますが、やはり子どもたちに心を開いてもらい、楽しんでもらうためには、実際に交流し、一緒に何かに取り組むことが大切だと強く感じたので、今後は感染対策をしっかり行い、できないかを考えていきたいです。また、他の団体の方とお話をさせていただいたときに、自分たちはまだ大学生ですが、一緒にイベントを盛り上げる仲間として、対等にお話をしてくださったので、今回のイベントのような場では、VSPの一員として責任を持った行動をすべきだと感じました。楽しいだけでなく、学びのある一日だったので、今回のことを次回以降に引き継いで、今後より良い活動ができるようにしたいです。参加させていただき本当にありがとうございました。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 法学部法律学科 1年 並木 優衣



大勢の子どもたちがボッチャに挑戦した



ゲーム終了の度にボールを消毒



真剣にボールを見つめる子ども



ボッチャのルールについて説明する様子

32. はじめの1歩カフェ（第5回）

1. 日程 2021年2月3日（水）

2. 場所 Zoom

3. 概要

5回目の『はじめの1歩カフェ』は、第1回実施時に身近なテーマを“環境問題・ゴミ問題”としたところ参加者から「話しやすかった」との声をいただいたため、今回は“食とプラスチック”をテーマにしました。また、次の2点を試しました。

まず「参加者の知識の有無によって、会話量に差が出る」ことを防ぐために、参加者にはプラスチックに対する知識・経験を問う事前アンケートに回答してもらい、企画者はそれを元にグループ分けを行いました。また、参加者が話しやすいよう、アンケートでは「グループでディスカッションしたい内容」等についても尋ねました。加えて、「他団体のオンライン企画との差別化」のために、企画数日前からSNSを用いて食とプラスチックのテーマに関する私たちが掲げた4つの軸（マイクロプラスチック、海洋プラスチック、環境ホルモン、食品容器）についての情報・寄せられた質問に回答する等積極的に広報活動を行いました。

反省点としては「事前ミーティング・イベント周知のタイミング」があります。事前ミーティングを1週間切ってから行ったため、変更点を改良することが簡単ではなく、またイベントの周知もギリギリになってしまいました。また本番での通信環境のトラブル、企画者同士の打合せなど見直すべきところも、今後活かしていきたいと思えます。

4. 学生参加者数 16名

5. 企画学生の感想

自分が主体となり行った企画が初めてだったため、自身の性格を改めて理解する機会となった。また、共同企画者である三村と密に連携を取りつつ準備を進められたため、とてもやりやすかった。加えて、三村はスライドづくり等、準備を行うに当たりコツコツ積み重ねていくことができる点を本当に見習いたいと感じた。互いの長所を生かし結果を出せたと感じる。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 人間環境学部人間環境学科2年 阿波加 夏輝

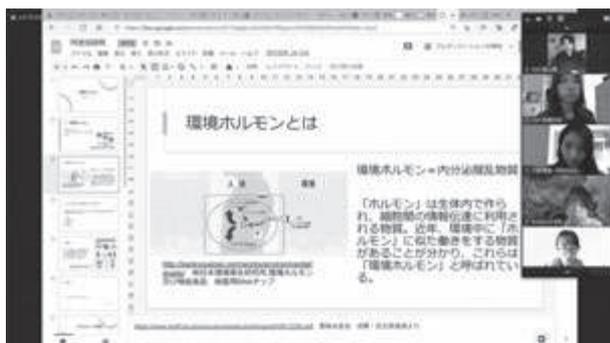
今回の企画では、4つの小テーマを2つに分担し、調べ学んだことを講義形式で伝えたいため、短時間で内容を濃く、わかりやすく伝えることができた。また、講義後の率直な感想を共有することで、参加者同士の意見交換を活発に行うことができた。反省点として、当日のサポートメンバーへの情報共有が遅れてしまったので、次回の実施時は早めの事前連絡を行うようにしていきたいと思う。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 文学部地理学科2年 三村 優奈

6. 参加学生の感想

どの問題も、肝にあるのは消費者、そして製造者の問題に対する当事者意識だったと思いました。そもそも問題を認知していないことから、メディアや公共教育のプラスチック問題などの社会問題に対する啓発が全然足りていないのではと感じました。けれども、メディアや企業、教育、政治などを消費者間で批判するだけでは行動が間接的で問題解決には程遠いと感じます。本日のイベントからは、個人が“自分自身”で行動すること、気づきを得ること、そしてその気づきと行動を広めていくことが一刻も早く問題解決に向かうための必要不可欠なプロセスなのかなと思いました。例えば、Loopなどの企業には称賛の声を企業に直接届けたり、SNSで発信したり、積極的にSNSを利用したりする。過剰包装する企業を積極的に批判し、直接メールを送ったり、SNSで拡散したりと、直接的な行動を日常的に行う努力をしていこうと感じました。ゴミ拾いへの参加や、過剰包装された商品は購入しないなど製造者とは間接的な行いはもちろん、直接的な行動も今日のようなコミュニティみんなで今、できることをする、それが微力ではあっても未来につながる私たちができるとなかな、と考えさせられました！

グローバル教育学部グローバル教育学科2年 大島 紀穂



資料をもとに学生が説明をした



自分に何ができるかを最後に紹介

33. ベイラー大学お茶の時間（バレンタイン企画）

1. 日程 2021年2月19日（金）

2. 場所 Zoom

3. 概要

週に1回行っているベイラー大学との「お茶の時間」。今回はバレンタインデーを通じて、アメリカと日本の文化をテーマに、本学の一般学生を募集して行いました。

イベント当日は自己紹介の後、ブレイクアウトルームに分かれてお互いの国のバレンタインデーについて情報交換をしました。バレンタインデーは日本でも慣れ親しまれている行事ですが、アメリカでは男性が女性にチョコレートをあげたり、チョコレート以外のものをプレゼントするなど、違いがあることに驚きました。

次に動画を用いて、各自あらかじめ用意した折り紙でハートを折ってみました。折り紙をするのが初めてのベイラー大学生もいましたが、VSPのメンバーの説明を聞いて上手に作ることができ、バレンタイン気分を満喫することができました。

初めて「お茶の時間」に参加した本学の学生は、オンラインながらも、英語と日本語を交えた会話を楽しみ、お互いの国の文化を伝えることができました。コロナ禍で留学ができない中からの発案で始まったオンラインでの交流ですが、多くの学生が参加する機会を提供することができました。

今回の企画の応募に際し、定員を上回る参加者が集まりました。海外の学生との交流をしたいというニーズは大きく、ボランティアセンターとしても継続して行っていききたいと思います。

<スケジュール>

概要説明（メインルーム）…10分

自己紹介（ブレイクアウトルーム）…10分

バレンタインあるあるを共有（ブレイクアウトルーム）…15分

話し合ったことを共有（メインルーム）…5～10分

折り紙の概要説明（メインルーム）…5分

折り紙（メインルーム）…10分

写真撮影（メインルーム）…5分

フリートーク（ブレイクアウトルーム）…10分

まとめ（メインルーム）…5分

合計所要時間…1時間5分～1時間10分

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 法学部政治学科1年 太田 健介

4. 学生参加者数 法政大学生16名（ベイラー学生15名）

5. 企画学生の感想

バレンタインという共通のテーマで多くの文化の違いを共有することができました。法政、ベイラーの学生が意見交換を楽しげに行っており、大変意義の感じられるものになったと思います。またこのような機会を設けることができたと思います。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 法学部政治学科1年 太田 健介

ベイラー側の学生さんの数が今までに比べて多かったこともあり、多くのグループができてそれぞれ楽しめたようです。お互いのバレンタインの違いを共有でき、自分自身にとっても学びの場となりました。ハートの折り紙は、ベイラー側の学生さんが非常に楽しんでいただいていたことが印象的です。法政の学生からも話し足りないという声をいただいたので、今後もこのような交流の場を継続して設けていけたらと思います。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 経営学部市場経営学科2年 富岡 凜

6. 参加学生の感想

少し雰囲気が強かったと感じました。もう少し班で話す時間が長くて良いのかなと思いました。最後は打ち解けられたので、交流ができる機会や時間が欲しかったです。授業は通常90分なので、もう少し時間を延ばしても大丈夫だと思います。クイズ形式など、純粋な交流だけでなく、何かを目指すような企画が最初にあると共通目的が持てるので、互いに積極的に話すトリガーになると感じました。

経営学部経営戦略学科1年 岡崎 怜

【バイラー大学学生の感想】

I had a great time at the Valentine Special hosted on February 18. I thought that the students that hosted this event did a wonderful job and were very well prepared. It was so much fun. I enjoyed learning about how students in Japan celebrate Valentine's Day. The origami presentation was amazing, too! This meeting was so much fun that it made me want to learn more about origami. The student leaders at Hosei University are very kind, smart, and are great teachers. Now, we are all friends!

とてもたのしかったと思います。おりがみが大きいです。

(Giana Pirolli ジアナ・ピロリ)

Hey everyone!

My name is Tim Flanagan, and I'm a second-year Business Major at Baylor University. I recently attended the Valentine's Day cultural exchange event put on by Hosei University students. It was so much fun learning about the differences between Japanese and American ways of celebrating this holiday. The differences between romantic and platonic gift-giving between America and Japan were especially interesting, and I also enjoyed learning how to make origami. I hope to study abroad at Hosei in the future, so it was also fun meeting and talking with other students from there. I really appreciate the Hosei University students' hard work in planning and presenting this fun event, and I had a great time!

Thank you all!

(Tim Flanagan ティム・フラナガン)



トピックに沿って2か国語で話し合った



折り紙で作ったハートを掲げて記念写真

34. コミュニティ広場にこまるwebサイト作成企画

1. 日程 2020年11月～2021年3月

2. 場所 Zoom、コミュニティ広場にこまる

3. 概要

コロナ禍において対面での接触を控えるべく、全国のこども食堂運営者さんも利用者さんとのコミュニケーションや活動内容の周知のためにオンラインツールを効果的に用いる必要が出てきました。NPO 法人むすび主催「こども食堂・オンラインツール『こんな使い方しています』共有会」にて、運営者さんの多くはオンラインツールを日常的に使用していない40～70代の方達であり、ツールの使用方法に困っていることを知りました。そこで、オンライン環境に慣れている学生の力を用いて何かお手伝いできないかと考えていたところ、同イベントに参加されていた高橋さん（埼玉県ふじみ野市にある他世代交流型の食堂“コミュニティ広場にこまる”運営者）からお声掛けをいただき、食堂のwebサイトを作成するために、授業でのサイト作成経験を活かしたい人や、ITに強く自分の力を試したい人、デザインに興味のある人が集まり、企画チームが出来上がりました。

最初に高橋さんとの顔合わせを行なった後、なぜサイトが必要なのか、どのような項目が必要なのか、雰囲気、使用するツールなどをお伺いしました。そこで高橋さんがPC操作に慣れていないことをお聞きし、ただ“サイトを作成する”のではなく“簡単に編集できるサイト”を作ること、また操作方法を丁寧に解説したマニュアルも独自に作成することを決定しました。

打ち合わせ・情報共有は全てオンライン上で行うことになりました。また、メンバー間での連絡もオンラインでの実施であったため、常に綿密なやりとりが必要とされました。打ち合わせは10回以上に及び、4ヶ月という短期間でサイトとマニュアルを完成することができました。

サイト完成後は実際に現地へ赴き、高橋さんとボランティアさんに操作方法を解説しました。その後、普段活動されている会場をご案内いただき、こども食堂の運営方法や課題などについてお伺いしました。

訪問後、メンバー内で振り返りを行い、webサイト作成に必要なものはITリテラシーだけではないことや、チームで活動する強み、カタチに残るボランティアの貴重さ、コロナ禍で活動が制限されるこども食堂に対し私たちにできることなどについて話し合いました。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 文学部心理学科2年 青木 怜奈

4. 参加学生者数 4名

5. 企画学生の感想

にこまるさんのホームページを作成してみて、ITの知識や技術が深まったのはもとより、4人のメンバーで連携することの大切さを強く実感した。決して一人では考えつかない発想や速度でモノを仕上げることが可能で、相互に補完し合うことの重要性を学べた。また、ホームページ制作に重要なのはITスキルではなく、コミュニケーション能力なのだと思ったが、私には弱い部分なので、その点は特に他のお三方に頼りきりだったと反省している。

今回の企画はホームページを作る企画だけではなく、ホームページにまつわる今後起こる諸問題に対処するまで続く企画だと考えているので、まだ企画は中盤にすぎない。保守管理までメンバー同士が連携して取り組んでいきたい。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 経営学部経営学科3年 五味 祥紀

今まで参加した企画の中で、形に残るものは初めてだったので完成後不思議で嬉しい気持ちになりました。

ITも、デザインも得意なわけでもなく、参加しながらも自分が役に立つのか不安でした。しかし、自分にできることはたくさんあり、多くのことを学ぶ非常に良い経験となったと思います。スケジュールの組み方が的確、ITに強い、など各自の長所が上手く引き出されパズルみたいにはまったメンバーだったなと感じます。今回の企画を通して、人との繋がりの大切さを改めて実感しました。今後もHP修正のサポートやのほりデザインを含め、繋がっていけたらなと思います。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 経営学部市場経営学科3年 富岡 凜

本企画は団体の“顔”となるホームページを制作するという責任の大きいものであり、普段の企画以上に先方が何を求めているのか正確に把握し、先方だけでなくスタッフ間におけるコミュニケーションも必要とされる企画でした。様々な問題に直面しましたが、その度にアイデアや意見の交換が活発に行われ、一步一步着実に進めていくことが出来ました。

完成まで無事漕ぎ着けられたのは、各工程段階のリーダーを決めて役割を分担し、振り分けられた役割を果たしつつも、時には枠を超えて

臨機応変にフォローし合えたチームプレーの賜物だと思います。今回 VSP にお任せいただけたのはとても光栄なことで、貴重な経験を積むことが出来たと感じています。私はこの企画をもって卒業となりますが、にこまるさんとのご縁が、この先も続いていくことを願っております。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 経営学部経営学科 4 年 菅 結菜



完成した web サイト



サイトの操作を説明している様子

35. 関西・明治・法政3大学オンライン活動報告会 —コロナ禍で駆け抜けた2020—

1. 日程 2021年3月3日(水)

2. 場所 Zoom

3. 概要

2020年8月～9月に実施した3大学(関西・明治・法政)オンライン交流会を経て、今回は各大学の1年間の活動を報告する「オンライン活動報告会」が実施されました。今年度はコロナ禍により活動を実施すること自体難しい場面もあった中、各大学それぞれに工夫やアイデアで新しい活動に繋げている様子がうかがえました。

また、全体のディスカッションだけでなくグループに分かれて話し合うなど、ともにボランティア活動に関わる3大学の学生たちの関係性も一層深まりました。共通する課題も多く、他大学との交流から得られる経験や知識は得がたいと思います。今後もこういった交流・報告の場は継続し、活動に繋げていきたいです。

4. 学生参加者数 関西大学7名、明治大学10名、法政大学6名

5. 参加学生の感想(アンケートより抜粋)

他の大学が積極的に活動していて驚きました。みんな前向きな考えを持っていたので、少しやる気が出ました。(関西大学・2年)

自分はどうしてもオンラインのマイナスな面にはばかり目を向けてしまっていたので、今日の報告会でオンラインの魅力についても考えることができたのはとても良かったです。今日は、ステキな報告会に参加させていただきありがとうございました。自分にとっては他大学の人とお話しすることが新鮮で、たくさんのことを聞けてとても楽しかったです。(法政大学・2年)

昨年の活動で手探りな部分が多く解決策を共有し、新たなアイデアを得たいと思い参加しました。他大学のアイデアや活動の状況が知れてとても充実していました。夏にも実施していたということなのでぜひ今後も継続して開催して頂けると有り難いです。(明治大学・4年)



VSPの年間の活動について発表



意見を交わすことで互いの想いを共有した

36. ボランティアセンターリニューアル企画

1. 日 程 2021年3月5日(金)・26日(金)・30日(火)・31日(水)

2. 場 所 市ヶ谷ボランティアセンター(外濠校舎1階)

3. 概 要

今回の企画は、私がボランティアセンターを訪れた際に、「ボラセンをもっと来たいと思えるような場所にしたい、来た人に学びの情報を提供できるような場所にしたい」という職員さんとの話の中で起こったものです。

本企画は2月に参加者の募集をかけたのはじめ、3月末までの期間で打ち合わせ2回、実施2回となりました。打ち合わせ時点ではボラセンのレイアウト案を考える他、新しいボラセンにはどんな掲示が必要かなどを話し合いました。実施では、そのアイデアをもとに、写真板の作成、質問用紙の作成、見出しや配置の変更、区分けなどによるロッカーの掲示スペースへの工夫の実施、各団体の表札の作成、そのほかボラセン内の机や本棚の配置換えを行い、より使いやすく、分かりやすいボラセンを目指しました。

改善点としてはやはり年度末ということもあってか、実施段階の人の集まりが想定よりも少なく、2日間の実施期間では苦しかったことが挙げられます。案として他にも良いものが出ていたので、それを今回の企画内で形にできなかったことが悔やまれます。

今回は企画という形で大々的に行うことが出来ました。今後は企画としてではなく、継続的に少しずつ、より良いボラセンを作れるように、各団体の垣根を越えて取り組めたら良いと思います。そのために、各団体が自由に使える掲示スペースを後方のロッカーに新たに設けました。ぜひ活用して下さるとうれしい限りです。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 法学部政治学科1年 河井 悠希

4. 学生参加者数 12名

5. 参加学生の感想

ボラセンが自分達にとって「居心地の良い場所」になればいいな、という思いで今回ボラセンリニューアルに参加しました。ボラセンを訪れた人がどうやって掲示物を見られるか、どんな配置にしたらいいか、など考えさせられる場面が多々ありました。しかし、メンバーで話し合いを重ね、自分が想像していたボラセンよりも遥かに良い、新たなボラセンができたのではないかと思います。多くの人がふらっと立ち寄れる場所になるように、今後も新たなボラセンを作っていけたらいいと思います。

ボランティアセンター学生スタッフVSP 法学部法律学科1年 飯村 美南



レイアウトや掲示物について打合せ



各団体をコーナーに分けて展示

37. チーム・オレンジ主催 「岩手・宮城被災地スタディツアー」

1. 日程 2021年3月12日(金)・13日(土)(3月1日(月)事前説明会(Zoom))

2. 場所 岩手県大船渡市、陸前山田町、宮古市など

3. 概要

2021年3月12日、13日の一泊二日で岩手宮城被災地スタディツアーを行いました。本企画はボランティアセンター所属のチーム・オレンジの学生スタッフが企画、当日の運営を行いました。東日本大震災から10年という節目の年に、現地に足を運ぶことにより風化防止や防災意識の向上を目的として実施しました。コロナ禍においてリモートで様々なことができるようになってきている中で、実際に現地に行くことでしか得られないものがあると考え、感染症対策をきちんと行ったうえで本企画を実行することを決めました。

3月12日は令和元年9月に開館したばかりの東日本大震災津波伝承館に行き、東北の津波の歴史を学び、津波の被害を受けた消防車や橋の展示を見て津波の威力を改めて思い知ることができました。また避難をして生還した人々の当時の行動について学び、避難することの大切さ、大変さを知ることができました。松原を再生しようと松が植林されているのを見て、被災地が前進していると感じました。その後、榎の里・大船渡ガイドの皆さんに大船渡市内を案内していただき、大船渡市の現在を知ることができました。当時市民が避難した道をたどることで、避難していた人々へ想いを馳せることができました。

13日は岩手県山田町の視察を行いました。震災前、震災直後の写真と現在の街の様子を見比べることで復興が進んだ面とまだ復興途中の面があることを学びました。さらに牡蠣剥き体験やのしか作り体験をし、山田町の魅力も知ることができました。その後、学ぶ防災ガイドの案内のもと田老地区の視察を行いました。実際に再建された14mの防潮堤を見たり、海が見えなくなったことを悲しむガイドのお話を聞いたりして海が見えなくなってしまうほどの防潮堤は果たして本当に必要なのか考えさせられました。また津波が襲ってくる映像を、撮影した場所であるたろう観光ホテルから見ることで襲ってきた津波の高さ、威力を体感できました。

10年経った被災地の今を知り、街の再建は進む一方、住民が戻っていなかったり、更地が多かったりと、以前の街の様子には到底及ばないことがわかりました。

コロナ禍で様々な制約がある中でのスタディツアーでしたが、有意義な2日間を過ごすことができました。また1日目の大船渡視察の様子をZoomにてオンライン配信を行いスタディツアーに参加できなかった学生に現地の様子を伝えることができました。今回の反省点を生かして、震災学習だけでなく東北の魅力も伝えられるようなスタディツアーを企画していきたいと考えています。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ 法学部法律学科2年 福田 桃子

4. 学生参加者数 24名

5. 参加学生の感想

・東日本大震災から10年が経った東北の現状を自分の目で確かめることができ、多くを学ぶことが出来た。特に感じたことは復興はまだ終わっていないということである。建物や道路が元通りになっても人口が元通りになるわけでもなく、また住民の心の傷も癒えているわけでもない。ただ元の街並みに戻せば良いという訳ではなく、新たな生活様式に合わせた街づくりを行っていかねばならないと感じた。また、自分の身を自分で守るために、災害に対する決め事や準備をしなければならないと思った。関東大震災など、いつ自分の身に災害が襲ってくるかわからない。その中で備えを常にしていた人が結果的に生き残ることが出来る。今回のスタディツアーで感化された防災意識を普段の生活の中でも活かしていきたい。



・スタディツアーを通し震災について、深く考えさせられました。多くのことを感じ、考えたのですが、この気持ちをうまく言葉にすることができないのが正直なところです。

震災を経験していない自分は被災者の気持ちを完全に理解することはできません。どれだけ自分事として考えようとしてもどこか他人事として考えてしまうような気がします。その人の悲しみや苦しきは、その人だけのものであり、自分が土足で足を踏み入れてはいけないような気がします。しかし、だからといって何もしないでただ見ているのも何か違う気がします。

そもそも復興とは何か？災害前の状態にもどることが復興なのか。それとも災害が起こる前よりもより良くするのが復興なのか難しい問題だと思います。

今回訪れたところは、どこも震災前とは大きく姿を変えてしまっていました。ただ、それが街をよりよくなるための復興の結果だとは自分には思えませんでした。津波の被害から街を守るための大きな防波堤や、高台へと移動させた居住地。これらは街を津波から守れても景観の悪化や立地の利便性などの面から街としての魅力を損なわせてしまっているように思います。

街に震災遺構を残すこと。これにも様々な考えがあると思います。教訓として後世に残す必要があることは十分かかっていても、被災者の中には忘れたいものを思い出させるものだと捉えている人もいるのではないかと思います。

10年経った今でも、誰もが前向きな気持ちを持って復興に臨めるわけではない。復興の背中を押すのではなく、横に寄り添える支援の仕方を模索するべきなのではないかと感じました。時には立ち止まって時には後退しながらも、その人に合ったペースでゆっくりゆっくり前に進むことがこれから求められる復興のあり方なんじゃないかなと思いました。

このような考えに至ったのも、実際に現地に行き、現地の空気を感じ、状況を自分の目で見て、現地の方の声を聞けたおかげだと思います。また、改めて災害の恐ろしさを感じ、自分自身の防災意識を向上させることができました。今回のツアーに参加して本当に良かったと思います。貴重な経験をありがとうございました。



現地ガイドの方の説明を聞く



復興について意見交換をする様子



岩手県の名産カキの試食をする



奇跡の一本松の前で集合写真

38. チーム・オレンジ主催 「オンラインで行く岩手宮城被災地スタディツアー」

1. 日程 2021年3月12日（金）

2. 場所 Zoom

3. 概要

東日本大震災が起こってから、毎年チーム・オレンジは岩手宮城被災地スタディツアーを行ってきました。今年は初の試みとして、現地と大学をZoomで繋ぎ、スタディツアーの一部をオンラインで配信しました。

実際のツアーに参加できなかった学生や、被災地支援に興味のある学生を対象として企画したものです。

まず大槌町より、地域交流施設「おしゃっち」の紹介や、スタッフへのインタビュー、チーム・オレンジのメンバーが毎年行っている東北ボランティアの説明をしました。次に大船渡市内視察の様子を配信しました。バスで市内を移動しながら現地の風景を見て、ガイドの方のお話を聞きました。画面を通してですが、復興の様子や震災当時の体験談などを伺うことができました。

途中、映像が乱れたり音声が聞き取りにくかったなど、全てがスムーズだったとは言えませんが、参加者からは「リアルに被災地の様子を見る事ができた」「これを機に実際に被災地を訪れたい」といった感想が寄せられ、今後のオンラインでの活動への道筋ができたと感じました。

4. 学生参加者数 17名

5. 参加学生の感想

オンラインでのスタディツアーは、テレビで見るのとは違い、疑問に思ったことをすぐに現地の方に質問できる点が良かったです。「おしゃっち」からの中継では、震災を受けて「津波を伝承する」という新たな役割が施設に加わったことが分かりました。公園をあえて盛り土をする前の高さで保存することで、実際にどれほど土地が高くなったのかが可視化されていて良いと感じました。「命てんでんこ」を忘れず、これからも被災地の状況に関心を持ち続けようと思います。

文学部日本文学科1年 遠藤 寛奈

震災後10年という1つの節目に、オンライン上ではあるが、被災地の様子を見ることができ、良かったと感じている。被災地の方の生の声を聞き、自分の目で街の様子を見ることは、メディアで間接的に情報に触れるより、被災地や災害に対する自身の考えを持つことにより役立つと感じた。さらに実際に現地へ足を運んでみたいとも思った。このような場を設けてくださり、ありがとうございました。

文学部地理学科1年 佐藤 夏子



現地の施設などを紹介するチーム・オレンジ



大船渡市視察ガイドの中継の様子

39. 荒川区社会福祉協議会若者プロジェクト

1. 日程 2021年3月13日(土)

2. 場所 Zoom

3. 概要

本企画は荒川区社会福祉協議会の職員の方と共に、コロナ禍で孤独や将来への不安を抱く学生に悩みを打ち明ける場を提供し人との繋がりを感じてもらうことを目的としたオンラインイベントでした。参加者は5,6人のグループに分かれ、それぞれのグループでアイスブレイクとしてワードウルフを行い、その後コロナ禍での日常生活の変化、コロナ禍での悩み、将来への不安、の3つのお題について話しました。今回は企画メンバーに他大学の学生や一般の社会人の方も様々な角度からの意見を聞くことができました。参加者は募集人数より少なかったのですが、結果的にお互いの距離を縮めて話すことができたので良かったです。今回の企画を通して、学生は就職活動を始める前にやっておくとよいこと、また就職後の苦労などを知ることができ、今後コロナ禍が続いたとしてもモチベーションを保って生活するための良い機会となったのではないかと思います。また悪天候でも問題なく開催できる、遠方からでも参加できる、ブレイクアウトルームを活用することにより少人数で話し合える、などオンラインだからこそそのメリットやオンラインの可能性に気づくことができたのではないかと思います。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP
人間環境学部人間環境学科1年 新堂 瑞希

4. 参加者の声

今回は企画側として参加したが、中心メンバーとしてすべての会議をオンラインで行い当日もオンラインで開催したのは初めてだった。1年間オンラインで授業を行い、物足りなさを感じ続けてきたが、今回は逆にオンラインの魅力や可能性に気づくことができた。また人と気軽に会うことが難しいご時世で寂しさを感じているのは自分だけではないこと、この状況化でも将来のために勉強したり、新しい趣味を見つけたりしている人がいることを知り、自分のモチベーションを上げるきっかけとなった。今回の企画には一般の社会人の方や就活を終えた学生にも参加して頂いたので、将来のことを考える良い機会となった。今後、コロナ禍が続いたとしても人との繋がりを感ぜられるよう自ら行動し、将来の自分のために行動しようと思った。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 人間環境学部人間環境学科1年 新堂 瑞希

大学生を中心とする若者達に向けてのプロジェクトをオンラインで開催するという事で関心を持ち参加したが、大学生、就活生、社会人と言った様々な立場の方とお話をする事ができる貴重な機会であった。特にコロナ禍での不安や日常の変化を共有する事で、これからの生活のヒントを掴む事ができたような気がする。先輩方から今後の大学生活のアドバイスもいただく事ができ、非常に有意義な時間であった。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP デザイン工学部都市デザイン工学科2年 鴨 潤矢

初対面の方とでも互いの悩みなどを共有することで繋がっている感じがしました。

自分の話すことに共感してもらえる瞬間が何より嬉しかったです。人と直接あって話すことが気軽にできない状況ですが、人と話さない日々を過ごしていると心が荒んでいくように感じます。今回の取り組みのように誰かに自分の気持ちを言語化して伝えようとする機会があることはとても大切だと改めて感じました。また、オンラインだからこそ繋がれた人もいると思うのでその点もよかったです！

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 文学部哲学科3年 佐久間 喜望

今回のオンラインイベントを通し、オンラインでも人との繋がりを感ぜられる手段となりえることを実感しました。企画から本番まで全てオンライン上で行ったのですが、アイスブレイクの時間や対話の時間の中で、コロナ禍で感じていること、考えていることを共有したことから人の心を近くに感ぜられた機会であったと感じます。

参加者からも普通に友達と会話している感覚で楽しかったという言葉もいただきました。

オンラインでも人との繋がりを諦めることなく、時代の流れに合わせてこのような企画を続けて打ち出していくのが良いのだと希望的な気づきの機会となりました。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP 文学部英文学科3年 加藤 萌子



40. 災害救援ボランティア講座

1. 日程 2021年3月17日(水)、18日(木)、19日(金)

2. 場所 大内山校舎4階Y403教室、市ヶ谷総合体育館

3. 概要

市ヶ谷ボランティアセンターでは、災害救援ボランティア推進委員会、東京防災救急協会、千代田区・千代田区社会福祉協議会のご協力のもと「災害救援ボランティア講座」を実施しました。

第1日目は災害救援ボランティアの基本やケースワーク、被災地での安全衛生などを学び、第2日目は千代田区社会福祉協議会の取り組みや災害時をシミュレーションしたグループワークを行いました。

第3日目は本学市ヶ谷総合体育館柔道場にて、上級救命技術講習として応急手当活動について実技を交え学びました。人工呼吸、AEDの使用法、災害時などでのけがの応急処置を含めた実践的な講習内容でした。

災害救援ボランティア講座は毎年行われており、全講座受講により、上級救命技能認定証、セーフティリーダー認定書が交付されます。市ヶ谷ボランティアセンターでは、災害時などにリーダーとしてボランティア活動ができる学生の育成を目標にしています。

4. 学生参加者数 12名

5. 参加学生の感想

新型コロナウイルス対策に工夫を凝らしたボランティア活動に参加することができ、とてもありがたいと感じています。今回は、講義形式の授業で災害に関する知識を習得しただけでなく、グループディスカッションなどを通して、他の受講生とコミュニケーションを取ることでもできました。コロナ禍でなかなか対面で人と話す機会がない中、このようなグループワークの機会を設けられたことに満足しています。さらに、上級救急技能講習を受け、人を助けるために周りの人の協力が大事だと感じました。今までAEDに触れる機会がありませんでしたが、今回はAEDを実際に使用し、使い方などとても印象に残りました。演習中東京消防局の方が優しく丁寧に指導してくださいました。そのおかげで色々なことを身につけました。



文学部日本文学科2年 HU XIEMEI (コケツバイ)

私は災害救援ボランティア講座を受講する前から、小中高校の授業等でAEDの使い方や人工呼吸、災害時の避難の仕方等を習ってはいました。しかし、これらはあくまで自分や自分の身近な人の身を守るためのものであって、遠くに住んでいる人を助けるといった行為をするためのものではありませんでした。またかつて私は東日本大震災の際、震度5強の地震に襲われ、その余震によって足に怪我を負ってしまい、他の人の手助け等は何もできませんでした。

今回受講した災害救援ボランティア講座で学んだ災害時のボランティア活動の方法等を生かして今後災害が起こった際に自分の身近な人だけでなく多くの人役に立てるように活動していきたいと思いました。

理工学部創生科学科2年 清水 知真

3日間の講座で様々なことが学べました。災害は忘れた頃にやってくることを常に覚えていて、グループワークで地震が発生する時、最初何をすれば自分自身と周りの人を守られることを話し合い、まずは自分の安全を確保してから他人を助けることがわかりました。救急救命の講座でAEDの使用法や心肺蘇生も学びました。これからもマスクをつける日々が変わらないかもしれないし、私たちは災害とともに生きていきますので、命の大切さはきちんと認識しなければなりません。だからこそ、災害救援ボランティアが存在していて、救急救命とても重要であることをこの3日間で先生たちに教えていただきました。

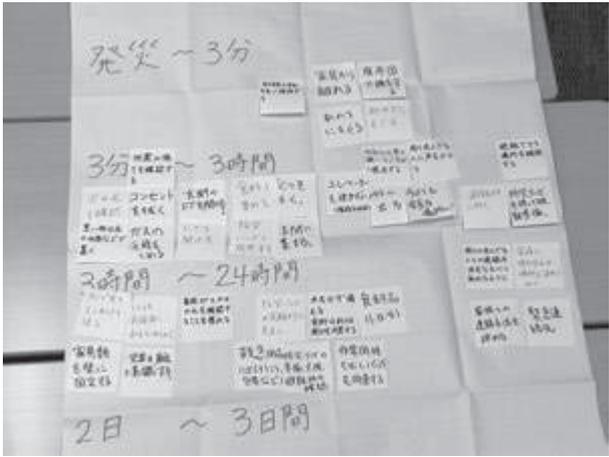
生命科学部生命機能学科1年 JI KATHLEEN



1日目、クロスロードゲームの様子



災害時を実際にシミュレーションする



グループワークによって新たな気づきを得られた



人工呼吸やAEDなど応急手当を実践

41. チーム・オレンジ作成「チーオレ新聞(第17号、第18号)」

1. 発行日程 年2回発行

2. 概要

ボランティアセンター学生団体「チーム・オレンジ」は、2010年に“もし災害が起きた時に、対処できる学生団体を作ろう”という目的で5名ほどの学生が集まり結成された団体です。奇しくもその翌年、東日本大震災が発生し、チーム・オレンジは現地でのボランティア活動を開始、それ以降2019年までに41次隊の学生の派遣を行うことができました。

震災当時の瓦礫の片付けなどから、現在ではコミュニティ支援や農作業を行う夏期のボランティアツアー、年2回の被災地スタディツアーへと、活動内容も変化しています。

「チーオレ新聞」はそのようなチーム・オレンジの活動を紹介するために学生スタッフが作成し、年数回発行しています。その内容は被災地ボランティアツアーの報告が主ですが、現地の様子や、その他東京での活動の様子を写真などで見ることができ、被災地復興や活動の変遷を知る貴重な資料ともなっています。

作成された「チーオレ新聞」はボランティアセンター内に掲示したり、被災地の方々に活動先へも配布しています。学生が手書きで編集しており、「温かみがある紙面がいい」という声をいただいています。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で通常通り被災地へ行けませんでした。現地の地域交流施設「おしゃっち」(岩手県大槌町)内に「チーオレ新聞」を展示していただき、あらたな活動紹介の場を得ることができました。今後も被災地支援、防災啓発を進めながら、「チーオレ新聞」の作成を続けていきます。



東北ボランティアを紹介(第17号)



スタディツアーや防災キャンプの様子を紹介(第18号)



多摩ボランティアセンターについて

2020 年度 多摩ボランティアセンターの活動の概要 (大崎 雄二 多摩ボランティアセンター長)	73
2020 年度 多摩ボランティアセンター来室者数集計	75
2020 年度 多摩ボランティアセンター学生団体の紹介	76
2020 年度 多摩ボランティアセンターイベントカレンダー	77
2020 年度 多摩ボランティアセンター活動の報告	79

多摩ボランティアセンターの活動の概要

多摩ボランティアセンター2020 年度活動の総括

多摩ボランティアセンター長 大崎 雄二

2020 年度、多摩ボランティアセンターでも年度開始早々、新型コロナウイルス感染症の蔓延にとどまらず、当初予定したさまざまな活動を休止、延期、変更せざるを得ない事態となった。このため、従来の活動地域の訪問はおろか、対面での活動はほとんどできず、秋学期になってからようやくオンラインでこれまでの活動を総括し、報告する活動をする事しか叶わなかった。

(1) 学生スタッフの募集

春学期開始時の恒例の新入生歓迎行事は、9 月に延期となり、20 人あまりがブースを訪れ、新たに新入生 5 人が加わった。

学生たちが自主的に始めた Twitter などでも積極的な呼びかけをおこなったが、web 上でしかボランティアセンターの存在と活動内容を知らせることができず、例年とは情報の提供や募集の方法も大きく変わることになった。

(2) 活動

1) 地域での活動の中止、参加の自粛

東北や熊本など被災地支援のため物販という形で参加していた「堺市民センター祭り」、地域住民と学生たちとの交流の場としての「竹カフェ」、長年続けていた子どもセンターの支援、さらにはこれまで支援活動をしてきた被災地の訪問などが感染防止のため中止、あるいは参加を自粛することになった。地域貢献活動への助成金「地域にスマイルを届けよう活動助成金」についても申請がなかった。

2) これまでの活動についての報告会

① 町田市生涯学習センター「学生活動報告会【ガクマチ EXPO】ミニイベント」(2020 年 11 月 28 日 [土]) オンライン(Zoom 利用)

町田市、相模原市などで地域活動をしている各大学の 6 つの学生団体が「コロナ禍で感じている学生の思い」や「with コロナの地域活動」をテーマにトーク。学生スタッフ 2 人が参加し、うち 1 人は「学生ファシリテーター」として司会を担当。

② 第 14 回町田市市民協働フェスティバル「まちカフェ!」(2020 年 12 月 7 日 [月]、8 日 [火]) オンライン(多摩ボランティアセンター Facebook 利用)

町田市で活動する NPO 法人や市民、学生の団体が、12 月 4 日(金)~13 日(日)までの 10 日間、オンラインや市内での分散開催の形でワークショップやトークセッションなど、団体ごとの企画を実施。学生スタッフ 7 人が参加し、「私たちのボランティアを語る」というテーマでこれまでの東北地方などでの活動を詳しく紹介した。

③ 第 7 回大学生ボランティア活動報告会&イベント(2021 年 2 月 14 日 [日]、3 月 8 日 [月]~15 日 [月]) ボラネット多摩公式 YouTube チャンネル、イオンモール多摩平の森

2 月 14 日、多摩地区 5 大学の 11 の学生団体が作成した動画とゲストとのトークセッションが YouTube で配信され、3 月 8~15 日の 1 週間、イオンモール多摩平の森店で活動のようすを紹介するパネル展示を開催。学生スタッフ「チーム気仙沼つながり騎士(ナイト)」の代表 1 人が参加。

④ 町田市生涯学習センター 学生活動報告会【ガクマチ EXPO】「つながり発見!オンライン旅に出かけよう!」(2021 年 3 月 21 日 [日]) オンライン(Zoom 利用)、

①に続き「コロナ禍におけるボランティア活動」をメインに、各大学の 8 団体が現在の活動状況や今後の展望についてパネルディスカッションと交流を実施。学生スタッフ 4 人と小職も参加。学生 1 人は、この回でも「学生ファシリテーター」として司会を担当した。

これまでの交流を通して構築された学生間の信頼を基盤に、具体的かつ建設的な提案ができた。これまでの被災地支援の経験やそこから得られた教訓をもとに、「次は自分たちが被災者になる」ことを想定した今後の活動や連携について話が進み、地域の大学間での防災ネットワーク構築、各キャンパスが避難所として機能できるか否かなど時間が足りないくらい白熱した議論が続いた。今後に大きな期待がもてる有意義な催しであった。

3) 実地の活動「和紙キャンドルガーデン-TOHOKU2021-」(2021年3月11日[木])
東京ミッドタウン

多摩大学の学生が主催する東北の被災地からのメッセージの記された約1万個のキャンドルの展示を中心としたイベント。学生スタッフ「チーム気仙沼でつながり騎士(ナイト)」の6人が参加し、運営を支援し、活動を記録した冊子を配布した。

(3) 新年度に向けて

2020年度は、新型コロナウイルス感染症(covid-19)の大流行という想定外の未曾有の事態の中で、さまざまな活動を凍結せざるを得なくなった。多摩ボランティアセンターでは2009年の創設以来の二つの基本方針——「学生スタッフによる自律的な企画運営の推奨」と「地域との絆の強化」という原点に立ち返り、まったく新しい発想と方法で活動の再構築を考えている。

学生たちは、被災地支援のための物品開発、製品化についても引き続き試行錯誤を重ねている。以前お世話になった外部団体からも、オンライン上でプログラミングを行い、ロボットを動かしてアート作品をつくりあげる企画の提案があった。また、学内でもコラボできそうな企画がさまざまある。

再起動、再構築のスタートは、まずこのキャンパスから。学生たちとしっかり議論をしながら新しい形で活動を再開しなくてはならない。皆が初めて歩く道だ。ともに「歩きながら」、少しでも明るい方角を目指して進んで行かなければならない。

2020年度 多摩ボランティアセンター来室者数集計

	来室者総数(人)	学生(人)	その他(人)	相談数(件)※	開室日数(日)
4月	0	0	0	0	5
5月	0	0	0	0	0
6月	0	0	0	0	12
7月	9	6	3	7	21
8月	1	1	0	1	15
9月	6	4	2	4	22
10月	6	6	0	3	22
11月	10	10	0	10	18
12月	2	2	0	2	19
1月	3	3	0	3	16
2月	1	1	0	1	18
3月	4	3	1	3	23
合計	42	36	6	34	191

※相談数は来室し教職員に何らかの助言を受けた人をカウント
 ※来室者総数には、学生スタッフの人数は含まれていません。

多摩ボランティアセンター 学生団体の紹介 ～学生スタッフのことば～

気仙沼でつながり騎士（ナイト）（被災地支援）

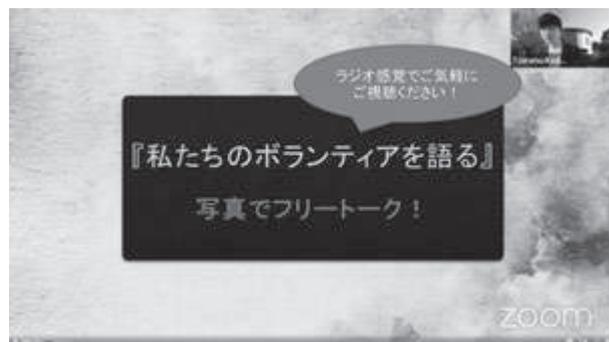
私達は、東日本大震災で被災された宮城県気仙沼市と、多摩地域で主に活動を行っています。現地活動では、震災の伝承館を訪れたり、現地の住民の方々の公演を聞いたりするなど、学び、伝える事を大切にしています。多摩地域では、防災に関するイベントやワークショップ等に参加しつつ、私達の活動とそこで学んだ事、感じた事を発信しています。

私達の団体はこれまで、コロナ禍などの影響で活動の内容も大きく変化しましたが、活動を行う上で必ず大切にしてきた事は、「気仙沼市で起きた震災の記憶と、市の魅力の発信」です。しかし、活動を行うごとに、私達は、気仙沼市について知らない事、分かっていない事も多くあるという事に気づきました。コロナ禍で現地へ活動に行く機会がなかった事も理由の一つですが、コロナ禍に行った活動の中でも、私達がこれまで行った活動とそこで感じた事の発信をしても、私達が活動を行った範囲内でしかお話などが出来なかった事を実感しました。今後は、コロナ禍の落ち着いた具合によって、課外活動の有無は変わってきますが、それでも気仙沼市の事を常に考え、出来る範囲で調べる、疑問を持つなどの事を前提とした上で、学生に出来る事は何かを考え、今必要な活動をしていきたいと思ひます。また今後は、これまで行ってきた活動内容にとらわれず、大学の中のボランティア組織として、これまであまり目を向けてこなかった周辺地域の子ども達や学生に向けた活動も視野に入れていきたいと思ひます。

2021年度 気仙沼でつながり騎士（ナイト）代表 山中 一智也



ガクマチ EXPO



まちカフェ



和紙キャンドルガーデン

2020年度・多摩ボランティアセンター活動報告

実施日	プログラム	団体名、講師、協力先
7月18日(土)～19日(日)	第35回堺市民センター祭り	堺市民センター祭り実行委員会
8月7日(金)、28日(金)	子どもセンターばおイベント「ばわぼふ」	子どもセンターばお
8月21日(金)	子どもセンターばおイベント「レザークーホルダー工作」	子どもセンターばお
9月6日(日)	子どもセンターばおイベント「パパと遊ぼう」	子どもセンターばお
11月28日(土)	学生活動報告会【ガクマチ EXPO】ミニイベント	町田市生涯学習センター・さがまちコンソーシアム・桜美林大学・玉川大学・へりぼーと・大学コンソーシアム八王子
12月7日(月)～8日(火)	第14回町田市市民協働フェスティバル「まちカフェ！」	町田市地域活動サポートオフィス・町田市市民部市民協働推進課
2月14日(日)、 3月8日(月)～15日(月)	第7回大学生ボランティア活動報告会&イベント	イオンモール多摩平の森・多摩地区5大学・日野市社会福祉協議会・Gakuvo
3月11日(木)	和紙キャンドルガーデン -TOHOKU2021-	多摩大学・東京ミッドタウン
3月21日(日)	学生活動報告会【ガクマチ EXPO】 「つながり発見！オンライン旅に出かけよう！」	町田市生涯学習センター・さがまちコンソーシアム・桜美林大学・玉川大学・へりぼーと・和光大学・大学コンソーシアム八王子・MSP

概要	場所	学生参加者数	(内)留学生数	備考
被災地支援活動熊本チームによる「益城町を応援しなかつ茶!クッキー」の販売	堺市民センター			コロナ感染防止のため中止
乳児と保護者を対象とした体操や工作イベントの補助	子どもセンターばお			コロナ感染防止のため不参加
子ども向けの工作イベントの補助	子どもセンターばお			コロナ感染防止のため不参加
就学前の子どもと父親を対象とした手遊びイベントの補助	子どもセンターばお			コロナ感染防止のため不参加
主に町田・相模原地域で地域活動を行う学生団体によるオンラインでのパネルディスカッション	オンライン 町田市生涯学習センター	2	0	
オンラインによるトークセッションと活動報告	オンライン 町田市内各地域での分散開催	7	0	
他大学と合同で行う被災地支援ボランティアの活動報告会	オンライン イオンモール多摩平の森	1	0	
東北の方々のメッセージを届けるイベントの運営支援と活動紹介ブースの運営	東京ミッドタウン	6	0	
主に町田・相模原地域で地域活動を行う学生団体によるオンラインでのパネルディスカッション	オンライン 町田市生涯学習センター	4	0	

1. 学生活動報告会【ガクマチEXPO】ミニイベント

1. 日程 2020年11月28日(土)
2. 場所 Zoom、町田市生涯学習センター
3. 概要

主に町田・相模原地域で地域活動を行う大学の学生団体が、オンライン生配信を利用して「コロナ禍で感じている学生の想い」や「with コロナの地域活動」をテーマにトークセッションを行った。

本学学生スタッフ2名を含め、6団体が参加した。

4. 学生参加者数 2名

5. 参加学生の感想

今回のイベントを通して、大学周辺地域で活動する多くのボランティア団体と交流することができたことをとても嬉しく感じています。今後は多摩ボランティアセンターとしても是非コラボレーションしていきたいと考えています。また、リモート続きで活動から疎遠になりつつある私たちが団体の経験を語ることで、私たちの理念や置かれている状況を改めて再認識することができました。

社会学部社会学科3年 児玉 務

私はガクマチEXPO ミニイベントに、学生団体をまとめる“学生ファシリテーター”として参加しました。イベント当日は司会をしたのですが、Zoomウェビナーを使ったため来場者の方の反応が見えず、どんな表情をして話せば良いのかと最初は緊張していました。しかし各団体のパネリストの方とパネルディスカッションを行ううちに、だんだんと緊張が解けていき、楽しくイベントを終了することができました。まだまだ改善するべきところは多々ありますが、無事にイベントが終わって良かったです。

現代福祉学部福祉コミュニティ学科3年 海老沢 真由



学生スタッフによる活動報告



トークセッション

2. 第14回町田市市民協働フェスティバル「まちカフェ！」

1. 日程 2020年12月7日（月）～8日（火）

2. 場所 多摩ボランティアセンター Facebook

3. 概要

町田市で活動しているNPO法人や市民活動団体・学生団体が、12月4日（金）～13日（日）までの10日間、オンラインや市内分散開催の形でワークショップやトークセッションなど、団体ごとの企画を実施した。

多摩ボランティアセンター学生スタッフは、12月7日（月）、8日（火）の2日間、「私たちのボランティアを語る」をテーマに、オンラインによるトークセッションを行った。

4. 学生参加者数 7名

5. 参加学生の感想

初のFacebook Liveということもあり、初めはトラブルもありましたが、充実した対話を行うことができたと感じています。

社会学部社会学科3年 児玉 務

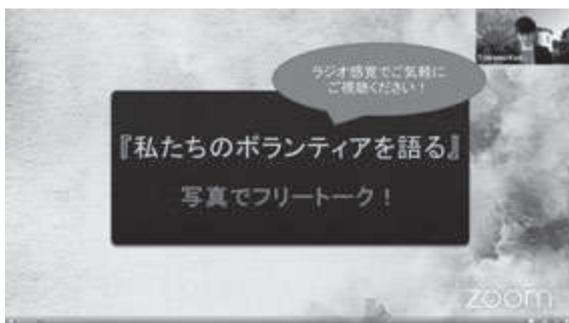
今回オンラインで、経験したボランティアについて自由に語り合いましたが、次からはもう少し現地について魅力などを発信するのも良いかと思いました。

社会学部社会学科2年 山中 一智也



活動報告をする中で団体ごとのオリジナリティが出せた。また活動を振り返るきっかけにもなった。どのような部分が相手にとって魅力的に感じるのか、他者目線を知ることができた。視聴者のコメントに気づけない場面があったので気をつけたい。

社会学部メディア社会学科2年 今井 彩里衣



テーマ「私たちのボランティアを語る」



気仙沼の活動報告



熊本の活動報告



参加した防災イベントの紹介

3. 第7回大学生ボランティア活動報告会&イベント

1. 日程 2021年2月14日(日)、3月8日(月)～3月15日(月)

2. 場所 ボラネット多摩公式YouTubeチャンネル、イオンモール多摩平の森

3. 概要

2月14日(日)に、多摩地区5大学の学生団体が作成した動画とゲストとのトークセッションがYouTubeで配信され、後日3月8日(月)～3月15日(月)の1週間、イオンモール多摩平の森にて、活動パネル展が行われた。

本学の学生スタッフ「チーム気仙沼つながり騎士(ナイト)」を含め、11団体が参加した。

4. 学生参加者数 1名

5. 参加学生の感想

被災地支援系のボランティアサークルやチームの人と、活動の継続や内容について話したり、考えを共有できるとても貴重な時間でした。現地の方とお話できたことも、モチベーションのアップにつながりました。今回参加された団体の皆様とのお話や動画をもとに、活動のあり方を考え、これからも頑張っていきたいと思いました。

社会学部社会学科2年 山中 一智也

「日常」を守るために、「日常」を取り戻すために、わたしたちができること。

あの日から、10年。

2/14 日曜日

被災地と多摩地域の架け橋

第1期 YouTube 10:00～11:00
トークセッション「私たちの10年間」
出演 松原 浩、カネトキアキコ(元)増原 幸和(現) 被災地でボランティア活動を行う5人学生

第2期 YouTube 13:00～15:00
10分動画「あの場所は現在、わたしたちは現在」

主催 法政大学 社会学部 社会学科 2年 山中 一智也



公開した活動紹介動画



展示したパネル

4. 和紙キャンドルガーデン—TOHOKU 2021—

1. 日程 2021年3月11日(木)

2. 場所 東京ミッドタウン

3. 概要

多摩大学「日本大好きプロジェクト」に所属する学生が主催する、東北3県(福島・岩手・宮城)の方々からのメッセージが書かれたキャンドルの展示や自分たちの支援活動報告を通じて、被災地の想いを広く伝えるためのイベント。宮城県気仙沼市で支援活動を行うチーム「気仙沼でつながり騎士(ナイト)」が参加し、イベントの運営支援や自分たちの活動を記録した冊子の配布などを行った。



4. 学生参加者数 6名

5. 参加学生の感想

2011年～2021年で和紙に書かれている言葉が変化していることに時の重みを感じた。2011年は「がんばろう日本」「負けるな」など力強い言葉が多かったが、2016年は「復興が進み少しずつ笑顔が戻ってきました。」など前向きな言葉も少なくなかった。最後の今年には震災とコロナを重ねたものや「忘れないで」などの風化を防ごうとする言葉が多く、改めて伝承の必要性を感じた。

社会学部メディア社会学科2年 今井 彩里衣

この催しは今回で最終回ということでしたが、企画の大学を手本として、リーダーシップや指示を出す時に必要なことを具体的に学び得たと思います。

経済学部国際経済学科2年 鈴木 響香

たくさんの方に来場していただけるイベントのスタッフの一員として活動できて思い出に残りました！

現代福祉学部福祉コミュニティ学科1年 矢野 聖悟

こんなに多くの学生が東日本大震災を支援したいと考えていること、また多くのお客様とお話する中で、東日本大震災に関心がある方がたくさんいることがわかって、本当に参加して良かったなと思いました。もっとこのような活動に参加し、気仙沼の魅力を伝えていきたいです。

社会学部メディア社会学科1年 成田 亜澄



約1万個のキャンドルに火を灯しました



自分たちのブースで活動記録冊子等を配付

5. 学生活動報告会【ガクマチEXPO】 「つながり発見！オンライン旅に出かけよう！」

- 1. 日程 2021年3月21日(日)
- 2. 場所 Zoom、町田市生涯学習センター
- 3. 概要

主に町田・相模原地域で地域活動を行う大学の学生団体が、オンライン生配信で開催した活動報告会。前回11月28日(土)のミニイベントに引き続き、「コロナ禍におけるボランティア活動」をメインテーマに、現在の活動状況や今後の展望についてパネルディスカッションと交流会を行った。
本学学生スタッフ4名を含め、8団体が参加した。

- 4. 学生参加者数 4名

5. 参加学生の感想

私はガクマチ EXPO に、参加団体を取りまとめる“学生ファシリテーター”として参加しました。本番当日は司会を行ったのですが、11月のミニイベントで同じく司会をした経験があったため、さほど緊張はしませんでした。それでも、本番前は視聴者の方が少なかったらどうしよう、パネルディスカッション中は話が続かなかったらどうしようと心配はつきなかつたです。ですが、前半のパネルディスカッションも後半の交流会も終始和やかな雰囲気が進み、オンラインでありながらも、“つながり”を感じられたイベントになりました。このイベントに参加者のひとりとして関わられたことを、とても嬉しく思っています。

現代福祉学部福祉コミュニティ学科3年 海老沢 真由

多摩ボランティアセンターは被災地支援団体として参加し、特に玉川大学太田ゼミの方々と「災害対策」の視点から今後の活動や団体間の連携について情報共有を行いました。大学間での防災ネットワークの構築や、各キャンパスの避難所としての機能を高めていく取り組みなど、私たちが被災者になることを想定した災害対策にも注力していくべきであると実感しました。

社会学部社会学科3年 児玉 務



全8団体が参加



学生スタッフの団体紹介

小金井ボランティアセンターについて

- 2020年度 小金井ボランティアセンター活動の概要、活動総括
（小西 克巳 小金井ボランティアセンター長）・・・・・・ 85
- 2020年度 小金井キャンパス ボランティア活動カレンダー（参考）・・・・・・86
- 2020年度 小金井ボランティア活動・研究公開サポート制度採択状況（参考）
・・・・・・87

小金井ボランティアセンターの活動の概要

小金井ボランティアセンター活動総括

小金井ボランティアセンター長 小西 克巳

小金井ボランティアセンターの2020年度の活動は、新型コロナウイルスの影響により、そのほとんどが中止、または、規模を縮小し参加者を限定して実施となった。昨年度と同様に、2回の学内献血、東小金井駅主催イベントへの出展、技術連盟による工学展、老人ホームでのクリスマスコンサートへの参加、地域農家の手伝いが予定されていたが、これらの全てが中止となった。小金井祭で実施された体験教室は、例年は中学生以上の地域住民の方々を対象としていたが、小金井際の参加者が学内関係者に限定されたため、対象を学内関係者に限定して実施することとなった。校内のゴミ拾いは、出勤したボランティアセンターの職員により実施された。

コロナ禍ではソーシャルディスタンスが重要となり、小金井キャンパスのみならず、市ヶ谷キャンパス、多摩キャンパスでも、その活動が制約された。このような状況は2021年度以降も続き、今回のパンデミックが収束後も同様な状況が再度訪れる可能性もある。今後は、このような状況においてボランティアセンターが何ができるか、どのように貢献できるかを考えていく必要がある。理系キャンパスという特徴を活かしたオンラインによる活動など、様々な貢献が考えられる。パンデミックにおけるボランティアセンターの活動をどのようにするかを学生自らが考えることで、ボランティアを通して学生の成長を促すというボランティアセンターの目的が達成されると思う。

このような学生によるボランティア活動をサポートする体制を整えておくことがボランティアセンターの役割である。小金井キャンパスでは、ボランティア活動に直接関わる専属学生が少ないという問題を抱えており、この問題についても解決していきたい。

2020年度 小金井キャンパス ボランティア活動カレンダー（参考）

小金井ボランティアセンターではまだ組織だったボランティアセンター活動が実施できていないため、例年、参考として小金井キャンパスのボランティア活動について報告している。

2020年度の小金井キャンパスのボランティア活動について、新型コロナウイルス感染症対応の関係で、学外からのボランティア行事の中止が相次ぎ、参加できなかった。また、小金井祭等の学内行事については、秋学期以降に参加者を学内関係者に限定して段階を踏んで実施した状況で、近隣地域への連携を主とする活動としての機能を全く果たせなかった（詳細は下表参照）。

イベント名等	内容	2019年度		2020年度の実施状況
		実施時期	ボランティア参加者数	
学内献血	日本赤十字社主催の学内献血に工体連が実施協力。	6月18日	5名	日本赤十字社からの申出により実施中止。
nonowa 東小金井「家族の夏祭り」参加	JR 東小金井駅主催イベントで、小金井企画実行委員会が理科体験教室のブース出展（対象：地域住民・子供）。	8月3日～5日	5名	nonowa 東小金井が開催を中止。
学内献血	日本赤十字社主催の学内献血に技術連盟が実施協力。	10月2日	8名	日本赤十字社からの申出により実施中止。
工学展	技術連盟が工学展で理科体験教室を出展（対象：地域住民・子供）。	11月1日～3日	42名	技術連盟が開催を中止。
小金井祭での体験教室企画	小金井企画実行委員会が理科体験教室を開催（対象：地域住民・子供）。	11月1日～3日	101名	小金井企画実行委員会が参加者を学内関係者に限定して開催。
小金井祭での研究室紹介	小金井3学部の6研究室の研究室見学を開催（対象：中学生以上の地域住民）。 ※参加研究室のうち申請した2研究室に対し「ボランティア活動・研究公開サポート制度助成」制度を適用。	11月2日～3日	101名	小金井企画実行委員会、小金井祭を参加者を学内関係者に限定して開催し、研究室紹介はポスター展示で出展。
老人ホームでのクリスマスコンサート参加	近隣老人ホーム主催クリスマス会に工学部マンドリンクラブが演奏参加。	12月中旬	32名	主催者が開催を中止。
農業サークル「あぐり」による地域農家の手伝い	農業サークル「あぐり」が年間を通じ地域農家の手伝いを実施。	4月～11月	60名	大学の指示で課外活動を自粛。
校内タバコ吸殻・ゴミ拾い	ボランティアセンター小金井職員が年間を通じて校内のタバコ吸殻・ゴミ拾いを実施。	4月～3月	1名	出勤したボランティアセンター職員が実施。

2021年度に向け、新型コロナウイルス感染症対応を万全にしながらの活動再開を検討したい。

以上

2020年度 小金井ボランティア活動・研究公開サポート制度採択状況(参考)

小金井キャンパスで実施しているボランティア活動・研究公開サポート制度の採択状況について、下記の通り報告する。

記

1. 小金井ボランティア活動・研究公開サポート制度について

本制度は、小金井キャンパスにおける地域貢献を目的としボランティア等の活動を活性化することを目的に、2016年度より新設された。

小金井キャンパス周辺地域（小金井市・西東京市・三鷹市・武蔵野市・国分寺市・調布市）を対象としたボランティア活動や小金井祭における地域住民への正課研究の公開を目的とする活動をする小金井キャンパスに在籍する学部生・院生及び登録団体に対し、1回の活動につき10万円を上限、一団体年間2回まで助成する。企画の実施期間について、申請年度中に活動を実施し、完了することが条件となる。

活動実施1か月前までに申請することが必要で、毎年度12月上旬を最終受付としている。

2. 2020年度の応募・採択状況

2020年度は2件の応募があり、全件採択された。

団体名	事業名	実施期間	助成額（円）
理工学部創生科学科 田中研究室	小金井祭研究室紹介 学際宇宙ゼミナールの研究室紹介・星野村プロジェクト	11月5・6・7日	100,000
生命科学部環境応用化学科 高井研究室	材料物性化学研究室紹介	11月5・6・7日	58,520
合計			158,520

以上

2020 年度採択された

助成金一覧・メディア掲載一覧

2020年度採択された助成金一覧

- 社会福祉法人 千代田区社会福祉協議会「養成事業助成金」に採択（市ヶ谷）

助成活動名：災害救援ボランティア講座 ⇒報告書はP69～70を参照

- 公益財団法人 大和証券福祉財団「令和元年度（第26回）ボランティア活動助成」に採択（市ヶ谷）

助成活動名：東北被災地ボランティアツアー ⇒報告書はP45～46を参照

2020 年度 法政大学ボランティアセンター 活動報告書

発 行 2021年6月

発行者 法政大学ボランティアセンター

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

Tel:03-3264-9516 Fax:03-3264-5728

E-mail:ichigaya-vc@hosei.ac.jp

印 刷 株式会社エイチ・ユー 学内印刷室



法政大学

市ヶ谷ボランティアセンター
市ヶ谷キャンパス外濠校舎1階
学生センター内
〒102-8160
東京都千代田区富士見2-17-1
TEL:03-3264-9516
FAX:03-3264-5728
Mail:ichigaya-vc@hosei.ac.jp

多摩ボランティアセンター
多摩キャンパスEGG DOME 2階
〒194-0298
東京都町田市相原町4342
TEL:042-783-2073
FAX:042-783-2074
Mail:tama-vc@hosei.ac.jp

小金井ボランティアセンター
小金井キャンパス
管理棟2階小金井学生生活課内
〒184-8584
東京都小金井市梶野町3-7-2
TEL:042-387-6041
FAX:042-387-6201
Mail:kgakusei@hosei.ac.jp